

# マンガ大賞<sup>2019</sup>受賞!!

## 彼方のアストラ



ありがとうございます!  
ございます!

篠原健太

# マンガ大賞2019決定! 選考員コメント掲載!



# マンガ大賞2019 大賞受賞作品

少年ジャンプ+ / 集英社

## 「彼方のアストラ」篠原健太

### 選考員コメント・1次選考

- 5巻完結している作品ですが、完結しているからこそおすすめしたい作品。伏線が張られているなんて気付かずに読んでいた1巻から3巻。4巻で急にあの場面は伏線だったのか！と思わせる急展開。怒涛の伏線回収が始まり完結5巻に繋がります。この面白さは一気に読まないと分からない。5巻と短めですが、設定からキャラに至るまでよく考えられていると感じますし、読み手に対しての期待を裏切らない面白さです。これこそ漫画の面白さ。

三省堂書店海老名店 / 近西良昌

- 伏線回収の妙も気持ちよかったです。それもこれも、“仲間がそこにいるのなら、恐くたって手を伸ばすんだよ！”という篠原健太流少年マンガの魅力あってこそ！ 全5巻、マンガ一気読みの面白さを久しぶりに味わえました。

会社員 / 末永龍介

- マンガ大賞の難点はほぼすべてが連載中であるため、その時は最強の漫画ではあるがその後はそう（最強）とは限らないことにある。比べてこの『彼方のアストラ』。全5巻で完結されており、後半の畳みかえるような複線の回収とその意外性の連続には思わず息をのんだ。古くは『15少年漂流記』アニメで言えば『銀河漂流バイファム』、子供たちだけで困難に立ち向かうというテーマは普遍的であり、年齢問わず感動できる。

リリカル株式会社取締役デザイナー / 北山友之

- 青春、SF、ミステリー、全5巻の最高の締めくくりでした。

オフィスオーガスタ / 樋口健

- えっあのコメディマンガの人がSFを…?って思いましたが土下座してお詫びしたい。これがとんでもない大傑作！！SFとしてもミステリとしても青春群像漫画としても素晴らしい！！篠原さんがこんなにストーリーテラーだったとは！！読後感も爽快で、とにかく万人にオススメです。

主婦 / 安田奈緒美

## 選考員コメント・2次選考

- もう今回は絶対ダントツでこれ！！本格SFであり本格ミステリであり、同時に王道友情青春ものでありグダグダ脱力ギャグものであり。1作品にありとあらゆる漫画の面白さが詰まっているという満漢全席フルコース的な作品。年齢性別問わずすべての人々にオススメしたい。というか実際家族や知人に読ませまくりました、ええ。

主婦 / 安田奈緒美

- 惑星キャンプに参加した高校生達の数奇な運命に、ハラハラドキドキ。5巻完結という潔さの中に、常に笑かしてくれたり、泣かされたりと、あっという間に読破です。

マンガ家・マンガ編集者専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

- ミステリー、SF、笑い、友情、成長とエンタメ要素てんこもりで、かつ見事な大団円を迎えた奇跡的作品。すさまじい完成度。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 5巻という巻数で畳みかけるようにまとめ上げる作家力が素晴らしいと思いました。キャラクターの魅力があるのが勿論、短い巻数の中でメンバーたちが互いを信頼していく流れもきちんと説得力があり、素晴らしかったです。「アイ・イエー」という言葉が最後にいくにつれあたたかい言葉に感じられるようになりました。

会社員 / 工藤圭

- 正直最初は苦手かも…という印象から読み始めて、読み進めていくうちにどんどん引き込まれて最終巻では泣かれました。読後の爽快感、充足感がすごくて「マンガって面白い！」って素直に楽しめる作品です。一気に読みできて良かったです！

主婦 / 紺野泉

- いや、もう、先入観なしで、とにかく読んでほしいです。とくに10代の少女少女に。しっかりとしたストーリー、魅力的なキャラクターたち、一人一人が負っている物語、冒険のロマン、そして、衝撃的な展開も！わくわくしたい方、進路や将来に迷っている方、マンガにストーリー性を求める方。みなさんにお勧めしたいです。最後に一言だけ。「ありきたりな宇宙冒険ものじゃないぞ！」

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

- 宇宙の彼方に飛ばされた主人公たちが様々な困難を乗り越えつつ絆を深めていくSF青春劇。5巻でまとめられた濃密なストーリー展開と伏線回収は見事。話が進むにつれシリアス度が増してくるが、読み終えたときに大きな爽快感が残る。登場人物の一人一人にきっちりスポットが当てられ、キャラが立っているのも素敵。一気に読み推奨の秀作。

弁護士・長島大野常松法律事務所 / 三村 量一

- いろんな要素がたくさん詰まっていて物語が進むにつれて増えていく伏線も見事に回収されていて、たくさんの人に出会って欲しい作品でした。

ロングランプランニング株式会社 マネージャー / 小森和博

- 乗組員がそれぞれの特技を活かしながら、宇宙を漂う王道派な冒険活劇かと思ったのだけど、ミステリー要素と魅力的なキャラクター達に安心して面白がることできる！

女優・ジェネラリスト / 大倉 照結

- 今どきたいへんクラシックな正統派少年SFマンガで驚いた。お話が最初の時点で完璧に作り込まれており、最終巻での伏線の回収が見事。作者の誠実さに拍手を送りたい。自分の世代では、諸星大二郎の「ティラノサウルス号の生還」や佐々木淳子の「ブレーメン5」を思い出す。若い世代の感想が訊きたい。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 自分だけが知ってる良作マンガだと信じてたのに、こういった場でタイトルが挙がるのは寂しいような嬉しいような。ギャグありミステリーありの最高のSFストーリーです！

会社員 / 齋藤隼

- 今回のノミネート作は全部自分のツボに来る作品でとても迷いましたが、マンガ大賞のコンセプトである「誰かにオススメしたくなる作品」という基準で選ぶと間違いなくこの作品が一番でした。誰かにマンガを薦めるときは、その人が普段どんなマンガを読んでいるかをリサーチしてその人の好みに合いそうなものを薦めるのですが、この作品は読んだときの衝撃があまりに大きく、とにかく一人でも多くの人とたかぶる気持ちを共感したくて誰彼かまわずオススメしまくりました。なんのネタバレ情報も頭にいれずに、全5巻を一気読みして欲しいです。数々の謎がどんどん解き明かされていくのが爽快ですよ！

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 古いようで新しいSF というか、今っぽさをすごく感じる作品でした。

公務員 / 東くるみ

- SF か～苦手なジャンルだな…なんて私でも、魅力たっぷりのキャラクターとストーリーにぐいぐい惹き込まれました！ぜひいろいろな世代の方に読んで頂きたい作品です。きっと誰しもが子供の頃に読んだ冒険物語のようなワクワクとドキドキを体験出来るはずです。

商品企画 / 畑中瀬路奈

- マンガ大賞の難点はほぼすべてが連載中であるため、その時は最強の漫画ではあるがその後はそう（最強）とは限らないことにある。比べてこの『彼方のアストラ』。全5巻で完結されており、後半の畳みかえるような複線の回収とその意外性の連続には思わず息をのむ。古くは『十五少年漂流記』アニメで言えば『銀河漂流バイファム』、子供たちだけで困難に立ち向かうというテーマは普遍的であり、年齢問わず感動できる。エンディングがいつまでも続いて欲しいなぁと願うほどファンになってしまった。今年はこれが一番！

リリカル株式会社取締役デザイナー / 北山友之

- 読み始めたときと読み終わったときの印象がまるで違う作品でした。謎が二重にも三重にも仕掛けられていて、次々と明かされる「そうだったのか！」という展開に引き込まれます。SF、コメディ、恋愛、ミステリと様々な角度から読むことができ、飽きさせないテンポの良さも魅力的で、幅広い年代が楽しめる物語だと思います。

主婦 / 堀江千秋

- めちゃめちゃドキドキしながら猛スピードで読んでしまいました。

PENICILLIN / HAKUEI

- スケットダンスからのファンなので、今回のノミネートがとてつもなく嬉しいです！ずっと登場人物たちの日常を読んでいたと思わせる作品を作ってくれるのですが、ラストに向けて確実に物語を進めていく様子に篠原先生のメッセージを感じる気がします。前作も今作もいつかまたショートで描いて欲しい！！

バンドマン / ターシ

- アニメ化が決まってしまいましたが、昨年の完結から、推しまくっているの、是非とも更なる読者増大を目指したく、選びました。5巻という短さの中に、マンガの凄さが詰まっている絶品。伏線の張り方、そして回収。若さ故の友情や裏切りからの信頼、そして成長。まとめて読めば分かるエンターテインメント性。とても満足なマンガです。オススメしたい作品。

三省堂書店海老名店 / 近西 良昌

- 王道SF！こういうの待ってたのー！と言う感じ。少年たちが不慮のアクシデントで彼らだけで投げ出されるって、十五少年漂流記からのスタンダードだけど、それでもドキドキしながら読んじゃう。そこに作者さんの表現の上手さを感じます。

鳥取県高等学校美術教員 / 佐川由加理

- 見事に少年マンガでありながら、上質なSF！次のページをめくるのが楽しみで仕方ない、あの感情を呼び起こしてくれる。かといって先が楽しみになるだけの薄い漫画ではない。そのあたりに篠原健太さんの芯の太さを感じつつ、5巻でスッパリしっかり終わらせるあたりにも清々しい何かを感じる次第です。

音楽家・農家 / 谷澤智文

- わくわくしながら、読みました！最初は盛り込まれるギャグについていけずでしたが、段々慣れていき最後はすっかり大好きに。読み終わった後スッキリする、数少ない漫画だと思います

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- スケットダンスの時から作者はこういうのを書きたかったんだろうなと思っていたのでさっくり入れました。ちょいちょい挟んでくるネタが懐かしい感じでこのまじです。

スタジオフーズ 代表取締役 / 小林智之
- 終盤のシリアスな展開でもユーモアをふんだんに混ぜ込み一味違うSFになっている。

あゆみ BOOKS / 太田和成
- 上手い、の一言！5冊の中に、これだけの展開と数々のSF要素を見事に詰め込んで、しかし最後まで爽やかに読み切らせるのは本当に！すごいと感じた。アニメ化も決まっているんな人が薦めるんだろうし、それだけの理由もある。今回、個人的には読む機会を得られてよかったとし、二次選考に残らなければ読むこともなかったかもしれないと思うと、感謝を込めて。

フリー / 田中香織
- 読み終わった後、面白かったと素直におもいました。展開のテンポの良さと作者の、ノリ突っ込みみたいな感じの入り方が非常に良いですね。話の伏線の回収の仕方も綺麗に入っており、読み終わった後におもしろかったー！と言えるステキなマンガでした。

デザイナー / 平沼寛史
- 完璧で完璧すぎるSFミステリー。私は一体何をよんでいたのか…と唸られることうけあい。ほんとに完璧に完結しているのです。さいこうかよ。

オリオン書房アレア店 / 池本美和
- 最後まで夢中で読みました！SF知識がなくても楽しめる冒険もので、11人いるとか好きな人は是非とも読んで欲しい作品ですね。

bar 図書室店主 / 岡部愛
- 少年マンガにおいて全5巻の長さでこれだけきれいにまとまった作品は希少だと思います。

マンガ研究・ライター / 会田洋
- 海外ドラマに匹敵するヒキとツカミの連鎖。すばらしいストーリーテリング！とにかく面白い！

作家 / 海猫沢めろん
- 漂流という限られた状況下で、徐々に明かされる謎。物語に引き込まれて一気に読んでしまう。登場人物同士のテンポ良い掛け合い、ポケとツッコミも良い。

医師 / 岸本 倫太郎
- 一話を読んで、あ、十五少年漂流記かな、と思いました。全然違いました本当にすみませんでした(土下座)。まさかああいった方向に向かって行くとはまったく思っておらず、二転三転する物語に、とうとう最後まで引きずられて行ってしまいました。とにかく面白かった……！心からおすすめできる、良質のSFです。本当にありがとうございました。冒険科学小説や生物、植物学の好きな人にもおすすめ。5巻完結なので、どんなもんだろうと思っている方は、ぜひ一気買いして読んでみてください。とても充実した読後感を味わえると思います。

啓文堂書店 商品担当 / 山川美香
- 近未来、少年少女達が宇宙を舞台に様々な人間ドラマを通して成長してゆく…ド正統な少年漫画なんだけどサスペンシ的な要素も色濃く、読み始めたらもう止まれず一気に最後まで読んでしまいました。とにかく話が良く練られており、物語後半に向けての盛り上がりや伏線回収は見事！5巻で完結したタイミングというところも、いま読み始めるのをおすすめ出来るポイントかと思います。

会社員 / 小野塚博之
- ああスケットダンスの人ね？愉快的な冒険SFなんだね？と思っていたら、見事にしてやられました。そこで話が重くなりそうになっても、少年漫画らしい明るさで救われます。なんだ、やっぱり愉快的な冒険SFじゃん。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ
- 適応したものが生き残る星々の生態系に胸熱でした。謎解きも面白く、テンポよくまとまった映画を観たかのような、爽やかな読後感。大宇宙のカナタに星の秘密と冒険のロマンを見ました。

教師 / 持丸宏司

- 2017年に完結したものだと思い込んでしまっていたのですが、最終巻が2018年だったんですね。多くの伏線が回収されていく様と一貫されたメッセージが痛快でした。各惑星のコンセプトなども、とても面白かったですし、キャラクターごとの性格のわかりやすさやパーソナリティも嫌味がなく、とてもバランスのとれた作品で、様々な層が楽しめるのではないのでしょうか。

ミュージシャン / 杉本善徳

- もうアニメ化も決まったし、他のマンガ賞でも受賞しまくってるし良くないですか？と思いつつも、2位に上げてしまうのは、それはそれということで…。個人的にスケッチダンスから好きな作者なので、連載時からずっと追っていましたが、篠原先生の作品の魅力は何といってもシリアスとギャグのバランスの良さにあると思います。泣ける作品も笑える作品も沢山ありますが、泣き笑いが出来る作品というのはなかなかありません。ストーリーの構成や伏線などは他のノミネート作品よりターゲットの年齢が低いこともあるのか、やや単純ではあるものの、5巻完結ということも含めてまとめ方もやっぱり上手いです。ホントはもっと長く続いて欲しかった作品なのですが、最近の長い漫画に食傷気味な方には、お勧めの作品だと思います。

バーテンダー / 村井真也

- 大胆な仕掛けにジュヴナイルSFを盛り、相乗効果とインパクトを生んだ快作。この分量に纏めたのも結果的に正解だった。

ライター / 福井健太

- 騙された!!!初めはドタバタギャグコメディかと思っていたのに、心を熱くさせ、ハラハラさせ、泣かせ、そしてやっぱりドタバタした!!!大冒険あり、ロマンあり、恋愛あり、友情・努力・勝利あり、ドラマあり!幕ノ内弁当のなかに幕ノ内弁当を詰め込んだような、豪華であらゆる魅力を味わえるマンガです。次はどんなことが起きるんだろう?とワクワクしながらマンガを読んでいた、子どもの頃の気持ちを思い出させてくれました。これぞ王道これぞマンガ!いま一番人に薦めたいマンガです。アニメ化、おめでとうございます。

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

- ストーリーの伏線回収が秀悦でした。クライマックスまでの流れも面白かったのですが、クライマックスは本当に面白かったし、スッキリ締めくくって気持ちよく読み切りました。

広告会社 ブランナー / 平沼良章

- 圧倒的な完成度のエンターテインメント作品。過剰もなく不足もないストーリー、魅力的なキャラと世界観、アクション、ミステリ、SFのジャンルの組み合わせの自然な融合、どれをとっても一流。

明文堂書店商品部 / 木村 俊介

- 最初から最後までしっかり組み立てられた良いSF作品で、一気に全巻読み進められました。SFって、広げた風呂敷の中で畳みきれてない部分が残っちゃったり無理やり畳んだ感があると、読み終わった後その部分だけが印象的だったりするんですが、そういうことが無く、面白いSF映画を見終えた後のような感じがしました。

会社員 / 林 礼春

- SFとは社会批判である。SFについて言われている言葉で、私が一番好きな言葉なのですが、この作品、とてつもなく緻密に構成されたストーリーを5巻一気に読める最高の完成度を誇るのですが、(だから途中でやめるの禁止!必ず5巻まで読んで!)そのストーリーを完成させるために必要だった骨組みには、というか、「人間、せっかくなんだからやれるところまでやってないとダメでしょ!」という、すごく前向き、一方で覚悟を強いる決意、人間に対する批判が滲んでるんですね。これってある意味すごく暑苦しくて押しつけがましくなっても不思議のないところを、なんと愛らしいキャラクターたちと、その絶妙に繊細なふるまいのおかげで、ギリギリ説教くさくない、という奇跡のバランス。あ、でもそもそもの絶妙な繊細さも、もしかしたら今の繊細すぎる若い世代に対する批判なのかも…!と、明るいエンターテインメントの一方で、時代性を感じさせる作品。そういや、SF、2010年代になってこんなに真剣に漫画化されたの、そうはないんじゃないですかね、とそこにも時代性が…!と考え始めたらいくらでもぐるぐるできるのに、作品はあくまで、シンプルでわかりやすいのです!

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

# マンガ大賞2019 ノミネート作品

月刊モーニングtwo / 講談社

## 「1122」 渡辺ペコ

---

### 選考員コメント・1次選考

- 怖いよう怖いよう…不倫ものは怖いもの見たさで読んでしまうけど、面白い。どんどん怖くなるけど…

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- いい夫婦ってどんな夫婦なのか。世相的には不倫物は嫌悪感を抱く人も多いのかもしれませんが、そもそも夫婦なんて100あれば在り様も100通り。複雑なものを抱えていたってお互い必要としあっている夫婦もあれば些細なことで修復できなくなる夫婦もありますし。ある意味今時な作品だとも思いますし、「こんな夫婦もいるのかなあ。」なんて思ったりもする作品です。

会社員 / 林礼春

- 昨年も投票した作品ですが、4巻まで進んでさらに目が離せないのが今年も一票。単なるセンセーショナルな愛憎劇に終わらないのは、恋愛プロセスのなかで一応ゴールとされる「結婚」後も收拾がつくことのない、男女の「性」の問題を真摯に描いているからだろう。セックスを拒んだ妻、外に恋人を作った夫、嘘をつく妻、妻を支配する夫。誰もが加害者であり、被害者でもある。白黒に分断しない物語こそ、読み続けるに値する。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 夫婦の本音と建前、そのギャップを描かせたら当代随一の渡辺ペコ先生が描く「仲良しセックスレス」物語。妻公認の婚外恋愛を巡る、妻のモヤモヤと夫のノーテンキに全力でイライラし、予想外の展開にギャツと驚く。そんな夫捨てちゃえ、捨てちゃえとそそのかしたい欲求にもかられるけど、そうもいかない夫婦の情もわからなくても、泣けたりもする。夫婦のことは夫婦にしかわからんし、一筋縄ではいかんなーと唸りつつも、笑える複雑味あふれる一冊です。ちょっとこわいけど、男女混合感想戦やりたくなるかも。

ライター・編集 / 島影真奈美

- 4巻に突入するやストーリーがさらに盛り上がり、本当に目が離せません。夫婦って、なんなんだろう。そんなことを考え唸りながら読んでいます。夫婦のリアルから目を逸らさない渡辺ペコ先生のこと、本当に尊敬しています。

ライター / 早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

## 選考員コメント・2次選考

- いまもっとも新刊が楽しみなマンガです。読了後のなんとも言えない気持ち…恋愛とは、結婚とは、「つがいになる」とは何なんだ？ということを考えずにはいられません。ホントなんで人間はつがいになるんだろう…。その謎を抱えたまま最終巻まで読み進めたいと思います！

ライター／早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

- 不倫は文化？不倫は所詮不倫に過ぎない、っていうのを一般論の乗った作品？にうまく表現しているまあ、人の不幸は蜜の味感プラス人のふり見て我がふり直せ感な漫画でしょうか、

tetote 代表 / カ丸真

- 公認不倫という新しい夫婦関係が、ほんわかドライに始まった……と思いきや、ドロリ展開キター！「夫婦」が「22」なのが絶妙なタイトルだし、読むほどに納得な内容です。いつみても渡辺先生の作品はカッコイイです。

マンガ家・マンガ編集者専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

- だろだろから始まった話ですが、それは留まる所を知らず…巻を増すごとにやばいです。でも面白い。ただのだろだろの W 不倫の救いようのない物語ではない、それぞれの心の中のをのぞくと共感してしまう。ああ怖い面白い

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 30代・子なしの仲良し（でもセックスレス）の夫婦の夫のほうが、妻公認で不倫をする。という設定は現実社会ではありえないのだろうけれど、いや、あるかもしれないけれど、少なくともフィクションとしてはとても刺激的な題材で、先へ先へと読み進めずにはいられない。もう「若者」ではない、でも成熟というにはまだ間がある世代の男女が直面するリアルな問題をテーマにしたこれまでの作者の長編（たとえば「にこたま」とか）に比べると、リアルな問題であってもどこかほんわかした雰囲気特徴的だった「渡辺ペコ作品らしさ」が今作ではやや後退し、シリアスで逃げ場がない、ひりひりしたムードが前景化している。「美月さん」の夫婦問題、子育て問題、義母問題など、今日的なトピックをこれでもかと盛り込んでいるところは、あざといといってもいいかもしれない。「狙って獲りにきた」という印象を持つ人もいるかもしれない（現にドラマ化されたし）。でも、本作のヒリヒリとした空気、女性が男の身勝手を本気で糾弾し、激しく本音を、怒りを、悲しみを吐露する身も蓋もなさこそが、渡辺ペコさんがずっと描きたかったことなのかもしれない、などと思った。それにしても剣山は恐ろしい。刺されてもいいという覚悟がないならおとなしくしとれ、といわれたような気もします。「あなたのことはそれほど」と言われるほうがまだマシというか。それくらいこわいマンガだと感じるけれど、それでいて4巻のプラネタリウムの場面からの流れなどはぐっと心をつかまれる（それでハッピーエンドとはならないみたいだけれど）。とまれ、いいマンガは人と人とのつながりについて深く考えさせられる。マンガ大賞にふさわしい一作だと思います。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- よかれと思って黙ってるうちに、最初の気持ちどころか関係性が変質しちゃったりするんだよね、、、と、改めて読み返していて思いました。最初に読んだときは、とにかく夫のノーテンキな浮かれぶりに目が行き、不倫相手のしみじみした怖さに大注目だったはずなのに、いまは誰、というより、移ろいゆく関係が気になる。一筋縄じゃない恋愛してる友達に、あげていいかどうかは迷いどころだけど、妻はなんでも許してくれると豪語してる男友達にはそっと差し入れてみたい一冊。

ライター・編集 / 島影真奈美

- 「にこたま」では妊娠と出産、「ボーダー」では個人のセクシャリティー、「ラウンダバウト」では思春期の子どもたち。渡辺ペコ先生は、一貫して「性」にまつわるテーマを描き続けている。結婚という「ゴールイン」の後、夫婦になっても永遠に続く個々人の「性」とどう向き合っていけばいいのか。すれ違ってもお互いを憎みきれない夫婦たち、燃え上がっても愛しきれない恋人たち。彼らがそれぞれの性にどう向き合うのか、その答えが気になって、完結まで読み続けたいと思う。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- ダブル不倫の行方が気になりすぎる！大人の暗黒少女マンガともいべき怖さとリアリティがあって、ついつい惹き込まれる展開に脱帽。一体、どういう決着を見るのか……怖すぎる。あと、つい、ドラマ化されたら、誰がどの役？とか想像してしまいますね。いまもっとも続きが気になるマンガのひとつです。

菓子研究家 / 福田里香

- 「そんな夫婦もあるのか。」と、全く理解できなかったですし、つらくて読みたくない。とまで、思ってしまいましたが、読み進めていくうちに4人それぞれの心情の吐露が出てきて、「う～ん。解る。歯がゆい。解る！そうそう。」と、1コマ1コマ噛みしめながら読むようになっていきました。今は、みんな幸せになって欲しいと今は切に願っております。夫婦の在り方という部分もありますが、個々人の中での自分の向き合い方、葛藤がすごくびびし伝わってくる背を正したくなるような漫画です。

アニメイト本部 / 鈴木寛子

# マンガ大賞2019 ノミネート作品

FEEL YOUNG/祥伝社

## 「違国日記」ヤマシタトモコ

---

### 選考員コメント・1次選考

- 徐々に優しいそしてちょっと美味しそうなお話。ヤマシタトモコさんの漫画の適格でグサッとくるセリフが好き。  
カメラマン / 平沼久奈
- ヤマシタトモコさんの漫画は止まってしまう感情や揺れ動く感情の描き方がとてもうまくて好き。こちらの作品は、特に思春期の女の子の心の動きや感情がうまく外に出せない人の事がとてもよく描かれています。3巻で色々ぐっと動きます。これからが楽しみです。  
専業主婦 / 柴佳衣
- コピーでは「女王と子犬」とあるものの、寄る辺ない少女ふたりのようにも、別々の群れのけもののようにも思えるふたりの話。身寄りをなくした子どもを引き取る大人の話は数あれど、いとおしいびつさが描かれています。「違国日記」というタイトルがとてもこの物語を的確に表していて秀逸だと思いました。  
会社員 / 工藤圭
- 「HER」「WHITE NOTEPAD」どの作品も鋭いナイフのように胸に刺さり続けてきたヤマシタ作品ですが、「違国日記」は心に響くセリフのオンパレードですでに滅多刺しにされています。思春期真っ只中の人、とうに通り過ぎた人、どちらにも救いとなる物語。私とあなたは違う人間。だけど、ともに生きていくことはできる。いまの時代こそ年代問わず読まれてほしい。  
ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ
- つかみどころのない、つかめばするりと形を変えていく「こころ」が、まさにそのありようのまま、生々しくつかみだされている。お見事。  
朝日新聞記者 / 小原篤
- ヤマシタさんの描く女性たちはとってもリアルなのですが、中学生とアラフォー女性の同居生活の描かれ方もかなりリアル。楨生から朝へ向けた言葉の一つ一つが、アラフォーの私から十代の私への言葉のように突き刺さりました。  
商品企画 / 畑中瀬路奈
- 血縁というものをアテにしない家族のあり方を丁寧に丁寧に描いていて、1話読み終わるごとに、なんとも言えない深い溜息が出ます（満足感）。  
ライター / 早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

## 選考員コメント・2次選考

- 歳の差の同居という設定はよくあるが、この作品は別格でした。何と言っても言葉選びが秀逸。作家の槇生が中学生の朝を引き取り、共同生活をしていく。多感な朝とは度々衝突するが、そこで淡々とであるが詩的であり、温かみを持つ言葉で諭していく様が、何度読み返しても素晴らしい。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤 瑛

- 起きているときは大体不機嫌で一般的な意味での社会性にも欠ける小説家・槇生が、両親を事故で失った姪の中学3年生・朝（アサ）を引き取り、20歳の歳の差を越えて女性2人の共同生活を始める。ともに女性である、ということしか共通点がなく、環境の違いや世代ギャップや、世代ギャップに起因する「生きることの感じ方の違い」とかで小さな違和や時に衝突が日常的に起こるが、そうしたひとつひとつの出来事によって少しずつ、ほんとうに少しずつ2人の関係性が変化し、（主に槇生からみえる朝との）心理的な距離が縮まっていく。そんな様子が丁寧に描かれ、読み返そうと適当に開くどのページにも読ませどころや新たな発見がある。小説を読むような濃厚な手応え。人が大人になるということはどういうことなのか、についての考察が深いと感じる。異国ならぬ「違国」とは、創作に入り込んでいるときの「槇生ちゃん」が「ちがう国にいるもん」と10代特有の鋭さで指摘する姪のことばに由来するが、親の庇護（君臨ともいう）から強制的に切り離され、好む好まざるにかかわらず100%の子供でいらなくなった朝が踏み込むことになる、槇生をはじめとする「大人」の世界、異世界の住人たる大人が住む国（朝のモノログによれば「彼女の群（むれ）」）のことでもある。物語の目線が朝だからこそ、大人の所作を教えてくれる槇生が（読者から）とてもすてきに見えるのだけれど、実はその大人の槇生も迷うのだ（あたりまえ）ということも半面きちんと描かれる、その客観がこのマンガの良いところだと思う。しかし「大人ってレンジのことチンっていうよね」という指摘はそのとおりで、いまの子はいわないんだ。というか、そこにこだわる作者はほんとうにすごい。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 天涯孤独になった女の子と、孤独を愛する小説家。年齢も性格も違うふたりが、お互いの生き方、考え方、感じ方を交換し、日常を積み上げて少しずつ「家族」になっていく。その過程の描き方が絶妙で、ふたりの生活の完成形が描かれた第1話を読み返すたび、なんと完璧な構成か、と感動する。血がつながっていてもいなくても、自分ではない誰かはあくまでも「他者」である。その途方もない孤独と、救われるような清々しさ。思春期真っ只中の子どもにも、そこからサバイブした大人にも、読んでほしい物語。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- この漫画の雰囲気大好きです。主人公の不器用な感じと違国日記というタイトルがなるほどと思われました。違う世界にいる瞬間たしかに誰にもありそうな。1人からいきなりの変化に戸惑う感じが良かったです。

デザイナー / 平沼寛史

- ただただ引き込まれていった。ヤマシタトモコさんのマンガはいつも心にポッと切なさができる。そしてあたたかい。

カメラマン / 平沼久奈

- 自分が他の人と「違う」ということ、他人と自身の物事の捉え方は一緒ではないということ。ともすれば簡単に分かり合えてしまったり、逆に「人それぞれ」と割り切ってしまうような描写になるのですが、実はその時々で共感したかったり、「いや、違う！」と言いたくなったりする人の心の機微を感じられる作品だと思います。人と人との、言葉で言い表すのが難しい心の動きと距離が見えるような、非常に繊細な作品だと思います。

会社員 / 林 礼春

- この作品を読むと、他者との適切な関係についてひとしきりかんがえてしまう。「ちがう国」の人。なるほど。この考え方は、生きることを楽にするものだと思います。よめばよむほど味わい深さがある。とてもよい。

オリオン書房アレア店 / 池本美和

- 食べることそのものにあまり興味が無いはずの自分が、グルメ漫画でもないのに「いい食卓だな、美味しそうだな」と割としっかり感じられたのは、食事とともに描かれる人間たちにとっても惹かれているからなのでしょう。淡い暖かみを持った光とひんやりとした陰を携える「女王と子犬」の表情、言葉の一つ一つがじんわりと心に響いてきます。重たいかと思いきやなんだか微笑ましく優しくて、ちょっとお腹が空くかもしれない…。

会社員 / 伊東敬祐

- 分かり合えない人同士が分かり合っていく話ということではなく、分かり合えない人同士が分かり合えないまま一緒に暮らしていくという感じがとても好きです。年の差はある、理解できない部分もある、けれど尊重はする、そんな関係性が丁寧に描かれているように感じました。「違国」という表現が秀逸。

会社員 / 工藤圭

- 心の機微の描き方がとても良いです。不器用な人の描き方が愛おしく、ともするとどこかですれ違ってそうな気にもなる、ある見知らぬ人の人生のかけらを垣間見せてもらっているような。どこかにいそうな、愛すべき不器用な人たち。読めてよかったー

アナウンサー / 松尾翠

- 子供の心を傷付けてはいけない。子供に対して大人は誠実でなければならない。子供というものは、うまれた瞬間から尊くて、神聖で、だけど、その地続きにある大人は、特に尊くもない…。別段神聖でもない…(例外は認める)。傷付け傷付けられ不誠実をしたりされたりする。元々は同じものであったはずだけれど、大人と子供は違う。おそらく多くの子供は様々な傷付けられ不誠実な目に遭って大人になる。榎生ちゃんは子供の頃に呪いを受けて傷を背負ったまま大人になった。傷やら呪いやらで苦しみながら大人になって、大人になっても苦しみと共に生きている大人が子供を見た時に思うことは、「傷付けてはならない」ということだと思う。きっとそれは叶わないのだけれど、子供というものには、幸せであってほしいと、過去の自分を助けに行きたいような気持ちで思うのだと思う。しかし大人というものは、いろんなことに対してめちゃくちゃグレーで傍にいる子供に迷惑をかけているので反省した方がいい。あと子供のみなさんは大人を完璧な人間だとは思わない。大人になったらわかる。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- ヤマシタトモコさんの個性を出しつつも一般的に進めやすいマイルドさでバランスの良い良作です。かなり他の作品と迷いましたが、今このタイミングでお勧めしたい。ちょっと人間関係に疲れた時にぜひ。

WEB デザイナー / 河本 智芳

- セリフが秀逸。何気ない一言かもしれないけれど、すんなりと心に刺さる。地味なマンガかもしれないけれど、何度も読み返したいマンガでもある。人間関係、感情、心の描写が繊細かつ絶妙なバランスで描かれていて、とても読みやすいし、入りやすい。男性も是非とも読んで欲しい一冊。

三省堂書店海老名店 / 近西 良昌

- うまいなあ、としか言えない。同居人に見せる姿、友人同士に見せる姿、など、少しずつ違ったその人を描くのが巧みで、ちょっとぞっとしながらも、ふたりの今後がどう変化するのかとても楽しみ。

大日本印刷 / 佐々木愛

- 読書も、根源的には自分の中にある世界を豊かにするための営みなんだよなと。

往来堂書店 / 三木雄太

- とても繊細だけど踏み込みは深い。でも距離感が絶妙。だから重い話だけれどベタつかない。心に刺さるセリフをズバッと言いつつ人も、自分のこととなるとモヤモヤがあったりして、心のありようにしても関係のありようにしても、新鮮な「リアル」を感じさせる。ヴェールをはがすというよりも、ヴェールの1枚1枚の手ざわりを確かめさせてくれるような。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 各々が別個の人間であるということ。それを強く強く思い出させてくれる作品でした。感性や感情や考え方などすべてが違う。その事実をすり合わせながら、みんな生きている。絆の在り方や、人間の生き方、人それぞれの価値観。そういったテーマに強く惹かれました。

ジュンク堂書店池袋本店 / 杉 佳尚

- 事故で亡くなった身内の子供を引き取ってはみたものの…という出だしから始まる同居系の定番ですが、亡くなった姉との確執や他者とのコミュニケーション不全など現代的なモチーフを上手く散りばめ、その中でお互いの許容ラインを探っていく手探り感がよく描けており、丁寧に感情の機微をなぞっていく描写とテンポが絶妙な仕上がりで、読後の満足感とこれからどうなるんだろうという引きが高水準な読書体験を約束してくれる良作かと。

住職・ライター / 蟬丸 P

- 久しぶりに読んだ著者の新作は、背景の白さに違和感を感じて驚いたのもつかの間、あっという間に心を掴まれた。不器用な、でもそれを認めて自分の場所を築いてきた人が、子どもの前でちゃんと大人であろうとしてくれることが、どれだけすごいことか。むろん、本人だってそのぎこちなさを重々承知していて、なお。大人が大人であるって、大変なんだよ。子どもが子供でいることも、大変なんだけれど。だからこそ、こういう物語にはどこかで生きてほしい。きっと必要とする人がいる。物語は、誰かを支える柱だから。その人たちに、届いてくれますように。

フリー / 田中香織

- 読み始めてすぐ引き込まれる、この物語の肌触りが大好きです。「群をはぐれた狼のような目」の、繊細で不器用で、それでも前を向こうとする意志に満ちたまなざしは、ヤマシタトモコさんの真骨頂ですね。槇生と朝がたどたどしく、すがすがしく、ふたりだけの家族をつくっていく空気を一緒に感じられることが嬉しい。だって帰り道が思い出せなくなるなんて、こんな悲しいことないもん。中学生なのに。そんな朝がようやく流せた涙、槇生とその友人達との関係の温かさ、それが胸のやわやわしたところに流れ込んでいきます。あとは槇生の、自分の生きづらさとも折り合いがつけられるようになったオトナの、その心の奥に刺さった針がどう表に出てくるのが気になります。

会社員 / 末永龍介

- 少し人との距離感が遠い二人の同居物語。お互いを侵害しない押し付けのない生活を少し淡々と描いています。同居しているとギクシャクすることもあるけれど、ぎこちないながらも向き合うことから逃げない。だから、近づいたり離れたりしながら心地よい距離を保ち続けられる。お互いが醸し出す「ここにいてもいいよ」という優しいメッセージが感じられて、とても心地よいマンガです。

Sler システムエンジニア / 廣瀬公将

# マンガ大賞2019 ノミネート作品

ゲッサン / 小学館

## 「金剛寺さんは面倒臭い」とよ田みのる

---

### 選考員コメント・1次選考

- 確かに金剛寺さんは面倒臭かったり、他にもかなりクセのある個性的なキャラが登場するけど、みんな「芯がまっすぐ」というところが共通していてとても魅力的だと思う。ちょいちょい出てくる説明セリフにもあるように、物語の結末を心配せず、安心して純粋に2人の物語を応援しながら楽しめるのが良いなあと感じました。とよ田先生の作品はいつも読んでいて優しい気持ちにさせてくれるので好きです。

会社員 / 小野塚博之

- 第1話のとんでもない圧だけで分かる……これは傑作以外にないとッ!!! 変化球など必要ない、ストレートの技術を極限まで研ぎ澄ますのみだ、そう言わんばかりの著者の勢いに圧倒されました。そう、これはひたすら“素直クール”を描き続けてきたとよ田みのるの到達した、達人の境地です!

会社員 / 末永龍介

- 読み終えた後の、100mを全力疾走したような心地よい疲労感は唯一無二であるッ! 未読の方には体調を整えて読み始めることを推奨するッ! きっと幸せな気持ちになれるとお約束しようッ!

会社員 / 江本ちひろ

- 作者が好みでデビュー作の「ラブロマ」から追っていましたが、その原点であるラブコメに返ってきたように感じました。ただしテンションは超々々高めで、且つ斬新な切り口で。「手を握る」というただそれだけの行為で見開きを4連続8ページ使うマンガを私は過去に見たことが無いです。ぜひ読んで主人公2人の不器用ながら真っ直ぐな言動に尊さを感じて欲しいし、そこに巻き込まれていく本編とは関係ない登場人物に笑っていただきたい。

会社員 / 三浦佑樹

- 常に正論でロジカルで、そこに心はないと言う金剛寺さんと、そんな金剛寺さんの面倒臭いところが大好きと言う樺山くんの、ラブストーリーだったりじゃなかったり。この世界は優しく、悪いことばかりじゃないと思えてきます。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- テンション高く、明るく前向きで、読んでいてとにかく元気が出る。読んで幸せになれる作品。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

## 選考員コメント・2次選考

- こんなにメリハリのきいたギャグ漫画は初めてなのではないでしょうか！物語は地獄と現代日本がつながってしまったという突飛な設定でありながら、あくまでも2人の恋愛模様こそが至高と謳うこの漫画のコンセプトは稀に見る潔さです。このプチファンタジーな青春漫画の行き着く先はどこなのか！いや、そんなの分かりきっている！というかすでにそれすら先に描いている笑！しかし、どこなのか笑！本編とは全く関係のないところが壮大な物語です。

会社員 / 佐藤優

- ラブロマから追いつけている作者さんがマンガ大賞で推せる機会が来たことを嬉しく思います。本作はひたすら正論をぶつくる金剛寺さんと、ひたすら優しすぎる樺山君、2人の約束されたハッピーエンドを、ひたすらハイテンションで綴るラブコメです。時に本筋とは関係ない登場人物にまでフォーカスを当て、巻き込んでしまうその運命力には是非触れていただきたいです。

会社員 / 三浦 佑樹

- この漫画を一言で言い表すなら「風が吹けば桶屋が儲かる」。我々は風と桶屋の間に起こる出来事を「なんで!?!」「確かに!?!」と楽しめばいいのです。たとえばどうやってチッスでミサイルを止めるのかを。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 変化球の設定とクセのある絵柄と独特の語り口から放たれるのは、大地を砕き彼方の星へも届こうというパワーの「ド直球」。読んでいる私の額をも撃ち抜く。愛は貴い。世界は美しい。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 最高。2019年度のノミネート作品の並びでは一瞬で1位が決まった。主題は『ラブロマ』と一緒に。恋、そして愛。その主題をより力強く、より巧みに、描いている。描いているというか、謳い上げている。恋は素晴らしい。恋する二人は素晴らしい。そして恋する二人を、恋する二人として、そのようにあらしめているこの世界のすべてもまた、素晴らしい。大声で主張されているのは、そのような、バカみたいな真実だ。それが、大真面目に、大げさに、全力で、照れながら、描かれてある。あんまりそれがこっ恥ずかしいので、照れ隠しのために、この漫画はやたら実直な形で、複雑にならざるをえない。(だって恥ずかしいじゃん) けど、その複雑さ、込み入っているさまも、根が実直なものだから、どこか微笑ましくて、清々しい。面倒臭いってのはそういうことだと思う。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 感想をひと言で言うなら「ザ！漫画！！」わー！私いま、漫画を読んでるな〜！！という楽しさで心が満たされた。実験的なコマ割りや怒涛の台詞量、登場人物のあくの強さや心情表現のテクニック、何もかもが「漫画でしか出来ない」表現方法であり、きつとよ田先生もワクワクしながら描いているんじゃないだろうか。次はどんな手で読ませてくれるのが楽しみな作品。ワクワクして待ってます。

三省堂書店 / 内野智未

- 第1話の圧倒的破壊力に、こんな勢いが長く続くはずがないだなんて無用な心配をしてしまいました。すみません！ この作品は、恋をした瞬間の勢いだけじゃなくて……もっと大きな“何か”のために走り続けるんですね。この世界には地獄があり、アトランティス帝国があり、変身ヒーローが戦っていて……だけどそんな全部ひっくり返して、みんな“何か”のために生きている！ 何にもまして、樺山くんの過去の奥行には震えました。何て射程の広い、だけど最高にシンプルなマンガなんだ……。「こんなものはまだまだ序の口ッ!! 彼らはもっともっと幸せになるッ!!」、この力強い言葉と共に、僕も生きていこうと思います！

会社員 / 末永龍介

- 1ページ先も予測不能な展開！徹底して読者の不安を排除してくるハッピーなストーリー！大掛かりな設定の上で繰り広げられるかなり一般的な幸せ！いい仕事すぎるモブキャラクター！いい仕事すぎるナレーション！未体験かつエポックメイキングな読み味！なんかもうありがとうございました！！！！

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- ピッカピカの青春ラブコメとして、ストーリー自体が楽しめるのは勿論、実は漫画という表現その物についても作中で色々なチャレンジをしているので、漫画にはまだまだ可能性があるんだなーと思わせてくれる意欲作。紙とか電子とか、ツールの問題ではなく、一ページ一ページ、一コマ一コマの工夫で魅せる、唯只管描く事で漫画を盛り上げようという技量と心意気に乾杯！

(株)首都圏 TSUTAYA / 井出麻悠美

- 圧倒的な熱量を持った作品。読んでいる最中は生き生きとした登場人物たちに心を掴まれ、読んだ後は心地よい疲労感でよく眠れます。快眠のお供に金剛寺さん。

会社員 / 江本ちひろ

- まさに直球勝負、だがそれがいい！そのくせ本編とは関わりの無い物語が多い、だがそれがいい！

教師 / 持丸宏司

- 落ち込んでいるとき。つらいとき。暴力的なまでに真っすぐ前向きで、元気を与えてくれる。優しく慰めるとか、力をもらえとかいうより、謎のエナジードリンクを飲まされて体が強制的に熱くなる感じ。分類不能の、唯一の個性を持つ漫画家だと思う。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

- 使い古された手法が新しく見えてくる、そんな不思議なシーン満載…というか連続の独特な作品ですね。金剛寺さんも面倒臭いですが、自分も大概面倒臭い性格をしているらしく、いろんな人に「杉本は面倒臭いな？、もう…」と言われてきた人生ですが、これは本編とは大きく関わりのないことです。

ミュージシャン / 杉本善徳

- 絵が好きで、その絵が話の内容にとってもあっていて読み続けてしまいます。金剛寺さん実際にいたら僕もキラキラしたときめきを感じそう。面倒くささより魅力がさらに勝る（というかそれ自体が魅力になる）なんて、憧れでもあります。

Migimimi sleep tight / 涼平

- 軸にあるのは少年少女の清い「恋愛」なんだけど、話がいつのまにかゴロゴロととんでもないところに飛んで行って最終的にはいつのまにか収斂する。こういうホラ話の楽しさは、漫画を読む醍醐味のひとつでもある。彼らの、変にねじ曲がってなくて、まっすぐだけど薄っぺらくならない人間性もいい。片方人間じゃないけど。

ブロガー / マサトク

- 面倒臭いというより真直ぐすぎて眩しい、もどかしい二人が描かれた作品でした。これだけまっすぐに生きられたらと思う反面、やはり面倒臭いと思ってしまう場面もありました（笑）またいろんな行動が世界に少しずつ影響を与え変えていく…バタフライエフェクト的な描写が新しかったです。

営業大臣 / 岡村光徳

- 癖になる面白さ！で、ピュアな主人公2人と、2人に絡む人々のその後？もちょいちょい差し込まれていて、そこも含めてこれから先も見届けたい！

ロングランプランニング株式会社 マネージャー / 小森和博

- 得意な絵柄ではないので、気になってはいながらも手に取ることがなかったのだけど、これを機会に読んでみたら、何この面白さ！！高いテンションとスピード感、そしてモノログやナレーションの勢い、台詞回しの独特さが、とにかくハマります！！読んだら金剛寺さんの可愛さに虜になっちゃう。なんてツンデレ！

女優・ジェネラリスト / 大倉 照結

- とよ田みのる節が健在で、なんかとても楽しいです。ド直球がほんとたまらない。しかも、過去作よりさらにパワーアップしてる気がします。力づけられるマンガ。いいですね。

めがねっ娘教団大司教 / 田中海渡

- とよ田みのるは、濃い！！超絶公開お付き合いの「ラブロマ」も、友達100人作らないと地球滅亡の「友達100人できるかな」も、そもそも主人公たちがピンボールしかやらない「FLIP-FLAP」も、毎回、勝手な縛りプレイを作りだして、その制限から本質を掘り抜くすごい作品が多いのですが、今回は、「この物語はハッピーエンドである」と冒頭から宣言し、普通なら連載できるような大アイデアの種を「本編とは大きく関わりのない物語である」と核戦争を一刀両断に切り捨てて二人の恋愛をドンズバで描いて手をつなぐだけで4ページ、というこの超展開、で、今回掘り抜いちゃってる本質は、「恋愛って元気出るよね！」という、ホントは大切なのに、当たり前すぎたり照れくさかったりして誰も言わない大切なこと。いや、読んだらホント、元気出ますよ。

めがねっ娘教団大司教 / 田中海渡

# マンガ大賞2019 ノミネート作品

月刊モーニングtwo / 講談社

## 「ゴールデンゴールド」堀尾省太

---

### 選考員コメント・1次選考

- 5巻まで刊行されているが「フクノカミ」というものの存在の謎がまだまだ隠されているようで、未だに話の先が全く読めず、ページをめくるのが楽しみではない。常に作品全体を支配している「じとつとした気持ち悪さ」の中で、時にストーリーの面白さに感心させられ、時にギャグのような展開で笑わされることもある…そんな、なんとも不思議な読み心地を楽しませてくれる作品だと思います。

会社員 / 小野塚博之

- まさに怪作。まだオチは全然見えないけど独特の世界観と説得力のあるリアリティーで楽しく読める。

PENICILLIN / HAKUEI

- 今まで見たことのない異様なものが目の前に出た時の各キャラの反応にリアリティがあるので、世界観に引き込まれやすいのかな、と思います。5巻まで進んでいますがまだ展開が広がりそうで、でも解決への糸口が見えたようで……。次巻を楽しみに待てる作品です。

会社員 / 林礼春

- 最新5巻も虜。巻を重ねるごとにさらにあやしさと面白さが続く。海外の制作会社にドラマ化してほしい。スティーブンキングの郊外ミステリのような独特なおもしろさがある。寧島に住む奇妙なひとたち、伝説…変わっていく世界…ついに現在「フク」がついている『早坂さん』の過去と、フクノカミがどう見えているかなど核心に近づいてきている…と思うのはまだ早く、フクノカミの謎めいた行動、と想像できない面白さがなお継続。新たなフクノカミも登場し、存在を知る者の不安をあおるような不気味な動きで、このまま寧島が平和になるとも思えず…と、朝までこの謎について語りたくなる作品。

会社員 / 西尾美里

- 感情の無い笑顔の怖さ、不穏な空気の不気味さがじわじわ来る。

教師 / 持丸宏司

- より先が見えなくなってきた、わくわくしてきました。フクノカミがなんとなく可愛く見えてきた。

Migimimi sleep tight / 涼平

## 選考員コメント・2次選考

- あり得ないようであり得そうな既視感を覚えるようなリアリティーが恐ろしい。今一番新刊が楽しみな作品。

PENICILLIN / HAKUEI

- 1巻1巻、ジワジワと状況が最悪に近づいていくのに、何処かシリアスになり過ぎない、でもずっと油断出来ない不気味さを維持し続けるのが凄いです。また、笑顔で残酷な事を行う、毒を吐く際の人物の貌の表現が何て上手いんだろうと思います。笑顔の奥の内包したドロドロした表現をあっさりとし込んでくるので油断出来ないです。このまま最後まで付いていきたいです。月刊？なのかもどかしい！

バンドマン / ターシ

- 不穏な感じに引き込まれて一気に読みました。

株式会社 TORICO 代表 / 安藤拓郎

- 刻々から作者の作品は何度も読み返してしまう、1度目ではわからず2か回目は2回目、3回目は3回目などの楽しさがあり、おすすめです。気持ち悪いキャラクターも相変わらずグッドです。

スタジオフーズ 代表取締役 / 小林智之

- 毎年投票してしまっている。それもそのはず、毎巻面白さの最高値を更新しているのです。ほかにたくさんの面白いマンガがあり、読み、楽しみ、そしてまたゴールデンゴールドの新刊が出て、また「やっばこれだわー」となってしまう。その魅力は毎年書いてきたので、今回は最新刊の展開から。まだまだフクノカミの謎は解き明かされない。解き明かされないどころか新キャラが出てきている。ルックスの気持ち悪さと謎さ。フクノカミの怒り顔のシュールさを超えるあやしい見た目のなかまの登場に今後の展開が楽しみすぎて興奮。ちょっとわかりにくいたとえばもしれないけど、すごい面白い上質なミステリー海外ドラマ（あくまで海外ドラマ）を見ているかのような、読後感。続きが気になるのに、決して重くない。美男美女が全く出てこない、島生活の生々しさ、「欲」という怪しいテーマ。最高の材料はそろい、それを一つも無駄にすることなく「面白さ」に凝縮しているマンガ。少しずつフクノカミの謎に迫っているかと思いきや遠ざかっているけど、とにかく今後が楽しみです。

会社員 / 西尾 美里

- フクノカミの影響で精力的に事業拡大を進めるおばあちゃんですが、5巻ではおばあちゃんの過去エピソードが出てきます。これまでになかった「おばあちゃん視点」が入ることにより、不気味でしかなかったフクノカミ事象やフクノカミに操られているのかと思っていたおばあちゃんの願望が垣間見れて俄然面白くなってきました。

会社員 / 佐々木つむぎ

- 1巻の始めとリンクするような描写もあり、徐々に話の核心に迫ってきているような気配はあるものの、相変わらず先が全く読めなくてワクワクします。フクノカミやおばあちゃんの不穏な感じも健在で、物語全体を支配するなんとも気味の悪い雰囲気が堪りません。

会社員 / 小野塚博之

- 5巻の最後、思わず「え…」っと声をもらしてしまった。フクノカミのビジュアルはもちろん、とり憑かれた？人間の表情や行動の気持ち悪さと違和感がなんともいえない。ただただ続きが気になる。

主婦 / 赤坂真実

- 「刻々」の時よりもエンターテインメント性に富んでいつも独自の世界観描写に余念がないところが素敵です。リアルの中にある非日常の描き方がとにかく良い。出てくるメインキャラたちに共感させられつつも、何とも言えない空気感が常に付きまとい、モヤモヤとドキドキがずっとあって「続きを読みたい」と「読みたくない」のせめぎあいがある中で凄いです。

バーテンダー / 村井真也

- 田舎の街の、のどかで平和なんだけどどうしようもなく閉鎖的な感じのリアリティと「福の神」がある日突然日常に入り込んでくるというあり得なさ。少しずつ金回りが良くなっていく様子やちょっとずつ膨らむ欲望が本当に生々しいのに、福の神はというとマスコットにしたいくなるような見た目でそのギャップがザワザワした違和感を煽ってくれる。日常と非日常のズレがだんだんと小さくなってきて、登場人物たちも「福の神」の存在になんとか慣れてきているっぽいのも不気味でよい。そもそも最初の願い事ってほんとに小さなことだったんだよなあ、と1巻読み返して驚きました。そういう小さなスキマを狙ってくる存在がいる、かもしれない。会いたくないような、会ってみたいような……。

三省堂書店 / 内野智未

- 人の感情に人一倍敏感な少女と、彼女が恋する鈍いオタク男子。甘酸っぱい少女の恋と、離島に潜む黒い因縁、人間の普遍的な欲望がどのように絡んでどう展開していくのか。巻数が進んでなお面白さは加速していくばかりで、目が話せない。なにより、平穏な日常じわじわと得体の知れない「何か」に侵食されていく、ひんやりした恐怖はクセになる。トイレの裏にびっしリアルが…の場面は、リアルに悲鳴を上げること必至なので、ぜひ読んでほしい。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 福の神が恐ろしい。何とかしてよ！そう思っていた自分がもはや懐かしい（笑）福に対して様々な考察がなされるもはや人間賛歌なこのドラマ。一体ラストが如何になってしまうのか最早予想すらつかなくなってしまった。ばーちゃんは福の神に操られたのではなく元々の夢を邁進しているだけなのだとすれば。。もはや持っているかそうでないのかという運の話なのか。いやそれにしても不穏な動きが多すぎる。とにかく、はやくこのドラマを最後まで見届けたい、それだけだ。

リリカル株式会社取締役デザイナー / 北山友之

- 一番最初は、「地元で大きいアニメイトを建てて大好きな人を留めたい！」という、壮大で大変 夢のあるところからの、もう島を飛び越して日本中～世界まで、巻き込んだ怖い展開に。フクノカミに翻弄される大人たち（及川くんも…なので、子どもも？）を、もうどうしたら止められるのか全く分からない状況になって…もう、この際アニメイトが寧島に建てば フクノカミいなくなるんじゃないか。アニメイトの店舗建てる部署に頼みこもうかな。と、怖すぎて思ってしまったりしながら読み進めております。

アニメイト本部 / 鈴木寛子

- 不気味ではあるけど、ショッキングなほど怖くはない、さじ加減がとても上手いと思います。伝奇なんだけど今まで見たことのない感がスゴイ。唸らせられる作品です。あとヒロインが可愛い。（重要）

文教堂書店 浜松町店 コミック担当 / 金田健太郎

# マンガ大賞2019 ノミネート作品

トーチ web / リイド社

## 「サザンと彗星の少女」赤瀬由里子

### 選考員コメント・1次選考

- 何処か古めかしい絵柄なのに、画面から迸るエネルギーは若々しくてキラキラ！懐かしくて新しい、大人にも子供にも性別も関係無く全ての人に薦めたいくなる本当に素敵な作品。これで新人作家の一作目だなんて、この先期待しか無いです！早く映像化して欲しい。ジブリで2時間映画とか。

(株)首都圏 TSUTAYA / 井出麻悠美

- 上下巻フルカラー、全アナログ作画！王道な SF ポーイミーツガールだけど、すごくわくわくドキドキしました！シンプルな設定とキャラクターでわかりやすいけど奥深く、カッコいい！！どンドン物語に引き込まれて最後まで一気に読みました！読み終わったとき、昔のアニメ映画を1本観たような感覚で、気持ちはスタンディングオベーション！！素晴らしい！！どのキャラクターも魅力的で大好きです！友達に借りて読んだのですが、これは手元に置いておきたいと思い、自分でも買いました！

声優 / 富岡美沙子

- 王道 SF ポーイミーツガールストーリー。フルカラー。とてもワクワクドキドキさせられました。作者の真っ直ぐな気持ちが眩しいくらいに伝わり、胸が熱くなる作品です。絵柄もとても魅力的。これからの作品も楽しみです。

bar 図書室店主 / 岡部愛

- フルアナログのオールカラーで描かれた、80年代を彷彿とさせる SF 冒険活劇です。宇宙が舞台でヒロインが強気な娘なので、個人的にうる星やつらを思い出しながら読んでました。今の年代にこんな王道な作品が読めることに幸せを感じずにはいられません。もう一度言いますがフルアナログのオールカラー水彩画で描かれた、作者の情熱が込められたことを肌で感じられる作品です。もはや芸術品と言えます。個展に来て作品を鑑賞したような、素晴らしい長編アニメ映画を鑑賞したような、そんな気分になれます。

会社員 / 三浦佑樹

- 広い宇宙で出会ったちょっとセクシーな美少女、一目惚れした主人公が幾多もの困難を超えて囚われのヒロインを助けに行く、星を超える冒険！そんな直球の宇宙冒険活劇を、アナログ作画のフルカラーマンガで読む、という経験をよもや2018年にしようとは夢にも思いませんでした。お話のスケールは宇宙規模、だけどドラマは登場人物の心に寄り添う丁寧なもの。主人公のサザン、ヒロインのミーナ、バイプレイヤーの宇宙のならずものキッド達「ピクニック盗賊団」。隅々に渡るまで登場人物にはしっかりとしたモチベーションがあり、ただでさえカラフルな宇宙世界をさらに豊かに彩ってくれます。特に、囚われのミーナを救わんという一心で、何の特殊な力も持たないサザンがズタボロになりながら前に進み続ける姿は、どうしようもなく読み手を物語に引き込んでいきます。全ページフルカラーで描かれているのも、ラストの展開を観るとその必然性がわかる仕掛けになっていて、素晴らしい読書体験でした。正統派の冒険物語を欲しているすべての人に勧められるマンガです。

アニメイト秋葉原 キャラクターグッズ担当 / 岡部真矢

- 空気感、世界設定、キャラ、絵柄、色彩感どれをとっても大好きです！！ストーリーそのものには既視感もあるけど、こういう王道がこの絵で今生み出される喜びを感じます。我々世代にはノスタルジー、今の若い子にはどう映るんだろう？書籍として価格を抑えるための作者のこだわりと、それに応える編集者さんの苦勞を讃えたい。話？イイから読んでみて！

WEB デザイナー / 河本智芳

## 選考員コメント・2次選考

■ 本を開いて冒険の始まりに心がワクワクし、ページを繰って少女の苛烈な運命に涙をポロポロとこぼし、物語を読み進めて決して諦めない青年の強い気持ちに胸がドキドキとして、そして読み終えてつかみ取ったふたりの幸せに嬉しくなってニコニコと微笑む。最初から最後まで、そして読み終えてからもずっと感動が感情を揺さぶり続けてくれる物語。それが、赤瀬由里子の『サザンと彗星の少女 上・下』（リイド社、各980円）というコミックだ。ひょいと宇宙に出られるようになった時代。地球の青年たちは宇宙に働きに出るようになっていた。それというのも、地球では高性能ロボットや他の星から来た宇宙人たちが仕事をするようになっていたから。ある意味でAIの普及と外国人労働者の流入が進む日本の将来を伺わせる。もっとも、サザンという名の青年は、そうした地球から追い出されるようにして宇宙に出稼ぎに行くことを、まったく苦にはしていなかった。「宇宙ってスゲー、ワクワクしねーか?」。そんなポジティブな思考の持ち主が、宇宙にある星で造園の手伝いをしていて興に乗り、終電ならめ終宇宙船を逃してしまっただけの空間から保護膜で覆われただけの駐車場で一晩を明かす羽目となってしまった。そこに通りがかったのが、エアロバイクにまたがった赤毛のミーナという少女。サザンに「困ってんなら乗ってく?」と誘いかけた。ボーイ・ミーツ・ガール。多くの物語が傑作へと向かって進んでいった発端が描かれ、そして『サザンと彗星の少女』も大傑作へと発展していく。そこに必須なのが紆余曲折。だ。ミーナと楽しく走っていた宇宙でサザンはミーナを襲ってくる勢力の存在を知る。地球のブタに似た姿をしたキッドという宇宙人がまず現れ、そして、巨大な船を仕立ててミーナを追い続ける敵も姿を見せたことで、ミーナは自分がサザンの傍らには長くいられる身ではないことを改めて感じ取る。危険に巻き込みたくないという思いからミーナはサザンの元を離れていく。どうしてミーナはそうしたのか。それはミーナが彗星人だから。とある星で行われた実験によって生まれたミーナは、内部に莫大なエネルギーを秘めていた。それが周囲を破壊することもあったし、取り出そうとして狙う勢力もあった。キッドもそんな一団で、追われ続ける日々心傷つけられながら、それでもミーナはサザンの元を去って行こうと決心する。もっとも、サザンは誰にも増して諦めが悪かった。身を引くミーナの心の痛み、誰も見ていないところでひとりポロポロと涙をこぼすことがあるミーナの寂しさに気づいたのか、彼女をどこまで追いかけると宣言をして、キッドの船に潜り込み大勢に追われ攻められていたミーナに追いつき助けようとする。感動の再会。その際にミーナが、絶体絶命の窮地にあって強大な力を発揮して、立ち直る姿が描かれる。ずっと虐げられていた。誰からも疎まれ続けていた。そんなミーナを信じて追いかけて追いついたサザンからの信頼にミーナの気持ちが揺れ動いた。もはや相思相愛ともいえるそんなシチュエーションに、後は結ばれるだけといった思いも浮かんだその時、もっと強大な敵が現れミーナを連れ去って行ってしまふ。これはもう無理だ。さすがに追いつけない。誰もが思ったその瞬間もサザンだけは諦めなかった。たったひとりでもバイクを直して追いつくろうとする。そんなことをしても無駄だとキッドたちは分かっている、諦めさせようとして、無理だと分かるとキッドはサザンに味方をし、誰もが尻込みをするブラックホールの奥へと突っ込んでいく。その好漢ぶりにも感動だ。ブラックホールのような空間のその奥にいて、彗星の力を持ったミーナをお宝として狙っていたキッドたちとはスケールも、強さもケタが違う敵を相手に勝てる見込みなんてない。それでも諦めないサザンの頑張りに心が揺れる。一方で、ミーナをさらった謎の存在「アグルダ」がどうやって生まれ、何を思ってミーナを追いかけていたかも描かれて、望まれて生まれながらも疎まれて排除される寂しさに心を痛める。人類を敵に回して立ち上がっても当然かもしれないと思える。もっとも、それはミーナも同じ事。強大な力を持たされ、期待されながらも恐れられて追い出されたミーナにとって、他の誰もが敵と感じられて当然だった。けれどもミーナは慈しんだ。愛そうとした。サザンとの出会いがそうした前向きな気持ちを決定づけた。信頼されること。必要とされること。そして愛されること。そのことによって誰もが居場所を得て、居心地を良くして今を歩いて行こうと思うのだ。そんな気持ちにさせてくれる物語が、500ページ近い分量で、すべてカラーによって描かれている。どこか懐かしい絵柄で綴られる宇宙を飛び越えてのボーイ・ミーツ・ガールの物語から、妨げられても突破して、疎まれても憎まないで、自分を信じ誰かを慈しんで生きようとする大切さが溢れ出す。読めばワクワクと期待してポロポロと泣き、ドキドキと興奮してニコニコと笑うだろう。その先に自分が、誰かを、社会を、世界を、宇宙をそうしたいと思って歩き出すだろう。そんな物語だ。

- 今年はコレが獲らなかつたら嘘でしょ！と思ってます。もう単純に面白い！そして可愛い！カッコいい！映画や小説、漫画に限らず『物語』に触れる際のドキドキやワクワクが全部詰まった最高の漫画であると同時に、全世代が楽しめる珠玉のエンターテインメントとしてもっともっと沢山の人が読んで貰いたい名作です。作家さんが本当に一生懸命描き上げたのが全編通して伝わって来るので、上下2冊のこの本を本棚の1番良い所でずっと大切にしてください。特に漫画読み始めたばかりの小学生とかに薦めたいです。漫画ってこんなに楽しいんだよ！

(株)首都圏 TSUTAYA / 井出麻悠美

- 作品全体の熱量がものすごい。ストーリーやキャラクターのパワーのみならず、フルカラー & フルアナログ作画、一気に二冊簡潔の潔さ、分厚さ、物理的にも圧倒されてしまいました。この熱量を愛と呼ばずしてなんと呼ぶ！こういうSF待ってました！！普段は勝ち気で強い女の子を抱き締めたくなる瞬間、いつもへなちょこだと思っていた男の子が頼もしく見える瞬間、自分にとって大切な存在であることに気付き、守り守られる関係性…ああもうこれって紛れもなく愛です。緻密に作られたSFでありながらなんとなく土臭くて、すぐ隣にあるような展開で、感情移入してしまいます。応援したくなるような、逆に励まされるような気持ちになりました。あまりにもストレートに届くので、読み手も素直にならざるを得ないです。ハラハラドキドキワクワク胸キュンがいっぱい！みんなが大好きなものがたくさん詰まってるはずです。あーもう大好き。文句なしで一位です。

公務員 / 宇田川 結衣子

- とにかく絵が魅力的。お話は定番だが、眩しいくらいに真っ直ぐなメイン2人に胸を熱くさせられる。お茶目な脇役たちも最高です。少年少女たちに読んでほしいと思う。

bar 図書室店主 / 岡部愛

- ちょっとセクシーな格好の女の子を追いかけて、銀河を股にかけた大冒険。ハードSFというより、イマジネーションが彩った宇宙冒険活劇。新しくもどこか懐かしさを、キャラクターやガジェットから感じます。長谷川裕一先生のようなスケールの大きな想像の大宇宙に惹かれる人には、是非読んでいただきたい作品です。

アニメイト秋葉原 キャラクターグッズ担当 / 岡部真矢

- もっと広まって多くの人に読まれて欲しい！全フルカラーの熱量にキャッチーな内容、いつかOVA（もしくは劇場版でアニメ化されてほしい作品です。上下巻で完成される潔さ。ぜひ今年のうちにもっと知られてほしい作品です。

WEB デザイナー / 河本 智芳

- 懐かしき世界観と描写と雰囲気、30代後半の自分にとってドンピシャなマンガでした。ストーリーもまとまっていて、目的も明確。最初は敵だったかもしれないけど、いつの間にか仲間になってる。ジャンプ的要素のワクワク感に加えてジブリのような展開。たまらない内容でした。安心して読める。カラーなので、ちょっと高いですが、とても価値ある一冊です。

三省堂書店海老名店 / 近西 良昌

- 読んでいて懐かしい感じがしました。そして同時に新しさも。読み始めはありきたりな物語になるのかなぁと思っていましたが、現代社会に一石を投じる内容でした。色々なことを考えさせられます。自信を持っておすすめできると思いました。

丸善丸の内本店コミック担当 / 八重田幸子

- フルカラーということもあり、目に飛び込んでくる絵が映像のようで、この世界に入り込める。水彩なので柔らかさもあってとても美しいです。1話目がとても鮮やかで、物語の最初、このカラフルな世界を初めて見た気持ちと重なります。読んでるとワクワクする演出や言葉選び、台詞回しに心が躍り自然と口角が上がってる♪ラストへの盛り上がりも最高でした！全てのキャラクターが生き生きしているのも魅力の1つ！キラキラととにかくハッピーで大好きです！笑って泣ける最高のエンターテインメントだと思うので、上下巻ぜひ一気に読んでほしい！バーでミーナが飲んでたカクテル飲んでみたいな♪

声優 / 富岡美沙子

- 一見絵柄に好みのわかる作品かと思われるが、読んでみたらその良さがわかる！少女の青年の一途な愛の物語で、部屋を暗くして一気に読みたい作品です。暗闇でブワッとひかりながら、ストーリーが浮き上がってくる感じです。

マンガ家・マンガ編集者専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

- この全編フルカラー、フルアナログ作画で80年代を彷彿とさせるスペースオペラを今の年代で読めることに感謝しかありません。しかも本当に面白い。ヒロインのしたたかさを、私はうる星やつらを思い浮かべながら読んでおりました。内容もちろんです、アナログカラーの塗りが非常に素晴らしいです。私は絵を描くことに関しては素人なので、詳しいコメントができないのがもどかしいですが、美術的作品としても手に取っていただく価値がある一冊だと思います。

会社員 / 三浦 佑樹

- 上下巻500ページ、全編がオールカラーという仕様にまず驚きました！しかもアナログ！水彩！どれだけの時間がかかっているのでしょうか。絵の力がすさまじく、まるで初めてマンガを読んだ子供時代のときのようにドキドキしっぱなしでした。色づかいもとても美しく、欲を言えばもっと大きなサイズで見たいくらいでしたが、版型を小さくすることで小学生でもがんばれば買えるお値段設定にしてくださっているそうで、たしかに小学生にも読んで欲しい、ワクワクとドキドキがたくさん詰まった王道の冒険活劇でした。そういうジャンルのマンガや映画をたくさん見てきた大人には少し王道すぎて先が読めてしまうストーリーかもしれませんが、先を気にせず、一瞬一瞬をかみしめて読んでいるうちにいつのまにか結末まで連れて行かれたという感じがしました。どうぞ、心を子供時代に返して読んでみて下さい。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 分厚い単行本が上下2巻。全編、水彩絵の具で彩色したフルカラーというところにまずは惹かれた。1ページ1ページ、きれいでとても引き込まれた。モノクロのマンガには長い歴史があって、それゆえに磨かれた表現手法があるのだけれど、21世紀になってからすでに20年近くが過ぎて、デジタルを通じてさまざまなエンターテインメントが身近に手に入る中で、マンガといえども総天然色の魅力には抗いがたい。いち読者として、これからフルカラーのマンガがもっと読めるといい、その呼び水になればということで、本作を推したいと思います。ともに宇宙を舞台にしたSF作品で、かたや遺伝子工学、かたやAIと今日的なモチーフを意識していることへの好ましさもあって「彼方のアストラ」とどちらを選ぶかかなり迷い、投げ出したくなった。2作両方ともを推す気にはならず、洗練度で圧倒するジャンプ連載作品「アストラ」をほぼ選ぶつもりだったのだけれど、荒削りなところもないではないが好ましい勢いがある「サザン」がデビュー作ということを変えて考えると、次回作も読んでみたい、と思直した。担当編集者の方によりウェブで公開されている一文「連載開始から単行本化までの舞台裏」を読んだことも、本作を最終的に推す理由になったかもしれない。強い意志だけでなく、強い運を持って出てきた漫画家さんだと思います。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 宇宙で謎の美少女を巡る冒険という王道のストーリー。絵柄が懐かしくも新鮮で、漫画を読んでいるというよりアニメをみている感覚でした。オールカラーで繊細に描き込まれた絵と、王道でもしっかり引き込む展開で楽しく読みました。

主婦 / 堀江千秋

- テンポ良く展開する王道的ストーリーと鮮やかな色彩に心躍らされるまま、ラストまで一気にその宇宙を駆け抜けていくこの快感。暖かく痛快な「色」とりどりのキャラクターたちも魅力満点。今のこの時代にフルアナログ・フルカラーで描かれたことに確かな意味、価値を感じる名作。

会社員 / 伊東敬祐

- 全ページフルカラーのこの漫画の綺麗さが印象的。少し懐かしさもある雰囲気のマングでした。出会った少女を助けに行くという、シンプルな感じがまたわかりやすく、作品にはいりこめました。

デザイナー / 平沼寛史

- 80年代マンガ。私はドンピシャ世代ではないものの、その世代のマンガが好きだ。やっぱり伝説の作品がたくさん生まれているし、今読んでもすっごく面白い。でもずいぶんそのころと手法は変わってきている・・・でもあえての今、この作品はフルアナログ作画。とにかく絵が美しい。子供に読ませる絵本の絵にしてほしいくらい。色彩と緻密な線で描かれる世界は非日常感があって、疲れた頭に癒しをくれる。星々の世界に思いをはせたくなる。。。鳥山明さんの「ギャル刑事トマト」を初めて読んだとき、絵がめっちゃくちゃいいけど、ストーリーが思ったよりカジュアルだなあという思った過去の体験、それを思い出した。ストーリーはまだやや想像がつくところもあるけどそれでも十分面白いし、これからさらにオリジナリティあふれる作品がどんどん生み出されてきたら楽しみだな・・・と思うと作者の赤瀬さん自身にも注目したくなった1作。

会社員 / 西尾 美里

- 絵柄やキャラクター像にSFの設定もどことなくノスタルジックで一定の年齢以上の漫画読みには懐かしさを感じる作品。「読んでみたい候補」に入れていたけどそのままになっていたのでこの機会に読めたことに感謝したい。ヒロインが強くて可愛くて、主人公はちょっとヘタレだけど一途で熱い心の持ち主、間抜けな悪役がいつしか仲間になりさらわれたヒロインを助けに行く。とどめは美形の冷徹な悪役に悲しい素顔が隠されているという、王道中の王道、ど真ん中一直線。もうこれ以上ないくらい分かりやすい、でもみんなが大好きなものが詰まっている。シンプルイズベスト。きっとこれからも繰り返し読みたくなる作品。大事にします。

三省堂書店 / 内野智未

# マンガ大賞2019 ノミネート作品

ハルタ / KADOKAWA

## 「ダンジョン飯」 九井諒子

---

### 選考員コメント・1次選考

- ファンタジー世界のパラダイムシフトともいえる作品です。倒したモンスターは食べられるのか？という奇想天外の発想。中世ヨーロッパ風の舞台なのに、栄養バランスがやたら近代的という設定ですが、まあ、そこはお約束。でも、食べることで元気になり、更に冒険に力が入るという設定は、ロジ部分が軽い扱いをされがちなファンタジーにおける大人のたしなみ、ということ。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

- 巻数が増えるに従って登場人物も増え、そのキャラクターが魅力的なのも素晴らしく。でもダンジョン飯をダンジョン飯たらしめるのはやはり初期パーティの4人。キャラクターが増えてもこの4人がしっかり核になっているから全然ブレない。基本コメディなのに実はシリアスで、笑わせつつも話はしっかり進んでいる物語の作り込みも流石です。

主婦 / 堀江千秋

- 毎年推させていただきます。これだけ連載が長く続いているにも関わらず！です。それ程、毎話毎話展開が読めない＆面白いのです。もっともっと沢山の人の手に読んで欲しいなあ。

商品企画 / 畑中瀬路奈

- ダンジョン飯は、マンガ大賞を獲って然るべき作品だと思ってます。ここんところ毎年投票してコメント書いてるので、今年はこれ以上言うことがないっす。

音楽家・農家 / 谷澤智文

- 結局、物理的に一生食べられないものが一番食べたい。これはもう性癖かもしれない。何度も何度も何度も書きますが、フードまんがとして最高におもしろい。冒険の仲間の珍道中を最高の画力で描いた傑作です。ぜんぜんゲームをやらないわたしでも、これはゲームのお約束をギャグにしたり皮肉ったりしているんだな、とちゃんとわかっておもしろいってすごい構成力だと思います。ゲーム好きにはたまらないだろうなと想像にかたくない。最新刊で新展開があったのも押した理由です。まだまだ連載は続きそうなのもたのしみです。

菓子研究者 / 福田里香

## 選考員コメント・2次選考

- 数年にわたり高評価を維持してる同作品。「いまさら」感がないわけではないが、新規読者・読まず嫌い未読の方々にはこの機会に改めておすすめしたい。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 何度読み返しても、とにかく楽しい！狂いのない確かな画力を眺めるだけでも楽しい。読むたびに、実存しない架空の魔物料理を食べたくなるって、すごい画力と構成力です。個人的な希望としては、アメコミの着彩担当のひとにカラーリングしてもらったカラーバージョンとか読んでみたいです。気がつかなかった伏線を読み返して確認したりして、ずっと長く愉しめるのは良書の証ではないでしょうか。

菓子研究家 / 福田里香

- ダンジョン×架空メシ。アイデアの勝利！

作家 / 海猫沢めろん

- ファンタジーものにもいろいろ派生的なジャンルが出てきているので、「モンスターを食べる」展開も真新しさは薄れているかも知れません。でも、スライムやドラゴンをどう調理するか、どのような食感であるのか、という見方は、ある意味とてもリアルでもあります。ゲームに出てくる敵モンスターは倒されると「消えてなくなる」ものが多い中でリアリティの追求とも言えるでしょう。シリアス方向に向かいながらも、そこそこで食の大切さを力説するギャップも好きです。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

- 最初は、ダンジョンで「飯」を食う話だけかと思っていたが、巻数が進むにつれて、人間模様や描写が素晴らしい。シリアス度が増していて、今後の展開もますます気になる。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- 軸となるストーリーだけでなく、楽しめる要素が盛りだくさんだが、混乱しない作品。家族で楽しく読める。

自営業 / 小野ゆうこ

- 妹さん救出という初期目標達成で一段落かと思いきや、さらに新たなる展開で、単なる飯モノと一線を画す世界観の緻密さと広がりを見せつけられますと文句無しなんですが、世間的には「え、今頃？」と言われること確実というジレンマがもどかしい。しかし、それらを覆す作品のパワーと完成度はやはり段違いなので、大賞枠ではなく殿堂的なのにかをそろそろ考えた方が良いのではという気も。

住職・ライター / 蟬丸P

- 2018年の新刊も面白かったです。ストーリーの奥行き感とキャラクターの呑気感の落差が半端ないって。

公務員 / 東くるみ

- 緻密に計算された世界観とキャラクターたちのバランスが本当に素晴らしい！巻を重ねることに解き明かされていくダンジョンの謎と、人間模様のこの先が気になって仕方ありません。あと個人的には緻密に描かれたダンジョンの装飾などにも非常にワクワクします。

商品企画 / 畑中瀬路奈

- すごく変なマンガなんだけど、画力と構成力で説得力があってテンポよく読める。

PENICILLIN / HAKUEI

- 相変わらず、ファンタジーなのに何故か納得してしまうモンスターの調理法の数々。発想が素敵すぎます。1巻1巻のギャグもシリアスも、ハッとさせられる台詞もツボ過ぎて好きすぎる。そして毎巻ラストに掲載されるオマケ漫画のクオリティに感謝しか無いです！

バンドマン / ターシ

- 九井諒子先生が描くモンスター達がどれをとっても、魅力的だ。動く鎧やバジリスク、ゴーレムなどファンタジーRPG好きには堪らない。そしてそのモンスターを如何に料理していくのが毎話楽しみでしようがない。コミカルな部分だけではなく、冒険者同士の人間関係やシリアスな場面も読みごたえがあり、とても満足感が高い作品。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤 瑛

- 安定した面白さです。安定しすぎてて、選ぶのにも躊躇しました。アニメ化よりも実写化してくれないかな、、、

スタジオフーズ 代表取締役 / 小林智之

- この時代、楽しく生きていくために必要な要素とは。柔軟さとタフさではないかと思います。そして、この時代に求められていることは、「多様性」ではないでしょうか。完璧な人間なんていない。不完全な人間同士、許容し合い、支え合い、学び合う。この漫画に描かれているのは、実はそういうことなのかもしれない。

音楽家・農家 / 谷澤智文

- ノミネートし続ける限り推したいです。話が長く続いても、当初の「ダンジョン飯」というコメディ要素はしっかり残しつつ、物語がどんどん深みを増しているところが素晴らしく、新しく出てきたキャラクターも魅力的です。実は結構な長編作品になるのでは？と予想しているのですが、これからも続きを楽しみにしています。

主婦 / 堀江千秋

# マンガ大賞2019 ノミネート作品

Elegance イブ / 秋田書店

## 「風のお暇」コナリミサト

---

### 選考員コメント・1次選考

- 今新刊を心待ちにしている作品の1つ。あの小さなアパートに住むいろんな住人のいろんな人生がとても現実味があってそしてでもみんなそれぞれ小さな幸せをもって読んでいて心が暖かくなるまた、なんてひどい男だ！と思ってた人が裏を見たらただ不器用だったり、可愛く見えてきた…

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 昨年出た4巻もすごく刺さりました。読みながら心の中で「ああ————」って何回も言ってたと思う。全く同じじゃないけど、あー私もこれだわ、私もこうだわ、ってたくさんの方が感じたと思います。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

- サクサク読めるけど味わい深いです。つい、何度も読み返してしまいます。空気を読むばかりが人生じゃないな、と。ゆっくりと立ち止まって、これまでの物語を振り返りたくなります。

教師 / 持丸宏司

- 共感できること間違いなし。そして、凧を応援したくなる。今、自分がいるところ、やっていることが正解かどうか、思わず考えさせられてしまう。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- 続きが気になりすぎて掲載誌まで買うようになりました。共感を求める作品では無いと思うんですけど読んでいてざわざわしちゃいます。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- キャッチコピーそのままに「人生リセット物語」なのですが、ちょっと心を病んでドロップアウトしたら、とても癒されたり、さらに病んだり、と中々気忙しいお暇なお話です。人物描写があまりにリアルで、まるで現実にいる人の話しかと思えるくらいに等身大な物語だと思います。読んでいて本当にありそうなお話なのでカナリ読んで心を驚つかれました！

会社員 / 佐藤優

- 年若い女子の心の闇を描きながらも、どこかポップ。容赦なく追い詰められる場面もあるけれど、最後の最後で前を向く力がもらえる。凧ちゃんの奮闘をこれからも応援したいです。

ライター / 早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

## 選考員コメント・2次選考

- 「共感できる！」と思える人も多いはず。人間関係に疲れて、全てリセットして、新しい人生を生きてみたいと一度は思ったことあるのでは？現代社会をリアルに表現していて、屈の一步步前進していく姿を応援したくなる作品。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- 空気読めないOLの再起物語、なんですが色々と考えさせられる作品です。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- 慎二のことを実際にいたらちょっと苦手な人だなあと感じていたんですが巻が進むにつれてむしろ実際にいたらとても魅力的な人物なんじゃないかと感じてきました。登場人物の掘り下げがしっかりしているのでどの人間にも良いところが見えてきてしまう素敵な作品。

Migimimi sleep tight / 涼平

- 私は空気が読めなくて人に疎まれるので、空気を読めるということ自体、すごいスキルですよ。屈はものすごいハイスペック女子なんです。だから自分が幸せになるためにその能力を遺憾なく発揮してほしいです。誰かに美味しい空気を用意してもらうんじゃなくて、自分で生み出せるから。屈なら美味しい空気の自給自足できると思う。いっぱい吸い込んで！

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 屈の節約ネタから共感度高いです。

マンガ研究・ライター / 会田洋

- 「妙齢の女性あるある」と思うが、剥いても剥いてもその空気の底が知れない。げに女の世界は生きづらい、ということか。マジに主人公の屈には幸せになって欲しい。あと、とくにドラマ化の話が来てるだろうけど、安易な企画に飛びつかず、やるならじっくり良い脚本、良いキャスティングでやって欲しい。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 毎巻、予想の斜め上に行く展開で目が離せない。最新刊で登場する新キャラは悪役ではなく、なるほど？と唸る、どこまでも女子に寄り添うような性格の持ち主にしていて憎めない。そんなところに、作者のただならぬストーリーテラーぶりを感じます。なにげなく新キャラの足下を描いたコマを差し込んでいるのですが、それで彼女は常にヒールとわかる。雨の日も高いヒール（たぶんレインブーツなのかな）で出勤する描写も秀逸。それは、なめられないための、せめてもの抵抗なのだと思われているのです。マンガ巧者！RO-MAJI NO RANGAI HOSOKU MO 70NENDAI-FU DE EGARA TOAIMATTE SUGOKU KAWAII.

菓子研究家 / 福田里香

- ひょっとしたら男性と女性で異なる相手に感情移入するかな？巻が進んでいくにつれ、我聞くんは同情というか応援したくなってくるといえるか。我聞視点で読み返してみるとまた違った味わいで面白かったです。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

- 自分のことが一番見えない、ということを読んでつくづく感じさせられます。器用・不器用はあっても、みんな感じることなんじゃないかな。

会社員 / 林 礼春

- シビアでシリアスな描写もたくさんあるのに、いつだって屈ちゃんの冒険を追っかけると楽しさがあるのが素晴らしいです。毒とポップのブレンド感にしびれながら、これからもいち読者として伴走を続けたいと思います。

ライター / 早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

- これからどうなるのか、ワクワクソワソワです。できたら、ガモウくん、むくわれると良いな…と思います。、もし、むくわれたら、今度は少しでも良いから、素直に接して欲しいです。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

- 巻を追うごとに凧の性格の悪さが露呈し、同時に愛おしくなり、読まずにいられません。というか性格の良し悪しくて、なんなんでしょうね。。

会社員 / 江本ちひろ

- 最初から面白いと思っていましたが、3巻の時点では強く推す気になれませんでした。ちょうど凧がゴンちゃん沼にはまってげっそりしている頃で、読んでいてあまりにつらすぎたからです。このまま、もっとつらい方に行くのなら、ちょっとついていけんなーとすら思いました。しかしよかった！ 凧は自分で自転車をこいで、海にたどり着いた！〈道を間違えるのはこわいけど／もしかしたら／間違えたり立ち止まったりしたからこそ／見えるものがあったりするのかも〉。思わずフセン貼りましたここ。さらに感心したのは、そのゴンちゃんも、あの我聞君も害毒ダメ男として切り捨てず、彼らの変化の兆しも描いているところ。特に我聞君は、オレ様で自己中で粘着質な性格は最初から変わっていないにも関わらず、読者の目にだんだん違って見えてくるのは見事です。こういう「女ひとり、迷い道」(←演歌か?) 的なマンガは最近けっこう多いですが、それぞれのキャラクターの掘り下げで、本作は頭一つ抜けています。今なら自信を持って押せる！

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

- 人生の夏休み漫画。可愛い絵柄なのに、読んでいると精神がゴリゴリ削られる。現状に不満や不安があるけどなんとなくやりすごして生きている人が読むと、ちょっとつらくなる。けど、主人公や周辺の人物が成長したり吹っ切っって前進したりするのをみると、希望と元気をもらえる。慎二頑張れ。

主婦 / 赤坂真実

# マンガ大賞2019 ノミネート作品

ハルタ / KADOKAWA

## 「ハクメイとミコチ」 檜木祐人

---

### 選考員コメント・1次選考

- 「今晚は楽しい時間を、過ごせたかしら？」 繰り返し覗き込みたくなる色鮮やかな世界は、巻数を重ねてなお健在。大人だからこそ楽しめる話こそあれど、小さい頃に出会っていたならどれだけ想像力や好奇心を掻き立てられたことか。可愛いも美味しいも楽しいも詰め込まれた世界が少しずつ丁寧に広げられていくページを、これからも一晩ごとに噛み締め続けられたら幸せだなと思います。親子でも読んで欲しい名著。

会社員 / 伊東敬祐

- 一話一話で小人たちの生活を丁寧に描写する。プチトマトが抱えるほどの大きさになり、身長ほどもある梨の皮をむくのも一苦労。だが、小人たちの作るご飯が美味しそうでそそられる。街並みや住居の調度品に至るまで世界構築に空きがない。登場人物の着ている服のデザインも秀逸。説明口調の表現はないのに、生活のディテールがリアルに伝わってくる作品。

弁護士・長島大野常松法律事務所 / 三村量一

- 森に住む、身長9センチの小人と生き物たちの日常を描いたマンガです。練りこまれた設定で、主人公であるハクメイとミコチと、その周りの魅力的な登場人物が描く独特な世界観は絵本を読んでいるようです。

会社員 / 三浦佑樹

- いかにして楽しんで生きるか。その方法が描かれている気がしてならない。ファンタジー、しかしリアル、そして美しい。

音楽家・農家 / 谷澤智文

- ホッコリしたい、癒されたい人にオススメしたい漫画！キャラクター一人一人が個性的で非常に生き生きと紙面で動いて、最早暮らしている、といっても過言ではない姿が魅力的。読むと小人達の日常に本当に加わったように感じられる、いわば非日常に没入できる作品。絵の描き込みにも感嘆の一言。

ジュンク堂書店池袋本店 / 杉佳尚

## 選考員コメント・2次選考

- ゆっくり流れる時間の中で、身の丈にあった生活を営む。今の世界ではなかなか困難なことを自然にこなす物語に憧憬を覚える。その世界では根っからの悪人は現れず、心休まる暖かさがある。

医師 / 岸本 倫太郎

- キャラクターひとりひとりがとても魅力的に描いてあり、作者の愛情を感じる。親子で楽しく読める世界観。

自営業 / 小野ゆうこ

- 作画、世界観、ストーリー。全てが非日常をもたらしてくれるに十分な傑作。大好きです。

ジュンク堂書店池袋本店 / 杉 佳尚

- ファンタジー、しかしリアル、そして美しい。楽しく、そして豊かに生きる方法が描かれているように感じます。慌ただしい日々、ホッとひと息入れさせてくれるような。忘れかけていたことを、ふっと思い出させてくれるような。知らなかったことを、そっと教えてくれるような。とても素敵な漫画です。

音楽家・農家 / 谷澤智文

- 手に取って見てまず画力がえげつないな—と思いつつ読み進めて。するする読ませる構成もすごいけど、どのお話も最後に持ってくる一押しがすごい。なんというか、異常な確さでツボを押してくるんですね。なんだろう、マンガの楽しさってこれだっていう感じで思わず笑いが出ます。そう来たか！って言う。正にお勧め。

めがねっ娘教団大司教 / 田中海渡

- ファンタジーの生産と消費が歪む中、正統派の佳作が支持されるのは大いに好ましい。

ライター / 福井健太

- 前から推しの作品なので、ノミネートされて、嬉しかったです。絵が本当に綺麗で、お話はほんわかとしていて、物語りの中に入り込んだような気持ちになります。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

- アニメ化もしたしもう勧めなくたって読んでるんじゃないの？って気もしますが、実は読んでなかった作品。改めて読むとその書き込みの密度に驚かされ、ストーリーやキャラ作りの丁寧さに圧倒されました。ノミネート決定後に一気に読みましたら疲れてしまいましたが、少しずつ時間をかけて読み直したい作品です。

WEB デザイナー / 河本 智芳

- ファンタジーなんだけど、小物や文化に手触り感（生活感？）がちゃんとあって、すごく親近感を感じる優しい作品。眠れない夜用の一作。安らぎますわ。

文教堂書店 浜松町店 コミック担当 / 金田健太郎

- 小さな人たちの、それぞれの暮らしを覗かせてもらうお話。某、とんがった帽子の妖精さんが好きだった私には堪えられなかったです。毎日一話とか、ちょっとずつ読みたい。くたびれた心に効きそうな気がします……。

啓文堂書店 商品担当 / 山川美香

- 小さくてかわいらしくて心地よい世界に癒やされる。それでいて毎回、題材に驚かされて、引き出しの多さにうなる。料理にしても服作りにしても木工にしても、手ざわりや重みや味（着心地や使い心地）がしっかり伝わってくる画力に感心。対象への愛にもあふれている。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 丁寧に、本当に丁寧に描かれる世界に引き込まれます。ただ眺めるだけでも美しい画面に加え、細やかに設定が考えられているのが感じられて大好きな作品です。背景がしっかりしているからこそ本当にこの世界が存在するように、キャラクターたちが生きているように思える素敵な作品です。

会社員 / 工藤圭

- 身長9センチメートルのこびと女の子とであるハクメイとミコチの日常を綴った作品です。作りこまれた世界観と圧倒的な作画力、魅力的な登場人物達に心を奪われ続けております。アニメも素晴らしいので併せてお勧めしたいです。

会社員 / 三浦 佑樹

- 実は、2年くらい前に職場仲間に勧められてたんです。でも手に取る機会がなくて。。このたび、初めてしっかり読みました。勧められたときに読まなくて後悔。どこから読んでも、どの話を読んでも、心が温かくなります。いろいろ懐かしくなります。小人のハクメイとミコチの日常が、とても鮮やかに、そして深みと広がりをもって描かれています。ほっこりしたり、ちょっとしんみりしたり。読み終わると優しくなれる作品です。さあさあ、お勧めですよ。お読みください。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

- 一話一話で小人たちの生活を丁寧に描写する。プチトマトが抱えるほどの大きさになり、身長ほどもある梨の皮をむくのも一苦労。だが、小人たちの作るご飯が美味しそうでそられる。街並みや住居の調度品に至るまで世界構築に空きがない。登場人物の着ている服のデザインも秀逸。説明口調の表現はないのに、生活のディティールがリアルに伝わってくる作品。

弁護士・長島大野常松法律事務所 / 三村 量一

- ちっこい奴らと動物たちが実直に生活積み上げてるな～マンガ。ちっこい奴らの生活が、妙に落ち着いてて、読んでいて心地良い。魔法成分少なめの「地に足の着いた生活」なんだけど、なんせ体長9cmの連中のやることなんで、「地」も「足」も良い意味での絵空事。ふかふかしている。その軽やかさが楽しい。ファンタジーとしての「佳き生活」ってやつかな。それこそ高野文子の『東京コロボックル』じゃないけれど。1巻、2巻ならば、まあそのようなウェルメイドな小品、って感じだったんだろうけど、それがもう7巻ともなると、わりと読み応えのある幻想世界になってきてる。シュッと筋の入った世間が見えてきて、それもまた良い感じだ。「足下の歩き方 ハクメイとミコチワールドガイド」も楽しめた。ごろ寝しながら眺めよう。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 初期の話の流れから一気に物語の背景が広がってきました。日常の中に潜む、自分にもあるはずの勇気を思い出させてくれる漫画です。

Migimimi sleep tight / 涼平

# マンガ大賞2019 ノミネート作品

アフタヌーン / 講談社

## 「ブルーピリオド」山口つばさ

### 選考員コメント・1次選考

- ああ、好きなことがなにか、わかるって幸せなことだよなあ、うん。そう本に話しかけながら読んでしまった作品。好き。

啓文堂書店 商品担当 / 山川美香

- その人が見える世界を、その人なりに語る術を得た瞬間に立ち会うことが、こんなに心を震わせられるものだとは思わなかった。その道が一般論では決してまっすぐなものではないと解っていながら止めようがなく惹かれていく心を、こんな風に描けるなんて。何かに心が奪われること。その気持ちに、きちんと向き合い道を決めること。当たり前かもしれないけれど、だいぶ前に通り過ぎてしまったような気がするその姿勢に、思わずこちらの背筋まで伸びた。道を決めかねている人、自分の選択に自信がまだ持てない人、そして好きなものに好きと言いつらい人にはぜひ読んでほしい。こんな向き合い方も、こんな選び方もある。もがいても、目をそらさない在り方があるんだって、知ってほしい。

フリー / 田中香織

- 「頑張れない子は 好きなことがない子でしたよ」また一人、素敵な先生に出会えました。その言葉が正解か不正解かは正直わからないし、その二択での判断がそもそも違うかもしれないけど。それでも、一つでもいいし沢山でもいい、ただとにかく好きなことに人生の大きなウェイトを置くことを大事にしたい。大事にしたい。僕はそう思えたし、思っていきたいし、一人でも多くの人にも思ってもらいたいと、この作品を読みながら感じています。

会社員 / 伊東敬祐

- 絵の才能以外に何も無い、いわゆる「社会不適応的」主人公（マンガでは普通によくある）じゃなくて、むしろ社会に過剰なくらいに適応できている主人公が、それでも、やむにやまれず芸術という荒野に踏み出す。このありそうでなかった（難しい）設定で、ちゃんと王道の「熱血マンガ」になっていることを高く評価したい。よくテレビで「感動をもらいました」とか言うけど、その感動って誰のものなんだ？と、この作品を読んで初めて思った。絵の本質をわかりやすく伝えてくれる話運びもすばらしい。美術が「文字じゃない言語」だとしたら、マンガは「文字だけじゃない言語」なんだろうね。

読売新聞文化部編集委員 / 石田汗太

- 天才ではない主人公の藝大受験を描いており、天才が多い中でスタートも遅い主人公がどのようにアプローチしていくのが毎話楽しみ。

あゆみ BOOKS / 太田和成

- 作内の絵を描くことから逃げてないだけでもうえらい。傑作。

作家 / 海猫沢めろん

- ある日、「美術」の魅力に目覚めた高校生が美大受験を志す成長譚（現在までのところ）。「美術」というテーマを除けば、少年マンガの王道的導入だが、学校教育で誰もが触れたことのある美術というモチーフを選んだことで読者の気持ちにグッと近づいている。美大受験についてのリアルな事情、色相や補色といった色彩学やデッサンの意味づけのような美術にまつわる方法論など、さまざまな仕掛けにも引き込まれる。

編集者／ライター（馬場企画） / 松浦達也

- 美大漫画、美大受験漫画は今までもたくさん読んだけど、こんなに引き込まれた美大受験漫画はなかった。どうしてわかるの？この気持ち。ああ、これはわたしが気づいてなかったこの気持ち。これは苦しくて苦しくてどうすればいいかわからなかった気持ち。経験して来た事を心のなかから掘り出して言語化・視覚化した気持ちになりました。作者さんが芸大卒と聞いてなるほど納得。美術畑でない人にはどう感じるのか聞いてみたい。

鳥取県高等学校美術教員 / 佐川由加理

- 夢を持って実現していくことの姿は、応援したくなる。家族で読める作品。

自営業 / 小野ゆうこ

- 社会人になって久しいせいか、この漫画の「ひたむきさ」に心打たれた。美大受験、というユニークなテーマなので、今後どう話を運ぶかにも期待。

会社員 / 齋藤隼

- DQN 設定や、尋常じゃない速度での成長など、野暮にツッコミを入れるといろいろ気になってくる気もするのですが……ものを創る者として共感できる部分や、初心にかえることができ、改めて身の引き締まる思いになることができたりと、創造における自分そして周囲との向き合いかたを考えるキッカケを得られる作品だと感じ、とても好きです。

ミュージシャン / 杉本善徳

## 選考員コメント・2次選考

- 主人公が伸びた分だけ壁にぶちあたっていく、その度にまた違った成長を見せる。本気で美術に向き合っている漫画だと感じる。キャラクターも魅力的で王道のおもしろさまだまだ伸び代がある、これからがさらに期待できる良作。

tetote 代表 / 力丸 真

- 「今の若い人や学生は常にどこか斜に構え、何事にも情熱をもっていない」と思うならこの作品を読むといいです。対象（この場合は絵画ですね）に心を奪われ、日々の全てをそこに費やそうとする時、人はどんな顔で何を思うのか。ただひたすらに純度の高い、青春の塊を堪能できる作品。激熱！

オリオン書房アレア店 / 池本美和

- 勉強もでき要領もよくヤンキー男子として仲間とつるんでいた主人公が、「絵」と出会い、本格的にそれを学んでいく、いこうとする物語。真っ直ぐで、じつにいいな。好きなものと出会い、それを正面から好きであろうとするのに、読んで嬉しくなってしまう。「理論」はなんのためにあるのか、それを学ぶということはどういうことかを語ってくれる先人（先生）の存在もいい。それをぐんぐん吸収する主人公もいい。この先が楽しみ。

プログラマー / マサトク

- こんなにも熱く魅せられるなんて思っていなかったアートの世界への道程。「好き」に全力を掛ける主人公たちの人間臭さと熱量と、まだ青い彼らの背中を押せる先生の存在に、気づくとすっかり魅了されてしまいます。「好きなことをする努力家は最強」ですよ、ほんと。

会社員 / 伊東敬祐

- 自分はまず手に取りたい作品かどうか、という部分を重視しているのですが、美術に関する作品だけあって精緻な描写で一番好きな作品でした。美術を志す方が皆そうなのかわかりませんが、今まで知らなかった世界が描かれていて、非常に面白かったです。また少年から青年そして大人の階段を上っていく不安定な時期の物語でその不安定さやひたむきな登場人物たちを応援したい気持ちになりました。

営業大臣 / 岡村光徳

- 主人公が良い。うちの小学校一年生の息子も大好きなマンガです！小学生にも伝わるのがすごい……！

作家 / 海猫沢めろん

- 美術畑の人間ですが、美術漫画って数あれど、ここまで胸に刺さってきて、ここまで言葉にできなかった感情を表現してる漫画ってなかったなあと。青春は人それぞれ。いばらの道を1人で歩いても求めたい春もある。

鳥取県高等学校美術教員 / 佐川由加理

- 作中に出てくる本物の絵に、グッと引き込まれてしまいます。「見る」以上に「知れて」「描く」以上に「わかる」描くことで母に伝えるシーン、好きです。

教師 / 持丸宏司

- たまたま美術だったのだ。自分の中にある何かを表現する手段が。タイミングによっては音楽だったり演劇だったりダンスだったりしたかもしれない。そしてたまたま受験生だったのだ。だから受験科目として取り組むことになった。けれど、それは今の彼にとって唯一の手段なので、ひたすらに没頭する。全編を通して、言葉にできない、言葉にならない、衝動のような思いがずっとBGMのように流れ続けている。熱い、青春漫画である。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

- 私は、自身がモノづくりをする人間であるからか、作内でクリエイティブな活動をするマンガを好きになることが往々にしてあります。けれど、それに準じて感覚が合わなく感じるものも多々あります。ブルーピリオドにおきましては、初心を思い返すことに繋がるシーンが多く、モノづくりやそれを取り巻く環境との向き合い方について改めて考えるに至ることができ、うまく表現できませんが読んでいて嬉しい気持ちになります。

ミュージシャン / 杉本善徳

- 好きなものに出会って、その道に突き進む若者。そりゃ応援したくなる。ただ、実際自分のこどもが突然進路を変更したいと言い出した時にどう感じるか。そんなことを頭の隅に置きつつ読みすすめたので、母親と話をする場面で号泣してしまった。努力して、挫折して、成長していくのを見守っていききたい作品。

主婦 / 赤坂真実

- 何が正解か答えのない美術の世界。天才がひしめく世界に、努力という武器で挑む主人公に胸が熱くなる。才能のある人間の凄さだけではなく弱さも描き、世界の奥深さを鮮明に描いている。

あゆみ BOOKS / 太田和成

- 彼にとって絵を描くことは、初めて得た「重力から離れる」手段。彼をそれまでの彼たらしめたことから浮かび上がり、見えなかった景色や自分を知るための浮遊力。朝までやんちゃな友達と遊ぶ DQN な男子高校生、けれど根はまじめで、勉強ができるのも実は努力のたまもの。そんな自分を冷静に見極めて世渡り上手であろうとする主人公が、ある日、美術部の先輩の絵に触れたことで未知の衝撃を受け、藝大受験を目指し始めるお話。とはいえ、美大を突破するためのノウハウマンガではなく、手段を手に入れた彼が自分や自分の好みや世界の在り方を知っていく中で、もがいたりあがいたりする物語。人がその力足らずとも、前に進もうとする姿に胸を打たれるのはもちろん、その気持ちを包み隠さず、時に涙を流すほど打ちのめされながら、それでも進んでいくその先を、今一緒に見てほしい。それは、今じゃなきゃダメ。特に、行く先を決めかねている人はぜひ。きっと、物語が応援してくれる。読み進めるうちに、照らしてくれる。これからのあなたの道を。

フリー / 田中香織

- 私らしさとか、クリエイティブとか、アートとか、まとめてみんなしゃらくせえと思ってる友人にこそ、勧めたい一冊。わたし自身は絵も描けないし、もちろん美大出身でもなく、この作品に描かれる世界がどれぐらいリアルなのか、まったく判断がついていないけれど、そこにある凄まじい熱量はたまたまリアルで痺れる。分野は違えど、わかるわーな瞬間も多々あり、圧倒的な才能を情熱がねじ伏せていくのか、その逆か、まったく違う方向に走るのか。今後がますます楽しみです。

ライター・編集 / 島影真奈美

- 読み終えたあと、自分も何かを表現したいという気持ちになりました。作中では美術表現や技法についてわかりやすく説明されており、納得感を持って主人公の成長を見ることが出来ます。論理や感性、技術や道具、主観と客観など、あらゆる側面から美術を知ることができ、読み進めるなかで何度もなるほど！と思わされました。あまり美術に興味がなかった人も、いま現在楽しんでいる人も、このマンガを読むことで世の中の見え方が変わる。マンガという媒体を超えた、心に訴えかける力がこの物語にあると感じました。最高でした。

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

- インドア系や文系でスポ根作品は大好きなのですが、期待を軽々越えてきた高い熱量を帯びた作品です。小説やマンガを読んで泣くことがほとんど無いのですが、先輩の卒業の場面で涙を浮かべて読んでました。ぜひこの熱量にほだされてほしい！

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

- 向いてるか、向いてないかなんて関係なく、衝動を信じてこれと決めたものに向かって突き進む喜びに溢れた主人公がとても眩しく、少し羨ましい。絵を描くことについての説明も分かりやすく、見るということを改めて考えさせられて、読んだあと世界が少し違って見えるような気がします。新しいことにむけて一歩踏み出す勇気をくれるマンガです。

Sler システムエンジニア / 廣瀬公将

- 主人公の出来過ぎ具合が鼻につくかと思っていたが、読み進めていくうちにそんな事はどうでも良くなる。むしろ夢になる姿にワクワクするストーリー展開が面白くてたまらない。

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 絵を描くことにのめり込んでいくのが気持ちよく描かれています。美術の勉強をしたことのない自分にとっては教科書的な感じもあって面白い。自分も絵を描きたくなりました。

主婦 / 紺野泉

- 美大が舞台のマンガでは「才能がすごい」は大正義なんだけど、努力で埋めるために考えてみるところがいいんだよなあ。主人公を応援したくなる感がすごい！

往来堂書店 / 三木雄太

- 「芸大版ドラゴン桜」「美術版ビリギャル男」などと乱暴に要約しても、さほど間違っていないと思います。読むだけで絵がうまくなるような気がするし。(←錯覚)しかしそれだけではない本作の魅力の説明するのは、なかなか難しい。考えたコピーが「ハングリーになれない時代の熱血マンガ」。(←へたくそ)ほかに何も持っていないが、絵の才能だけはある人間が、矢吹丈みたいに成り上がっていくのではなく、何でもできちゃうオールマイティな人間が、自分の空虚さに気づき、生きている実感を得たくて、自分から線路を外れていく話。だからこそ「今描かれるべき／読まれるべきマンガ」なんですね。秀才でリア充男の矢口八虎は、ヘタすると感情移入できない、イヤなヤツになりそうなのに、ちゃんと熱血主人公になっているのは、作者のうまさだと思います。女装趣味の龍二や努力家の森先輩もいいキャラクターですが、絵を教える大人の先生たちが、いろいろハツとする名セリフを吐いてくれます。〈「好きなことは趣味でいい」／これは大人の発想だと思いますよ〉〈好きなことをする努力家はね／最強なんですよ！〉ひょっとしたら、まだまだこれからが本番の作品なのかもしれないけれど、その期待も込めて一票。

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

- 青春ものに弱い僕は、この漫画を選ばずにはいられませんでした。青春ならではの、葛藤と成長の繰り返しがあまく描写されていて、テーマが美術ということもあり、これからの展開も気になることです。

広告会社 プランナー / 平沼良章

- 「好きなことに人生の一番大きなウエイトを置くのって普通のことじゃないでしょうか？」そんな先生の言葉に、誰もがはっとするのは。だからこそ、好きを追いかける怖さと興奮を主人公・八虎と一緒に感じられる。八虎が先輩から勇気もらえば、読者の僕も一緒に勇気もらえる。僕も好きなことに真剣になってみようかって。だけど僕にとって八虎は、世田介のいうように「なんでも持ってる」奴なんですよ……どうしても。だから「世間が良いっていうものにならなきゃいけないなら俺は死ぬ」、そんなユカの言葉が胸に刺さる。好きだからやることと、そこでしか生きられないからやらざるを得ないこと、その違いは何だろうと。いよいよそこに踏み込んでいく連載の行方を、今はじっと見つめています。

会社員 / 末永龍介

- 美大ってどんなところ？ どうやったら入れるの？ という一般人からみた美大についての疑問や、どんな人が美大を目指すのかなど、読みどころが盛りだくさんでとても引き込まれる。技法について詳しく書かれているのも読んでいて面白い。

明文堂書店商品部 / 木村 俊介

- 高校時代に読んでたら人生変わっていたかも、と思わせるぐらい、熱い熱いストーリー。美大受験を体験したことのない自分にはリアリティの程度は到底わかりませんが、何事にも通ずる、意思があるところに道がある、という言葉の思い出させてくれるマンガです

会社員 / 齋藤隼

- 青春感が良いです。

株式会社 TORICO 代表 / 安藤拓郎

- 何か見つけて突き進む人を見るのはとてもワクワクする。そして何か勢いのあるマンガだなと思った。

カメラマン / 平沼久奈

- ある日「美術」の魅力に目覚めた高校生の成長譚。どこか少年マンガを思わせる導入だが、学校教育で誰もが触れたことのある美術というモチーフで読者の気持ちにグッと近づき、色相や補色といった色彩学やデッサンの意味づけのような美術にまつわる技術論も盛り込まれている。門外漢にとっては「へえ」と思わせられるような仕掛けもそこかしこに盛り込まれている。美大受験についてのリアルな事情も興味深い。若者がすすくと伸びゆく様を読むのは、実に気持ちいい。

編集者／ライター（馬場企画）／松浦達也

- 熱血系大好き。それが美大を目指す学生っていうのが新しいですね！あつい気持ちになれるカンフル漫画。どういう結末を迎えるのか、今後の展開も気になるところです。

アナウンサー／松尾翠

- 絵を描いたり音楽を作ったりと、少しでも“創作”をしたことがある方にはグサグサ刺さる作品だと思います。頭に描いたものをアウトプットすることの難しさやもどかしさ、考えれば考える程煮詰まって訳が分からなくなってくるあの焦燥感…を、久々に体験させて頂きました。

商品企画／畑中瀬路奈

- マンガをいっぱい読んでるけど、描こうと思ったことがない。ある一定、というかかなりそういう人は、いるんじゃないだろうか。かくいう私もまさにそういう人間なのですが、なんで描かないのかというと、「何をよしとしたらいいかわからない」からなのだ。逆に言えば、「いいラジオ」って、おそらく「いい画」以上に、外の世界の方にはわからないだろうと思う。私もラジオ局に入ったばかりの頃は、何がいいラジオかなんてことは、まったくわからなかったのですが、なんとなく惹かれて毎日やっているうちに、自分なりになんとかわかってきたわけです、というこの、感覚。このマンガは、「画を描いている人は、何をよしとして描いているのか」を、藝大受験のストーリーを通じて、初めて教えてくれたのだ。鉛筆、不自然に削ったりとか、画に向けて一本立ててたりとかって、ファッションじゃなくて、技術だったんですね…！ただ、そこを逃げずに描いてあるので、主人公たちは「オマエは最後、どう思ったんだ？！」という超骨太の問いを突きつけられて、勝手に七転八倒するのである。そう、勝手に。そこには俯瞰ではなく、リアルに匂い立つ戦いの香りが立ちこめている。多分それは、作中に出てくる画が、本当に美大、芸大に通っている学生さんやプロが描いた画だからではないか。それを取り込んで、マンガにしている。そう、まったく一言も言わなくても、ここには、登場する画と、マンガの、秘められた戦いが明らかにある。こんな、緊張感とドライブ感にあふれた作品が、あったらどうか！

ニッポン放送アナウンサー／吉田尚記

# マンガ大賞2019 ノミネート作品

ハルタ / KADOKAWA

## 「北北西に曇と往け」入江亜季

### 選考員コメント・1次選考

- 広大で、とてつもなく厳しい自然を有するアイスランドの景色を味わわせてくれる絵と、ナイスガイな主人公とお爺さんの魅力が、上質なロードムービーを観ているような、あるいはそれ以上の極上の味わいを生み出しています。これからのミステリーな展開も楽しみ。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

- 一生のうちにいきたい外国を挙げるなら、行ったことがある中国とアメリカを除けばインドのとりわけ南インドであり、「宇宙より遠い場所」とまで言われる南極であり、チリ領のイースター島であり、イタリアでありイギリスでありスペインといったあたりになるのだろうか。大自然を観に行くならギアナ高知でありマダガスカル島でありヴィクトリア大滝で、アイスランドはなかなか上位には入ってこない。北の方なら先にノルウェーやスウェーデンが来そうで、北大西洋に浮かぶ絶海の孤島、アイスランドを選んでわざわざ行くだけの動機はこれまで浮かばなかった。今は違う。入江亜季による「北北西に曇と往け」「北北西に曇と往け2」(KADOKAWA、1巻680円、2巻620円)を読んでいつか、機会があるならアイスランドに足を踏み入れてみたいと思うようになった。祖父が暮らすアイスランドに来た御山慧は、まだ17歳ながらも祖父から譲り受けたスズキのジムニーを運転しながら探偵業のようなことをやっている。クルマと話ができるという異能があって、あるクルマを追いかけた先で男が連れていた犬を、依頼主の女性の元に連れて行く仕事では、止めてあった相手のクルマから事情を聞いていた。そこにSF的とかファンタジー的な説明はなく、もしかしたら鋭敏な観察力で何か言葉を聞いた気になっているだけなのかもしれないし、本当に声が聞こえるのかもしれない。慧が家に居候をしている祖父は、鳥に入り込んで引き寄せることができるらしいから、一族にはそれぞれに何かしらの異能があるのかもしれない。そんな異能使いの少年が、アイスランドを舞台に出会って繰り広げるハードなディテクティブストーリーかと思ったら、第1巻では祖父がナイスミドルの魅力を放って、女優だという美女と仲良くなるのを目の当たりにしたり、カトラという名だった美女の姉の娘らしいリリヤという美少女と知り合ったりと、いろいろ華やかな雰囲気が出てくる。荒野で転倒したジムニーから毛布を持っていったり、滝で水浴していたりと奔放で、最初はアイスランドに暮らす妖精かもしれないと慧に思わせたリリヤが、自分が見られたのだからと慧にも裸を見せるように迫ったりする展開もあって、コメディとまではいかないものの、ちょっとしたコミカルさを持ったラブストーリーを感じたりする。もっとも、第1巻については突然、日本にいて弟の三知嵩を預けていた叔父や叔母と連絡がとれなくなり、祖父とともに戻って家が売りに出されていることに気づき、三知嵩の行方を探す展開があって緊張が走る。どうやらアイスランドに向かったらしいと聞いて戻った時、弟の三知嵩を日本から日本の刑事が追ってきていて、叔父と叔母を殺害したらしいと聞かされる。慧は弟を信じてそんなことはないと言ってしまう。そして刑事の目をくぐり抜けて再会した三知嵩も、自分はそんなことはしていないと慧に言い、涙まで流して釈明する。もっとも、ここでもある種の異能が発動する。アイスランド美少女のリリヤは三知嵩の話す音には汚れがあって、嘘をついているから2度と連れてくるなと訴える。そこから始まる、三知嵩という美しき悪魔かもしれない人物の真実に迫る物語を読めるかと思ったら、第2巻では慧とは日本で同級生だった少年で、今はアプリ開発を手がけている清がやって来て、アイスランドのあちらこちらを観光して回るエピソードが描かれる。荒涼としている大地で長い時間をかけ、風化して岩の隙間にたまった砂に草が生え、花が咲いていくアイスランドの大地の苛烈さを感じさせる。一方で、滝が流れ温泉もあちらこちらに湧いていて、大地がそこからわき上がって生まれているエネルギッシュな大地だとも思わせる。読めば行ってみたい、そして感じてみたいといった気持ちにさせるアイスランドの自然たち。地球の中から噴き出した大地が地球をぐるりと回って日本で沈んでいくとしたら、日本とアイスランドは離れていながらつながりをもっているのかもしれない。そう考えると“始まりの場所”として訪れてみたくなる。そうしたアイスランド観光ガイド的な展開の合間に、三知嵩が牧場の柵を切って回るシーンが挟まれ、その性格に対する不穏な気分がわき上がる。日本にいた時も、兄の前で無視を平気で踏みつぶして見せた三知嵩の本性を、慧は知っているはずだ。それでも信じていたい三知嵩が本性を現す時にどんな事件が起こるのか。それは悲劇となるのか。アイスランドの良さを感じさせてくれた第2巻に続く第3巻で、そのあたりも描かれていくものと信じて続きを待とう。

書評家 / タニグチリウイチ

■ 格好良くて、美しく、ゾッとして。男性にも女性にも勧められるマンガです。

オフィスオーガスタ / 樋口健

■ この作者はたぶんすごくたくさん引き出しをお持ちなのではなかろうか。まだ話がどう転がるか、まったく予想がつかない。だけど1巻目を読むだけで、この作者には溢れる才能を感じます。

主婦 / 安田奈緒美

## 選考員コメント・2次選考

- 英語も話せなくせに海外が好きで、そのにおいに常に憧れる。においというのは、独特な街の香りそのものことでもあるし、そこに住まう人の習慣や朝の空気、お店のおばちゃんとの挨拶や建物の壁や屋根の形といった、その地域がまとう雰囲気のことでもあると思う。それは僕をちょっとした異邦人にしてくれる旅の魅力だ。「北北西に曇と往け」は、アイスランドと聞いても「寒そう」くらいの貧困すぎるイメージしか持っていなかった僕に、雄大な自然やローカルな食べ物、美味しいコーヒー、使い慣れたブーツの履き心地といったリアルなおおいを感じさせてくれるお話だ。僕はアイスランドに迷い込んだ異邦人として、何もかもが新鮮な旅の続きを、今か今かと待っているのです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ
- マンガの綺麗さ、凄さ、面白さがいっばいに詰まった素敵な作品。本としてもカッコいいのが本屋としては嬉しいのです。

文教堂書店 浜松町店 コミック担当 / 金田健太郎
- いつも入江先生の描く人物は老若男女美しく美味しそうで眩しい…。今回の舞台のアイスランドの風景もまた圧巻。いつか行ってみたいそして話が進むにつれ、謎が深まり続きが気になる！

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳
- 見知らぬ土地に対してここまでのイメージを与えてくれる描写力、内容として素晴らしいことに加えて「紙の本」としての存在感が別格。

往来堂書店 / 三木雄太
- 1巻、2巻、3巻と読み進むにつれて登場人物のキャラクターのペールが一枚ずつはがれていくかのように、物語は深みを増していく。誰が好人物で誰が奸物なのか、見え隠れするのは本性か、それとも思はずごしか。描かれた葛藤や伏線を読み解こうとするほどに、深みにはまってしまう中毒性と反芻性。大きなスケール感とともに描かれる多面的な人物描写。この物語はどこへ行き、あの登場人物は何を抱え、誰と誰がどう関わっていくのか、巻を重ねるごとに引き込まれる。

編集者/ライター (馬場企画) / 松浦達也
- この、描いている国の風の匂いまで伝わりそうな空気感の表現力はさすが、秀逸。ストーリー展開、イラスト…決して派手さはないのだけどふとした時にもう一度手に取りたくなる。漫画の奥深さをしみじみと噛み締められる大人が読むべき漫画だ！！

アナウンサー / 松尾翠
- 淡々と進んでいくストーリーの中に、気づいたら引き込まれて、たまに見え隠れする狂気が、もっとこのマンガの続きを読みたい気持ちにさせてくれます。情景描写も美しく、北欧の雄大さがこの漫画のスケールを更にでかくしてくれています。日常譚とサスペンスがまじったストーリーですが、読み進めると超能力バトルになりそうで、もはやすごいとしか言いようがないです。

広告会社 プランナー / 平沼良章
- アイスランドの大地と人々、異国や異文化を自然に美しく描かれ、主人公の仕事や、能力、家族、が物語の中でライフスタイルとしてサラッと嫌味の無い感覚で読める、まだ3巻なので、続きが非常に気になります。

tetote 代表 / カ丸 真
- 主人公は17歳の、ちょっと特殊な力のある少年。人物紹介のようなエピソードをいくつか重ねてから、大きな謎を持ってくる構成も見事。脇を固めるキャラクターもいい味。アイスランドという土地の、荒涼としつつもある魅力を描いているのも良さ。骨格のしっかりした良い作品。まだまだ先が楽しめそう。

ブロガー / マサトク
- 自然の描写が素晴らしくアイスランドに行きたくなった。

株式会社 TORICO 代表 / 安藤拓郎

- この作品の良さを説明するのは難しい。なぜなら、巻によって受ける感じがぜんぜん違うから。1巻はミステリタッチであり、2巻は紀行もの、3巻はSF的というかまた違う味わいに。作者が才能の引き出しをいっぱい持ってて、それをどんどん余すことなく披露しているという気がする。それがどこに行きつくのかを、今読みながら楽しみに待っている最中。そして絵がまたとても素敵。風や匂いを感じる。北欧の広くて大きな、大自然の風。

主婦 / 安田奈緒美

- アイスランドに行きたくなった。弟怖すぎる。

大日本印刷 / 佐々木愛

- 雄大なアイスランドの作画がまさに圧巻。空気が直に伝わってくるかのようだ。主人公の慧や祖父、弟 魅力的なキャラクターにも目が離せなく、今後も楽しみな作品。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤 瑛

- マンガ大賞でノミネートされなかったら気付かなかった、良作です。読み始めは、ミステリー？不思議ちゃん？超能力もの？な感じかしらと思いつつ読み始めたんですが、アイスランドの雄大な景色に取り込まれます。1巻と2巻の印象が全然違うけど、アイスランドの空気に巻き込まれ堪能してしまう。旅行に行った気になります！

女優・ジェネラリスト / 大倉 照結

- 『乱と灰色の世界』の期待値をそのまま引きずりながら読んでいます。やたら艶っぽい美形のいちゃんが、北国（アイスランド！ アイスランド！ アイスランド！）でタフな感じでなんかやってる。なにを、なぜ、どうやっているのかは、まだぜんぜんわからない。わからないけど、何かが（おそらくは、邪悪が）あるぞ、おこるぞ、そして入江亜季の描く登場人物たちがみんながみんなやたら艶っぽいぞ、という濃厚な期待だけがあって、それが気になる。読ませる。そんなマンガだ。アイスランドのタフな自然描写もすげえ。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- スタイリッシュって言えばいいんでしょうか。人間を描いてるのに、でも、いい意味ですごくお洒落な感じがします。土地の風を感じられる、気持ちよさが嬉しい。

めがねっ娘教団大司教 / 田中海渡

- 4話までは、綺麗な話だなあという感じで読んでいたのですが、5話以降、ん！？なにになに、どうなるの！？とハラハラドキドキしながら1巻ラストまで一気に読みました。そこからの2巻はうって変わってまるとアイスランド観光？の話で平和にワクワクしました！清くんと同じ気持ちでした。そして今後どうなっていくんだろう！？この冬の寒い時期に、コーヒーを飲みながらゆっくり読むのにぴったりの漫画です。

声優 / 富岡美沙子

- アイスランドの空気感と諸々のディテールが秀逸。物語の行方はまだ見えないが、期待感だけでも推す価値はある。

ライター / 福井健太

- 車と話して色んなことを解決していくお話かと思ったけど事件も絡んできたりアイスランドに行きたくなるくらい観光も出てきてまだ猫のような気ままな感じだけどこの先どう話が詰まってくるのか楽しみにしています。

カメラマン / 平沼久奈

- 前作『蘭と灰色の世界』の時もそうだったが、序盤では「ストーリー」をほぼ走らせず、その世界の描写、人物の素敵さの描写に命をかけるぞ！という作者の強いこだわりと、さっさとそれを実行してしまう作者の自由さがかっこいい気持ちいい（審査対象期間の巻からは外れるが、3巻で一気にストーリーが走り出したのでそのことがよりはっきりとわかった）。男の人も女の人もすごく色っぽくて、そこも最高！

漫画ライター / 門倉紫麻

- どうなっていくのだろうかと惹かれ続けるストーリー展開。今後が楽しみな作品。

自営業 / 小野ゆうこ

■ 北欧の空気を切り取ったかのように描いている。個性豊かなキャラクターたちも魅力的。

あゆみ BOOKS / 太田和成

■ この漫画の格好の良さはどこから来るんでしょう。舞台であるアイスランドの厳しい環境がそう見せるのか、はたまた主人公の探偵という職業がそう見せるのか。それとも主人公の代々受け継がれる特殊能力なのか、キャラクター性なのか。そのどれも、主張し過ぎずに物語が緩やかに進む、その空気感が何よりクールです。お話もミステリーであり、日常風景であり、はたまた恋愛なのかも？そのゆらぎのある雰囲気は、読み手側の日常のリアリティそのものだと思います。終わりも始まりも感じさせない宙を漂うような物語はコーヒーでも飲みながら読むのにピッタリです。

会社員 / 佐藤優

# マンガ大賞2019 ノミネート作品

月刊 flowers / 小学館

## 「ミステリと言う勿れ」田村由美

### 選考員コメント・1次選考

- 口数が多いという言うべきなのか、理論的と言うのか。コミックとしては恐ろしいほどのセリフ量だが、スーッとシリアスな内容もリズムカルに読めてしまうので先が読みたくて仕方がない。  
(株)エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部大介
- しゃべりまくる主人公なのにグイグイ読めます。大ベテランの貫禄に唸りました。  
マンガ研究・ライター / 会田洋
- 飄々としためんどくさいウンチクたれ男が、事件の謎を解くミステリ作品。毎度主人公の整くんの精神論にイライラしてしまうけど、たまに良いことを言うし、かわいいところもあって魅力あるキャラ。ミステリとしても面白く読めた。作家のファン以外の人にも読んで欲しいな、と。  
主婦 / 赤坂真実
- 今年一番の作品はこれだと思います。とにかくべらぼうに面白い。  
啓文堂書店 商品担当 / 山川美香
- この人のうんちくならず一いつきいてられる！様々な問題を不思議な視点で解決していく不思議な人。たしかに心を開いちゃうだろうなあ…  
ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳
- 物語の面白さはもちろんですが、こうして田村由美先生の作品に投票できることがうれしい、うれしい！  
主婦 / 紺野泉
- 久能整くんワールドに引き込まれていく作品。話す話すとにかく話す。整くんの言葉がおおっ！となったり、納得したり。謎だらけの整くんにこれからも期待してます。  
ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり
- 男性に「最近面白かったのある？」と聞かれると、ついこのタイトルを応えてしまう。畳みかける展開と少しの底意地の悪さ、でも同時に描かれる人の弱さ。いわゆる人間ドラマとは異なる形かもしれない、でも描かれているのはやはり「人間」としか言いようがない、物語だ。  
フリー / 田中香織
- 「7SEEDS」の後早速の新連載！「しゃべくりマンガ」というような趣。謎の天然パーマの青年がとにかくしゃべりながら、ついでにいろんな謎解きもしちゃうというテキスト系ゲームにしても面白そうな展開。1巻で主人公の人となり紹介され、その後は巻き込まれるような形で事件を解決に導いていくんですが、まあいろんな角度からの「語り」が面白いです。マンガからいろんな雑学や知識を得てきたという方には、特におすすめです。いろんなことを知って「わくわく」します。田村由美さんの「僕が〇〇になったワケ」のような雰囲気を出します。BASARAのような大作も、このような数話完結型のお話もどちらも面白いのがただただすごい……。  
会社員 / 西尾美里
- この人ミステリとかも書いちゃうんだ…凄い、とただただ感心する。でも主人公の言葉は間違いなく今まで読んできた田村由美作品のそれで、言ってることは変わらないんだなああとこれまた関心してしまう。  
bar 図書室店主 / 岡部愛
- ベテラン漫画家さんの最新作もう見せ所めっちゃ分かってる！！ストーリーの起承転結や主人公の性格の見せ方。まさかミステリものを描くとは思ってましたが、下手なミステリドラマや小説よりずっと息をのんでしまう展開にこれからと目が離せない。  
鳥取県高等学校美術教員 / 佐川由加理

- すでに話題作ですが今年、間違いなく自分の中では一番面白い漫画でした！特に3巻！八つ墓村ばりの設定と構成が個性的すぎて、今までこんな漫画見たことない！！と大興奮で読みました。ミステリー漫画って、コロンくんとか金〇ーくんとか有名な作品はあれども本格推理物漫画って意外に数は少ないのではと思うのですが…。整くんのキャラが良すぎて、確かにミステリー漫画なのかなんなのか、もはや分からない！タイトル秀逸すぎます。整くんが女性に優しいところもまた良いです。とにかく興味深い作品で、早く続きが読みたいです！

会社員 / 佐々木つむぎ

- 読み始めたらどんどん引き込まれていきました。主人公・久能整が放つ言葉は不思議と合点がいく。説得力のあるものばかり。言葉の端々に見え隠れする真実がどんなものなのか、主人公を通して事件を推理している自分がいました。

丸善丸の内本店コミック担当 / 八重田幸子

- 推理を展開していく流れが非常に秀逸。ミステリーものの冗長さが苦手な人でも読みやすいと思うので、是非いろいろな人に手にとってほしい。

会社員 / 齋藤隼

- ちょっと癖のある主人公が、淡々と謎を解いていくのですが、物語に流れる空気がなんとも独特。飄々としてるといふか、浮世離れしているというか。まさに一筋縄ではいかない作品。

主婦 / 安田奈緒美

- ちょっと変わった切り口で描かれていて面白いです。読んでみると「小説とドラマの間」にいるような、そんな感覚になります。

ミュージシャン / 杉本善徳

- おもしろい?! まんがはこうでなくっちゃ。ベテラン作家の田村先生のジャンルの広さにまず驚愕! ミステリーもお得意だったんですね。凄い。主人公の整(ととのう)くんの、ちょっとひとをイラッとさせる独特の性格も新しいです。続刊を楽しみに、絶対続きが読みたくなる心持ちにさせる、ヒキ手管もさすがのひと言。

菓子研究家 / 福田里香

- 飄々としためんどくさいウンチクたれ男が、事件の謎を解くミステリー作品。毎度主人公の整くんの精神論にイライラしてしまうけど、たまに良いことを言うし、かわいいところもあって魅力あるキャラ。ミステリーとしても面白く読めた。作家のファン以外の人にも読んで欲しいな、と。

主婦 / 赤坂真実

## 選考員コメント・2次選考

- こんなにもテンポ良く読み進んでしまうストーリーはどれくらいぶりだろうか。ページから溢れそうなセリフも目で追うのではなく、耳から聞いているかのような錯覚に陥る程引き込まれるストーリーである。  
(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部 大介
- 読み始めでは、犯人が分からず、結末に度肝をぬかれます。驚きの連続でした。整くんのほんわかした雰囲気癒されながら、ドキドキしながらで大変です。  
有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代
- ロジカルなセリフの物量に圧倒的されます。巨匠の貫禄。  
マンガ研究・ライター / 会田洋
- めんどくさいけどくせになる。整が展開する持論にいつのまにか引き込まれてしまいました。なかなか陰惨な事件が起きているのですが、読み味が軽快なのはさすが田村先生ですね。  
会社員 / 江本ちひろ
- ミステリー小説が元々好きです。私自身は謎解き自体に興味はないですが（脱出ゲームで絶対に脱出できないタイプ）主人公が謎を解く頁をめくるときって、カタルシスが得られる快樂的な瞬間です。この漫画は（タイトルでは否定されているけども）極上のミステリー物として謎が散りばめられているので事件解決（真相解明）のカタルシスは勿論あります。ただ、他の方もコメントされると思いますが、やはりこの漫画の特徴は整君のキャラクターとしての独創性でしょう。事件とは別軸で、真相そのものとは特に関係がない登場人物それぞれが抱えている問題へもフォーカスがあたり、主人公の整くんと会話することで選択肢のひとつとして回答を得る、またはその問題の何らかの解消を得るという流れが読んでいてすごく心地よいです。普通ならば、事件解決という最後にしか感じられないはずのカタルシスが随所で得ることが出来るので、テンポ良く、適度な間隔でポジティブで独特な空気感が生まれていると思います。あと田村由美先生が生み出す奇想天外な事件設定もやはりすごく面白いです。今年一番、興奮して他の人にも勧めまくった作品でした。  
会社員 / 佐々木つむぎ
- 自分が子供の頃から読んでいた作家さんがまたおもしろい漫画を描いてくれるという喜び。  
大日本印刷 / 佐々木愛
- あー、なんというか、田村由美（敬称略で失礼します）の持っている引き出しってすごい。どうしてあの前作の次に、まったくテイストの違うこの話が持ってこれちゃうのか。一度頭の中を拝見してみたい。ええと、一言でいうと、安楽椅子探偵ものってことになるんだと思うのですが、それだけのお話じゃないところがほんとに凄い。主人公（整くん）の周りで起こっている、この出来事ってなんなんだろう、何が起こってるんだ？と考えているうちに、びっくるする方向に話が転がっていき、想像もしていなかった結末を迎える。最初に読んだとき、アシモフの黒後家蜘蛛の会を思い出したっていえば、ちょっとは雰囲気分かってもらえるかな。あ、お話は全然違いますよ念のため。すでにあちこちの賞にノミネートされている本作ですが、ぜひ男の人にももっと読んでほしい。絶対に面白いから！  
啓文堂書店 商品担当 / 山川美香
- 1つ1つ事件に対して人間ドラマがとても丁寧に、そして深いところまでゆっくりと掘り下げて描かれてある上に、結末まで全く気を抜けないという…とても良質のミステリ漫画だと思いました。もじゃもじゃ頭の主人公がとにかく魅力的で、たまに出るウンチクや慣例的な事柄に対する問題提起、そして常識に囚われないフラットな思考にはハッとさせられっぱなしでした。  
会社員 / 小野塚博之
- 怒濤の語りで事件を解決、圧倒的なまでのテキスト密度。登場人物が抱えるそれぞれの痛みに応じた豆知識や雑学などで心をほぐしながら事件の輪郭を明らかにしてゆき、解決に持ち込むというソフト系ストロングスタイル。確かな構成と広範な知識で文章だけでも大変なところに美麗な絵までついてるといってお得感。すぐにでも映像作品に落とし込める完成度と相まって今期の一押しとさせていただきます。  
住職・ライター / 蟬丸 P

- 今さら田村由美先生のようなメジャー作家を一位に上げていいものかと悩みつつも、圧倒的な面白さで一位にせざるえませんでした。魅力的なキャラクターから台詞のセンス。今さらミステリーというジャンルでここまで連続的に面白いものが作り上げられるのはさすがとしか言いようがありません。主人公の事なかれ主義でありながら饒舌に語るスタイルは、それだけでも魅力的であり、クールな言い回しに時折見せるいら立ちの表現が人間味をしっかりと映し出しているのが見えて気持ち良いです。周りのキャラもいちいち好感が持てるし、ストーリーとしての複雑な展開もわかり易く落とし込む構成があって、老若男女楽しめるところまで出来上がっているのではないだろうか、という意味合いも含めての一位です。個人的には男性漫画誌を読む比率が多いだけに、自分と同じような青年誌少年誌派の人にこそ読んでほしい一冊です。

バーテンダー / 村井真也

- 自然とドラマ化決定！という気持ちになる。キャラが立っていて、独特の雰囲気引き込まれる。

明文堂書店商品部 / 木村 俊介

- 田村由美先生の作品は何作品も読んでいますが、こんな面倒で偏屈なキャラが主人公だとは思いませんでした。笑 ミステリっぽいのに、ミステリと言う勿れなんて、じゃあ何て言えばいいの！？タイトルからして面倒です。笑しかし読み込んでみると、たしかに巻き起こる事件に大袈裟なトリックや動機などがあってもなく、目の前にある事象をただただ見つめ、考え、背景にある事柄を浮き彫りにする様は見事です。ハラハラドキドキする展開があるわけじゃないし、淡々と理屈をこねて謎をつまびらかにしていく、それだけで解決していきながら、これはやはりミステリとは言えないのかもしれない。この読み心地は是非体感していただきたいと思います。

公務員 / 宇田川 結衣子

- 今回のノミネート作では学生ものが多かったと感じられたのですが、一番生意気というか、生徒にたくないタイプでしたが、大人びたようで正論を振りかざす青さに読者としては好感が持てました。

営業大臣 / 岡村光徳

- けっこうスゴいことに巻き込まれていくけれど、いつのまにか場の空気を支配してしまう整くんのしゃべり、しゃべり、そしてしゃべり。取調室、バスの中、屋敷の部屋など、固定されたシチュエーションで動きなどないはずなのに、その場にいる登場人物といっしょに読者も整くんのしゃべりに気づけば翻弄されている、という不思議な読書体験が得られます。

アニメイト秋葉原 キャラクターグッズ担当 / 岡部真矢

- 推理とは整理整頓術なのか！？あえてサスペンスといわず、ミステリーとし、それを整理整頓して解決する探偵？ともいきれない奇抜な青年の推理漫画です。日常の呪術的な常識から、性質から、習慣から、ハッと目を覚まさせてくれる新しい感覚のミステリー推理漫画です。

会社員 / 佐藤優

- 主人公・久能整（くのうととのう）くんは、なぜか様々なトラブルに巻き込まれてしまう。整くんの周りの人たちは、彼の優れた観察力と痛快な物言いに引き込まれていくうちに、心のわだかまりを解かれていく。彼を取り巻くトラブルも、まるで糸がほどけたように解決に進んでいく。読者である自分も、周りの人たちと同様、いつの間にか彼の魅力に惹き込まれてしまった。ミステリーの内容もさることながら、登場人物の心情が整くんととの会話を通じて丁寧に描写されており、それが「ミステリーと言う勿れ」の理由なのかもしれない。

弁護士・長島大野常松法律事務所 / 三村 量一

- 主人公は、脱力感を伴うどこかおかしみのある大学生（ただし思考力は抜群）。ミステリー作品において、主人公がなかば強引に事件に巻き込まれる奇跡はお約束として楽しみたい。描かれる事件は勸善懲悪ではない。事件解決の場面も胸がすくような解決シーンばかりではない。にも関わらず、そこには必ず何かしらの救いが盛り込まれている。ときに難解に思える展開もあるが、読者の理解をうながす端的でいい描写に、作品に対する作者の真摯な作り込み、深掘りを感じる。この作品もまた人間讃歌のひとつの形だ。

編集者/ライター（馬場企画） / 松浦達也

- 巻き込まれ型の安楽椅子探偵、でいいのかな？本人は「目の前の面倒事や気になることを片付けてる」くらいに考えていそうなのですが。整くんが「青山剛昌の名探偵図鑑」に登場する日を楽しみにしています。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- とにかく「読ませる」作品でした。マンガだけど。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- 事件単位の話かと思うと、更に派生していく展開に巻き込まれていく主人公とどこまで続いていくのが今後も気になる。

ロングランプランニング株式会社 マネージャー / 小森和博

- 面白い！面白い！ページをめくる手が止まらなくなる展開の進み方で、整くんのキャラもたっていて一巻読み始めたら最後まで一気に読んで自分がいました。小気味いいテンポで進むストーリーと、繰り広げられる推理。ズバツと斬られたような読後感でスカッとする一作でした。

ジュンク堂書店池袋本店 / 杉 佳尚

- BASARA や 7SEEDS などの長編大作とはまた違った趣。かつて田村先生の「僕理由」シリーズにはまった者としては、こちらのテイストの作品も久々に読むことができうれしい。主人公『整』が語りまくるマンガ。しかもミステリを解き明かしていくのだけど、ちょっとしただめだしとか、「気づき」を与えてくれるのが特徴で魅力。そういえば最近ヒットするドラマの特徴が「説教系ドラマ」らしいが、こちらもなかなか説教系。でも主人公『整』が飄々としているので全く押し付けがましくもなく、すっと心に入ってくる。彼自身がかなり曲者なので、今後彼の過去なども掘り下げられるのかと待ち遠しい。

会社員 / 西尾 美里

- なんだか挑戦的なタイトル...！と思っていましたが、読み進めてすぐに打ちのめされました。作中に出る様々な知識と引き出しの数の多いこと...！心にすっと入ったり、逆に刺さったりする、たくさんの名言が出てきます。主人公・整くんの独特でブレないキャラクターも魅力的です。真剣に推理をしているのに何故か心が温まり、と思えば真相がわかって急にゾッとする、新感覚のマンガです。

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

- ミステリーを読むと疲れてしまうのですが、このマンガはまったく疲れずに読めました。推理や謎解きの要素は魅力的、そして、それ以上に魅力的なストーリーとキャラクターに、引き込まれて一気に読んでしまいます。ミステリーなんだけど、読んだ感じがミステリーじゃないような感覚。ああ。だから、「ミステリーと言う勿れ」なのか！納得。

Sler システムエンジニア / 廣瀬公将

- 読み始めたら止まらない。ちょっと癖のある主人公が、淡々と謎を解いていくのだが、物語に流れる空気がなんとも独特、ユニークでシニカル。飄々としてるといふか、浮世離れしているといふか。まさに一筋縄ではいかない作品。少女漫画の絵に騙されること勿れ。

主婦 / 安田奈緒美

- あれだけの大作を描き終えた作家の新作、舞台が現代でのほほんとした主人公、年齢層少し高めめの少女漫画、となれば、さらっと読める系にシフトするのかなと思いきや、ジワジワ感じる不穏な空気。なによりタイトルが本当にその通りで、モヤモヤしっくりこない感じが癖になります。この引き出しの多さ、期待を裏切らない力量、漫画を読まない人にも薦めやすい安定感、流石としか言いようが無いです。

(株)首都圏 TSUTAYA / 井出麻悠美

- 小劇場の舞台を観ているような、緊張感の高い会話劇。主人公は謎を暴くのではなく、見えているものをただ語っているだけ。周囲の人間が勝手に右往左往していく作劇が、現代社会の批評にもなっている気が。(考え過ぎ?)

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

■ ミステリと言う勿れ、勿れ。つまりは、ミステリとしか言えないような本格的なミステリマンガを、「BASARA」や「SEEDS」といった大ヒット作を幾つも送り出している田村由美が描いていたとは、何というマンガ家としてのジャンルの幅広さかと驚くことしきり。そのマンガ『ミステリと言う勿れ』（小学館、1-3巻各429円）は、事件が起こって探偵が現れ推理し証拠を突きつけ真相へと迫るミステリの、まさに神髄といったものを余すところなく楽しめる。カレー日和だと言って、カレーを作り始めた大学生の久能整（ととのう）が住む部屋に警察がやって来て、近所で大学の同窓らしい寒河江健という人物が殺害されていて、整がその犯人かもしれないといった疑いをかけられ、警察署で事情聴取を受けることになった。特徴的なアフロヘアの人間が、寒河江と言い争っている姿を見たという証言があり、高校時代も同窓で寒河江とは顔見知だったという状況があり、さらにその寒河江に対して整はあまり良い感情を持っていないことも知られてしまった。これでアリバイもないとすれば、警察だって当然に疑ってかかる。けれども、整だけは自分がやっていないことを知っている。では誰が、といったところで整は取調室に座って、次々に事情聴取にやって来る刑事たちと対話をして、自分を犯人だと疑うような理由が実はそれほど確固たるものではないことを指摘していく。それとは別に、周囲で繰り広げられる会話を聴く耳に入れたら、そこから個々の刑事のお悩み相談のようなことも結果としてやって、疑いとは裏腹の信頼のようなものも得ていってしまう。とはいえ、アリバイがないことだけでなく、寒河江を刺したナイフから整の指紋も発見されては、もはや言い逃れはできない。それでも整は冤罪を自白はしない。そうではない理由を語り対話をし続けていった果て、ある刑事の言動からひとつの答えを導き出し、そのまま自分の冤罪を晴らしてしまう。決定的とも言える指紋がついたナイフがあっても、整は動じない。流されもしない。そんなものを冷静な殺人犯が残すはずがないという理屈を繰り出し、だったら誰かが侵入した可能性があるという類推を示し、どうして部屋に入れたのか、そういえば家の鍵を落としたことがあった、それは誰に拾われたのかといった流れを作り、自分の部屋の間取りをなぜか言えてしまった人間の存在から、誰かが自分を陥れようとしているのだと看破する。観察と類推。対話と分析。そうした推理によってひとつの事件を解決していく見事さは、小説でも映画でも多々あるミステリのジャンルにマンガとして大きな存在感を示した。続くエピソードで整は、飛び乗ったバスがバスジャックにあってどこかへと連れて行かれる事件に巻き込まれ、そこで巡らされていたとある殺人の犯人捜しを部外者ながらも解決して、探偵役としての実力のほどを改めて見せつける。その成果を買われ、今度は広島旧家で起こった遺産相続をめぐる親族間の血みどろの抗争めいた一件の、誰かの疑心暗鬼によって本当に起こっているかもしれない事態を止め、その遠因となったある事故の理由を解き明かし、古くからその家に伝わっていた陰惨な振る舞いを暴いてしまう。とはいえ、そうした事件に整が主体として積極的に絡むことはない。どこか巻き込まれた傍観者として関わらざるを得ないところが体質なのか運命なのか。なかなか難儀な人生を生きるキャラクターだ。そもそもが広島行きすらも、半ば誘導されるようでもあったというから翻弄されるキャラクターであることは確実だ。その上、広島へと向かう新幹線の中でも、乗り合わせた女性が生き別れの父親から受け取っていた手紙の文面と添えられたイラストの“矛盾”を発見し、さらに何が起こっていたかまで類推してしまった。これもある種の運命か。こんな具合に、ある種の天才が巻き込まれながらも事件を解き明かしていく楽しさを味わいつつ、そのふわっとしたキャラクターがもしかしたら秘めているかもしれない謎なり真相が浮かび上がって来る今後を読みたい。まずは広島の一案件がどこに帰結するかが気になるところ。整を遠くから誘い導いているような節もある犬堂我路という人物の今後の関わり具合も含めて、第4巻以降の刊行が今は待ち遠しい。

書評家 / タニグチリウイチ

■ 整くんの雑学うんちくから謎解きに引き込まれてぐいぐい読んじゃう作品です。整くんと関わった人たちがみんなちょっと救われるところがほっとします。整くんはほぼ無表情なのに、とても表情豊かてかわいいんです。とにかく久能整くんを見てほしい！

主婦 / 紺野泉

■ 田村由美がミステリとな！バサラとかは読んだことあるがミステリとは！と思ってました。すみません。めちゃくちゃ面白かったです！分厚いミステリ小説読んだくらいの読み応え。漫画って伝える情報をそぎ落とす作業とおもうけど、この読後の充実感はずが大ベテランの先生だなーと思う。参りました。

鳥取県高等学校美術教員 / 佐川由加理

- 主人公の独特な雰囲気がいい。淡々と会話を進めているだけなのに話に引き込まれていき、話がどんどん展開していく、新感覚ミステリー。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- 久能くんは、細かいことに気が付き、そして気が付くと気になって、言わずにはいられない。そんな久能くんの声の大きい独り言のような呟きを聞いているうちに、ついでに事件の謎も解けてゆく。まさに憑き物落しとしてである。挿み屋のごとくである。とにかくよく喋る、ひたすらにセリフが多い漫画なのに、読みやすい。作者の技量がなせる業であろう。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

- 大ベテランの新境地だが、そのミステリーのクオリティに脱帽。一流は何をやらせても一流なのだなあ。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 田村先生の美しい画とストーリー（饒舌推理？）の絶妙なバランスが独特の作品世界を創出。イッキに読み進められます。さすが！

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 登場人物が喋っていることを逃さないことが大事。ついサラサラと読み進めてしまいそうな吹き出しの文字をいかに注意深く、自分も久能整になって読むことで事件と一緒に解いて楽しみました。

丸善丸の内本店コミック担当 / 八重田幸子

- 大ベテランが放つ語り漫画。久能整（ととのい）というなんとも普通っぽく見える青年が段階を踏みつくして難事件を解き明かす。話の流れにも驚きの連続だが、登場人物が次々と魅力的に描かれていき、最終的に人物像が固まったうえで大納得のラストへ持ち込むのはもはやあっぱれとしか言いようがない。そしてあらゆる角度から考察される整のセリフ。小説でも成り立つものがスリリングに絵と共に説明される、漫画というものを知り尽くした人間が実験に挑んだ傑作だ。

リリカル株式会社取締役デザイナー / 北山友之

- 会話劇なのに単調さはなく、連発される名言には薄っぺらさがまるでない。大ベテランの作家だからこそそれができるんだ！というすごさと、大ベテランなのに常に新しいことをやり続けるというすごさの両方を感じる。癒されるような怖いような不思議な空気感も唯一無二。

漫画ライター / 門倉紫麻

- これを機会にしてもっと男性に広めていきたい作品。飄々としているようで異常なほどの観察眼を持つ主人公の魅力、ストーリー構成、どれを取っても極上のドラマを見ているような、もしくはそれ以上の作品だと断言していいです。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

- かつて体験したことのない、独特のテンポを持つミステリー。整くんの含蓄のある話の数々も楽しめ、読み終わった後になにやら賢くなった気にさせてくれます。

会社員 / 齋藤隼

# マンガ大賞2019 ノミネート作品

webNewtype/KADOKAWA

## 「メタモルフォーゼの縁側」 鶴谷香央理

### 選考員コメント・1次選考

- 老人になっても新しい世界に興味を持てるのは素晴らしいと思います。  
マンガ研究・ライター / 会田洋
- としのはなれたお友だちができました(あらすじ)。BL、という単語が独り歩きすると非常にもったいないなあ、という良作。主人公二人の距離感がすごくいいなあと思います。  
啓文堂書店 商品担当 / 山川美香
- 「こういう漫画が読みたかった！」と、読後あまりの嬉しさに思わず転げまわった作品です。すでに話題作で、メディアでは「75歳の老婦人がボーイズラブを好きになる漫画」とだけ紹介されていたりしますが、この漫画の大きなテーマは『何かを「好き」という熱は年齢も性別も関係なくだれかと共有できるものなのだ』というしあわせを味あわせてくれる部分だとわたしは思いました。そもそも初めて「ボーイズラブ」に触れた75歳の雪さんが同性同士の恋を抵抗なく受け入れていることもあり、そういう素直な感性を持った人だからこそ17歳のうららさんとも仲良くなれたのだろうなと思います。同じ趣味で繋がった友人と、おたがい徐々に心を開いて仲良くなっていくときの雰囲気、心がむずむず。優しく、愛しいマンガです。  
伊吉書院 類家店 / 中村深雪
- すでに各方面で評価が高く、今さら感もありますが、読み返して、やっぱりいい作品だなあと思った。年の離れた友情をほのぼのと描くだけじゃなくて、マンガが積み重ねてきた歴史の「縦軸」みたいなものを、陽の当たる縁側にぎゅっと詰め込んだのが、この作品の価値だと思う。でも、作者はそんなコムズカシイこと狙ってない(たぶん)のが、またいいんですね。実は「大家さんと僕」もかなり好きで、方向性がちょっと似てると思った。でもこっちを選びます。  
読売新聞文化部編集委員 / 石田汗太
- おばあちゃんの市野井さんがほんとにいい感じで、こんなおばあちゃんになりたいです。そのくらいの歳になってもBLを読んで上品に「あらあらあら」と言って、若い子と感想を語り合いたい。好きに年齢は関係ない、ということは随分前から言われているような気がするけれど、たとえばこんなふうに、と具体的に教えてくれる作品です。  
主婦 / 堀江千秋
- タイトルと、表紙のおばあちゃんと女子高生のやわらかな雰囲気に惹かれ、ふと帯をみると「おばあちゃんが出会ったもの、それはBL」え！？なんだこれはと思って手に取りました。75歳の雪さんが新しい好きな物に出会い、17歳のうららさんに初めて好きなことについて話せる友達ができて...2人が幸せそうに笑うと、私も幸せな気持ちになります。台詞がない、うららさんの表情だけのカットが好きです。口下手なうららさんの感情がよく伝わってきて、きゅんとなります。ゆっくり読んで、ずっと眺めていたい。  
声優 / 富岡美沙子
- 「ああ、ほんとうに好きだなあ」としみじみ思える漫画に出会えて、とてもうれしい！「好きなものを持つことの幸せ」「一見遠い環境の人と仲良くなること」という大好きなテーマ(ここ最近の漫画の重要なテーマのひとつでもあると思う)が、あざとさのない、ごく自然な形で表現されている。ふたりの友情がずっとずっと続くといいなあと思う。  
漫画ライター / 門倉紫麻
- 我々男性にはなかなか縁遠いだろうBLの世界に、おばあさんの毎日というさらに縁遠いものを掛け合わせて、こんなにうれしくなってしまうヒロインふたりの歳の離れた友情を見せてくれる。やっぱり「好き」っていろんな形で人を繋げますよね。  
Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 2018年1番衝撃を受けました。テーマは「BL」ですけど、何かを好きになったら今が一番楽しい！と思うけど限りある時間と体力の限界など自分が年を取ったから共感出来ている部分もあるかもしれません。始まりと終わりを上手く描いている作品です。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- ひよんなことからBL漫画に出会ってしまったおばあちゃんと、不器用で人間関係があまり上手く築けていない女子高生との交流。静かに丁寧に、二人の日常が描かれる。普通なら絶対に交わることはなかったはずの二人が、純粹に好きなものを共有し合う姿がいい。好きって感情は偉大だ。

三省堂書店 / 内野智未

- 2018年、もっとも印象的かつ心動かされた作品はこれです。本当に読めて良かったし、ふだんマンガを読まない方々にも是非読んで欲しいと思います。

ライター / 早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

## 選考員コメント・2次選考

- 何でもないシーンでうるうるしてしまう。現在進行形でかけがえのない思い出が生まれていってるんだなと思って泣いてしまう。時間は尊い。時間は過ぎてしまう。そして時間は終わる。この物語もいつか終わる。二人のいつか終わるかけがえのない時間(いま)の積み重なりを、私も私の時間を過ごしながらかれからも見守っていきたいなと思いました。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

- すでに評価が高い作品なので今さら感もありますが、今回の候補作を読み返して、やはり本作が一番「大きな世界」だと改めて感じたので最高点をつけます。このちまちました世界のどこが大きいのだと言われそうですが、雪さんとうらさんの「関係性」が非常に大きい。年齢も境遇も人生観もまったく違う2人が出会い、「マンガが好き」という1点だけで友情を結ぶ。その好きなマンガだって、雪さんとうらさんに見えているものは違うはず。しかしそれでも、2人はその「異質なところ」を大事にするわけです。これは大きい。宇宙人を出しても、異世界人を出しても、これに匹敵する関係の大きさは、ちょっとやそっとじゃ表現できないと思う。なぜなら、私たちはすぐ相手に「自分に似たもの」を見つけようとするから。見つけられないと、安心できないから。同じじゃないことを受け入れつつ、新しい関係を結ぶのは、とても難しいことだから。しかしこの2人はそれを「縁側」という小さな世界でやっている。やろうとしている。私が本作を読み返すたび、いつも泣きそうになってしまうのは、そういうところです。しみじみ「これまでマンガを読み続けてよかった」と思わせてくれる作品を、高く評価しないわけにいきません。自分がうらさんより雪さんに近い年齢だから、余計にそう思うのかもしれませんが。

読売新聞文化部編集委員 / 石田 汗太

- 誰かと心が通じ合えた時の幸せ……などと書くと陳腐になるのだが、この作品ではそのことが事実を積み重ねることと描かれており、凡百の作品とは説得力が違う。繊細な女子高校生の気持ちがふわっとあがる瞬間にこちらの気持ちもふわっとあがって、幸せな涙がにじんでしまう。限られた世界の話をはたすら描いていくうちに普遍性がどんどん出てくるのいいマンガのように思うのだが、この作品はまさにそういうマンガだと思う。

漫画ライター / 門倉紫麻

- 75歳になっての新たな価値観への対面と興味を持って入っていけるバイタリティー、お友だちになってくれるBLに詳しいの高校生との萌え語りがとってもほっこりします。同人イベントに並ぶという情景をあんなにキラキラと描かれているところ…そして、おじいちゃんとの思いでに涙します。こんな素敵な作品に会わせていただきありがとうございます。

アニメイト本部 / 鈴木寛子

- 2018年を代表するマンガと言えやはりこれだと思います。人生に必要なマンガ、ってこういうのを言うんじゃないですかね。マンガ読みでない人にも広まることを切に願っています！

ライター / 早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

- Jガーデンに2人で行く、というのがとても面白い。年の差のある2人が、まるで中高生のオタ友のようで微笑ましい。おばあさんの性格、大好きです！

bar 図書室店主 / 岡部愛

- 自分の視界が狭いと、どんどん息苦しくなる。それが年齢だったり趣味だったり、ポンと新しいギャップを飛び越えられると、一気に世界が広がる。おだやかなテンションで、劇的な変化を描いている。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 共通の趣味は年齢や環境などを超えて人々を結びつけて救済する。そして新たな地平を眼前に現出させてくれる。派手な演出なく、ある意味坦々と描かれる物語に引き込まれる。

医師 / 岸本 倫太郎

- 75歳のおばあちゃんと女子高生が主人公。年齢を超えた二人のコミュニケーションを紡ぐ「漫画」。私はBLは苦手ですが漫画を販売する人間として素直に嬉しかったです。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

■ 結婚をしていて、子供も産んだ女性は75歳だからといって決して純潔ではないし、恋愛に純粹でもない。むしろさまざまな経験をしていて、恋情といったものの機微をじっくりと噛み分ける舌を持っている。そう考えるなら、BLという、男性と男性による関係が描かれたカテゴリーの作品でも、読んで忌避するというのではなく少し違った関係を描いたもののだとして、認めて受け入れても不思議はない。織田信長と森蘭丸の衆道な関係に理解が及んでいるからとか、三島由紀夫が『仮面の告白』なり「豊穡の海」4部作に描いたような同性間の恋情に文学などで触れてきたからといった理由を立てることも可能かもしれない。もっとも、そうした日本の伝統的な関係性への理解が一般的ならば、保守と呼ばれる人たちにどうしてLGBTのような関係性に対して異論を唱える動きがあるのかが分からなくなる。だからやはりそれは、恋愛という行為に対して抱くポジティブな理解、異性間であっても同性間であっても互いに思い思われる関係性に対して、前向きに捉えようとする意識の有無が重要なかもしれない。その意味で、鶴谷香央理が『メタモルフォーゼの縁側 1、2』（KADOKAWA、各780円）に登場する75歳の老婦人、市野井雪は恋愛に頑張る誰かには無条件で応援したくなる感性が、より強く備わっていたのかもしれない。2年前に夫が亡くなり、今は自宅で書道教室を営みながら日々を送っている市野井雪がふらりと立ち寄った書店で見かけたのは、きれいな表紙をした1冊の漫画。過去には『ベルサイユのばら』とか『エースをねらえ!』といった漫画を読んでいたこともあり、漫画そのものに対する忌避感はなかった。だからどういうカテゴリーの物かは意識せず、漫画ということで買って家に帰って読み始めてBLすなわちボーイズラブの作品だと気がついた。同じ書店で2巻も買って3巻も探すくらいだから相当に気に入った様子。もっとも、対応した17歳のアルバイト店員、佐山うらが探しても在庫はなかった。佐山は市野井には注文を依頼しつつ、家に帰って仕舞ってあった箱からその漫画の第3巻を取り出し、読み返ししながら市野井に対して関心を抱くようになっていく。最初は客と店員として接していた2人。それが、BLというカテゴリーの作品を通してだんだんと近づいていく、というのが『メタモルフォーゼの縁側』のだいたいのストーリー。読んで気がつくのが、75歳と17歳という歳の差が58歳もある2人が共にBLを嗜んでいる状況に、まったく違和感がないことだ。佐山の方は年齢からBLにハマっても不思議はない。一方で、市野井がBLに手を伸ばし、読んで抱く感慨にもしかしたら若い人たちが嗜むキワモノを上から目線で愛でるような感じが漂っているかもしれないと、読む前に誰かが思っても不思議はない。けれども市野井は純粹に、作品に登場するキャラクターたちの関係を応援したいと思ってBLの漫画を読み、そして絵が綺麗だからといって同じ作者の本に触れていく。その意識は、女性が読むものを別に気にしていないと言い訳して手にして嗜んでいる男性よりも、ストレートでシンプルだ。もちろん男性にも、BLに描かれる関係性を純粹に応援したいと思うなり、同じ嗜好の自分に重ねてみるなりして読む人もいる。それでも「腐男子」とカテゴライズされてしまう苦衷を、75歳の老婦人は感じないで済んでいる。もしかしたら、市野井が佐山と接触して交流を始めるきっかけが、BLでなかったとしても話は成立したかもしれない。ただ、75歳の老婦人がBLを手にしたことで、17歳のどこか奥手な女子高生が、人生をある意味で極めた人間と交流を持ち、人生に新しい道を拓くことになった。そうなるためには、佐山が嗜んでいて詳しいBLを市野井が手に取り好きになる必要があった。繋がりの鍵がBLであったことは、ひとり身になってしまっていた市野井の無聊を慰める以上に、青春のもやもやの中にいた佐山の足を踏み出させる意味があった。『メタモルフォーゼの縁側』はだから、若い世代が自分に自信を持って未来に向かおうとする勇気を与えてくれる物語だと言える。佐山が歩み始めた道がどこに繋がるか。描かれなくても興味を引かれる。もちろん、老いた世代が新しい文化に触れて気持を若くする道を示してもいる。ただそれは、若い人たちが嗜んでいる文化に固定観念で凝り固まった意識を持ちこんで攪乱することにも繋がりがかねない。そうではなく、純粹にまっすぐに文化を、それらを嗜んでいる世代の意識も含めて受け入れる覚悟を求められる物語だとも言える。とはいえ、17歳と75歳では残された時間が違う。そこからの10年を完結するまで待つことは、75歳の老婦人には困難が伴う。作者に直接、もっと早く続きを描いてとお願いしてしまった無礼は無礼としても、そういう意識を持って続きを待つ人がいることを、描き手たちには感じて欲しい。そんなメッセージも持った物語だ。

書評家 / タニグチリウイチ

■ 私もこうでありたい、と感じました。ちょっとしたことが気になり、「こうしておけばよかったかもしれない…」と思うことが多々あります。うららと市野井さんがお互いを気づかう姿に胸打たれました。

丸善丸の内本店コミック担当 / 八重田幸子

- すごくすごく疲れて、誰とも会いたくないし、話したくない夜に、本棚にあってほしい一冊。昔だったら、若い子側の立場で読んだかもしれないけど、いまはおばあちゃん側で読むことに気づいて、おおーと思いつつ。あの好奇心と行動力、肩の力の抜け具合、やっぱりステキ。好きなものがある暮らしっていいなあ。

ライター・編集 / 島影真奈美

- 「かわいらしい老婦人とのあたたかい友情」という微笑ましい展開にニヤニヤ、という楽しみに並走して、1年半に1冊という発刊タイミングから生きている間に読める新刊の冊数を知るといような、老婦人ならではの表現にハッとさせられる。作中に「表紙の絵を見たたん、親戚の子に会ったみたいな気分になっちゃって」というセリフがありますが、僕もこのマンガを開くたびに、3人目の祖母に会ったみたいな気分になっているもんだから、どうかこのうらかな縁側に幸あれと、切に願っているのです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 17歳と75歳がBLを語って...と思っていたがこの空気感が堪らなく好きです。

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 前評判からよかった本作品ですが、読んで納得。おばあちゃんとBL!? そんなことってあるの?なんて思いましたが、この作品を読むと、「好き」という気持ちはいろんな「垣根」を超えるんだなあと感じました。純粋な好奇心があたかな友情を結んでいく物語です。ボーイズラブを愛でるといことだけが共通項で、年齢も境遇も違っている、本来出会うことがないであろうデコボコなふたりの関係性のなかで、ひたすらに相手を思いやる気持ちが溢れている、優しい作品だと思います。女の友情なんて面倒なこともあるけど、こうやってゆるやかに繋がって相手を思いあえる関係ならきっと居心地がいいはず。まさに陽の当たる縁側のような読み心地の作品です。メインふたりだけでなく、他のキャラクターとの関係含め、今後の変化がとても楽しみです。

公務員 / 宇田川 結衣子

- 創作物を通して全く生き方も感性も違う同士が関わり少しずつ互いの人生に影響を与えていく、という、物語大好きなオタク的性質の人間からすると福音のようなお話です。続きが読みたいから本屋に行く、その先生の感性が好きになったから他の作品も読んでみる、先生に会えるかもしれないからイベントに行く、というマンガ好きなら誰もが当たり前に通過してきたであろう一連の行動を、マンガを何十年単位で読んでこなかった高齢の雪さんがナチュラルに辿っていくのを読んで微笑ましいと思うと同時に、人の行動を変えていく「物語の力」のようなものがとてもリアルに優しく描かれているなあと感動します。BLが何となく苦手、というひとにも刺さる内容だと思うので、物語の力に動かされた経験のある人にオススメです。

アニメイト秋葉原 キャラクターグッズ担当 / 岡部真矢

- 夫に先立たれた75歳のおばあさんが穏やかな老後生活を送る中でふとした拍子に、BL漫画を好きになって、書店員の女の子と仲良くなっていく描写がとても自然で、ほのぼのします。我が家の祖母も、祖父が早くに亡くなり、一人暮らしが長かった人なので認知症前は、こんな感じだったなあと懐かしくなりました。「好きなものが出来て、ときめきを感じる」「好きなものを共有できる友達がいる」って凄く嬉しいし、心が満たされますよね。いくつになっても好奇心は持てるし、世代が違ってても、相手への気遣いが出来れば友達はきっと出来る。二人の関係性がすごく素敵で憧れます。

会社員 / 佐々木つむぎ

- 趣味と友情に年齢制限はあるのか?こちらも色々と考えさせられる作品です。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- 文字が少ないけどゆっくり読みたい作品。表情や目線、見えているものにいろんな感情が詰まっていて胸がギュツとなる。暖かくて優しく泣けてくる。(私の涙腺が弱いのかな笑)2人のやり取りになんでこんなにときめくんだろう。この空気感好きだなあ。一次の時にもしましたが、2人が幸せそうに笑うと私もほんとに幸せな気持ちになる。BLがきっかけで女子高生とおばあちゃんが友達になるというテーマがキャッチーですが、それだけではない素晴らしい作品です!

声優 / 富岡美沙子

- 一次投票でも推薦しましたが、やはり何度読んでも愛しいマンガです。まだまだたくさんの人の手に届いて欲しいので二次にも推薦いたします。「BL」や「同人誌」にかかわる世界を描いているので、それらになじみのある人たちだけに読者がしぼられてしまうのであればとてももったいないと思います。なにか強く「好き」なものを持っている方には経験があることかと思いますが、同じものを「好き」同士でも「好き」の色が違っていてわかりあえないこともあります。この物語の主人公のふたりがその気持ちを同じ色で共有しあえることは奇跡のような美しい出来事なのだな、と強く感じます。そんなふたりの関係性をいつまでも眺めていられたらしあわせです。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- わかりみすぎて辛いという事ですね。

公務員 / 東くるみ

## 「10DANCE」井上佐藤

---

- ダンスの圧倒的な説得力！

作家 / 海猫沢めろん

## 「1518！ イチゴーイチハチ！」相田 裕

---

- 丁寧で綺麗な青春マンガ。物語が、今、すごく良い感じになってて、しかも先が楽しみ。一人でも多くの人に読んでもらいたい作品。

文教堂書店 浜松町店 コミック担当 / 金田健太郎

## 「1日外出録ハンチョウ」上原求、新井和也、萩原天晴、福本伸行

---

- 最強のスピノフ作品。

PENICILLIN / HAKUEI

## 「33歳独身女騎士隊長。」天原

---

- ファンタジー世界に於ける独身女性近衛騎士隊長の世知辛い日常。世知辛い系ジャンルがファンタジー世界まで浸透するほど、ファンタジーも身近になりえたのだなど。

住職・ライター / 蟬丸P

## 「36度」ゴトウ ユキコ

---

- ひたすらに正直であるところが、ゴトウユキコ作品の凄みだとおもいます。短編集として読むことができ、とても感慨深い。

オリオン書房アレア店 / 池本美和

## 「5分後の世界」福田 宏

---

- 最初に手にとった時は「村上龍」っぽいタイトルだと思いついて見た。主人公がひよんな事から5分後の世界に飛ばされてしまうのだが、その世界が仏像達に人類が滅亡させられてしまう未来。一度だけ主人公が飛ばされる前に戻れるのですが、そのきっかけを探すために仏像と戦います。得体の知れない物と戦うマンガはワクワクします。

デザイナー / 平沼寛史

## 「Artiste」さもえど太郎

---

- 「得意なことは得意なやつがやる」自分を認めることも誰かを認めることも、簡単そうに思えてとても難しいけれど、それができた時にこそ一人では生み得なかったものができ上がる、いい仕事ができる。例えどんな世界であってもきっとそうなんだろうし、だから面白いんだよなということを、次々登場する曲者揃いの魅力的な Artiste たちが様々に教えてくれます。やっぱり、イカした婆ちゃんが出てくる作品は良い。

会社員 / 伊東敬祐

- これはレストランを舞台にしてはいるが、人のコミュニケーションの物語だ。多様な人、それぞれのシチュエーション、様々なコミュニケーションに悩まされる人々を、ユニークな才能や成長とともに描いている。特に第3巻。この1冊だけでも完成されたひとつの映画のようで、何度読んでも素晴らしい。この人たちに会いたい、そう思って何度も扉を開けると、人と関係する人生はステキだと教えてくれる、大好きな作品。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 才能はあるが気弱で心優しい青年が、リーダーとして、レストランの厨房をまとめあげるために頑張る物語です。おおよそリーダーの気質がなさそうな彼ですが、不器用ながらも相手を知る努力をひたむきに続けることで、コミュニケーションに難のあるくせ者揃いのメンバーをまとめあげて行きます。ばらばらだったメンバーがすこしずつチームとして機能してゆく過程は痛快というよりは、どこか暖かく穏やかな気持ちにさせてくれます。それは、メンバーに寄り添ってメンバーと伴走するタイプの主人公がリーダーだからだと思います。協業を促進する新しいリーダー像の一つがここにあると思います。既にリーダーとなっている人、これからリーダーになる人にお勧めのマンガです。

Sler システムエンジニア / 廣瀬公将

- 料理漫画かと思ったら厨房漫画でした。そこから周りの人間関係を掘り下げて展開するお話です。この人の描くキャラクターの、不器用で芯が通っていてどこか優しく遠慮がち、そして損をしがちなところは、気疲れした時に読むとずっと心に入ってきます。もっと多くの人に手にとってほしい。

WEB デザイナー / 河本智芳

## 「AUTOMATON」倉蘭 紀彦

- 渋いSF。世界の質感、手触り感が伝わってくるのが素敵。考えさせられる物語も良い。

文教堂書店 浜松町店 コミック担当 / 金田健太郎

## 「A 子さんの恋人」近藤 聡乃

- 『A 子さんの恋人』と『ニューヨークで考え中』は同時進行連載でじつは両方読むとさらにおもしろい。『ニューヨークで考え中』はNYに関係あることとか、異文化の中で感じたことに重きを置いて描いたエッセイマンガで、『A 子さんの恋人』のほうは、完全にフィクション。NYも出てきますが、本作のほうは東京観光的展開。近藤さんのマンガのフードの特徴は、キャラクターがしゃべりながら炊事をしたり、食べたりするコマを多用していることだ。会話の内容とやっていることが違うという二重構造が、物語に深みとユーモアを与える。ところで、NYや阿佐ヶ谷で暮らしてみたくないですか？「別に」というひともしよく読めるのは、作者の食べ物表現が“とても美味い”から。近所のカフェの軽食や安いエスニック料理、友人との会食。さらりと描かれたフードはどれも食べてみたくなる。

菓子研究家 / 福田里香

## 「BLUE GIANT SUPREME」石塚 真一

- とにかく熱い！画から音が飛び出してくる迫力。ストーリー展開も秀逸で素晴らしいです。大好きです。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

## 「CANDY & CIGARETTES」井上 智徳

- カッコいい。ひたすらカッコいいアクション。パディものとしての物語も魅せる。そして女の子はカワイイ。満点ですなー

文教堂書店 浜松町店 コミック担当 / 金田健太郎

## 「CITY」あらゐけいち

- ダイナミックなストーリー展開などは決して描かれてません。ちょっと不思議なことや日常で起こりそうな展開がオモシロイ。

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部大介

## 「Dr.STONE」Boichi、稲垣理一郎

---

- 現代から数千年後の世界が舞台の SF サバイバル。科学がフィーチャーされ、作中に出てくる技術や工夫はロジカルに表現されています。物語はまさに SF ! という感じの内容ですが、科学を随所で使っていて、現実味があるのも魅力です。

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

- 文明早回し漫画。順番は前後します。科学の進歩は悲劇も生んできたけれど、結局のところ、使う人間次第だと教えてくれます。なおメンタリストには「人間チョロい（物は言いよう）」と教えてもらいました。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

## 「GIGANT」奥 浩哉

---

- 「GANTZ」や「いぬやしき」のように、ほのぼのとした情景描写がありつつも、忍び寄る脅威が日常の違和感として表れ、とても続きが気になる漫画です。男子高校生× AV 女優という組み合わせも刺激的で物語の良いエッセンスとなっています。

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

## 「GROUNDLESS」影待蛭太

---

- いわゆるファンタジー的な要素の無い架空戦記物です。戦場で狙撃手が活動する様をここまで描いた作品は珍しいのではないのでしょうか。視点を変えた敵兵側では狙撃される側の恐怖とその惨状がじっくりと描かれています。戦場が変わる度の描かれる視点も広くなり、いろいろな立場の人の思惑が錯綜していきます。戦術や戦略・策略も自然に描かれており、その手の話が好きな人にはたまらないと思います。

会社員 / 佐々木つむぎ

## 「JJM 女子柔道部物語」小林 まこと、恵本 裕子

---

- ストーリーの緩急に引き込まれる。

株式会社 TORICO 代表 / 安藤拓郎

## 「LIMBO THE KING」田中 相

---

- 映画のインセプション見たいであり、三宅乱丈先生の pet みたいな感じ、こういうテーマが大好きで、人間の未知な力や世界観が物語を謎が解けていく面白さと相まって好きな作品です

tetote 代表 / 力丸真

## 「OLD WEST」前田千明

---

- 画力抜群、ストーリーも文句無し！なのにこの上手さが、凄さが、今の判り易くキャッチーな漫画しか売れない風潮では一部の漫画読みにしか伝わらないもどかしさ！こんな作品が描ける新人作家さんを育てて伸ばして広めて行ける業界であって欲しいと願いを込めて一票です。

(株) 首都圏 TSUTAYA / 井出麻悠美

## 「ROUTE END」中川 海二

---

- トレースかこれか迷った結果、トレースは一足早く映像化してしまったため今後の期待をこめてこちらで。

スタジオフーズ 代表取締役 / 小林智之

## 「VS. アゲイン」中馬 孝博

- 諦められないもの、自分の中の芯を持っている人に勧めたい漫画。特に社会に出てから、諦められないものと自身の現状との擦り合わせで悩んだことのある方は読むと共感できるのではないだろうか。タイトルのつけ方も秀逸。

ジュンク堂書店池袋本店 / 杉佳尚

## 「アクタージュ act-age」宇佐崎 しろ、マツキ タツヤ

- 「天才」を主人公にした漫画は『響～小説家になる方法』をはじめ数々読ませてもらっていたが、これは成長していく「天才」が主人公。女優の原石という設定で、読み進めるごとに新たな魅力が加わっていく…。いやあ、まだまだ世界は広い。メソッド演技など海外では今やお馴染みの役者技法をわかりやすく説明しながら、現状日本が抱えている事務所主体の役者の在り方・起用方法に対し、問題提起もしている。こんな骨太な、しかもエンターテインメントな作品が週刊少年ジャンプで読めようとは。文句なしの名作。

リリカル株式会社取締役デザイナー / 北山友之

- 役者における「天才性」を常軌を逸したエピソードの数々でケレン味全開で描く…ってこれガラかめや！ページをめくる手が止まらなるとこまでガラかめ！ちょっとした百合味は時代性？と思ったけどそもそもガラかめも百合味あるかも、なんて再発見。

株式会社ヴィレッジヴァンガードコーポレーション 店舗開発課 / 大山敏樹

- まずは、ジャンプっぽくないというのが第一印象。役者志望の女子高生が成長していく物語と書けば、よくある設定だが、人物描写が非常にうまい。本気で、夜風景の演技する風景が見たくなる。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

## 「あせとせっけん」山田 金鉄

- 汗っかきがコンプレックスなヒロイン、麻子さんと麻子さんが勤める会社の商品開発部所属の名取さんのドタバタ恋愛コメディ。とにかく麻子さんがやわらかそうでふわふわしてそうでかわいい。登場人物もみんな魅力的でほのぼのします。

会社員 / 工藤圭

- 恋に不得手な麻子さんの初々しい姿に読んでいる自分が赤面しっぱなしになります。思わずにやけてしまうこともしばしば。

丸善丸の内本店コミック担当 / 八重田幸子

## 「あなたの鼓動を見させて。」柵橋 なもしろ、MITA

- 期待値を込めて。グロさはかなりのものですが、サスペンスとしてどう展開していくのか、とても気になります。

会社員 / 林礼春

## 「ありがとうって言えたなら」瀧波 ユカリ

- 不必要に感動を煽るわけでもなく、リアルな闘病、介護の記録でもない。母親へ愛を伝える作品だった。瀧波さんのお母さんは、破天荒で自分勝手であっても、愛情をもって子どもを育ててきたのだろう。「好きでこの家に産まれてきたわけじゃない」なんてかわいくないことを言っていた私も、いつか親に「ありがとう」が言えるのだろうか。

主婦 / 赤坂真実

## 「あれよ星屑」山田 参助

- 敗戦後の日本。闇市であやしい煮込みの店を経営する下士官上がりの川島（言及はないが二枚目の見た目で描かれる）が、復員してきた元部下で毛むくじらの熊のような黒田と再会し、行動を共にするようになる。焼け跡で何もなければ活気だけはあるマーケット。そこに生きる男女の、それぞれが戦時に負った心の傷や、その日暮らしだがしたたかでたくましい生きかたを丹念に描きつつ、次第に大陸での、客観的に言って悲惨きわまりない戦闘の？末が明かされていく。本作が連載当初から話題だったということは後から知った。コミックビームでの連載が完結するまで読んだことがなかったのだけれど、完結記念と銘打たれて夏に公開された長文の作者インタビュー（マンガ通信。作画についての話など必読）をたまたま読み、そのまま神保町に走って1～2巻を購入。週末に読み、週明けに同じ店で続きを買ってひと晩で7巻まで一気に読みして完全に寝不足になり、それでも「読んでよかった」と強く思った。ぶっ通しで読むことができてよかったかもしれない、とこれは負け惜しみ。ともあれ、戦争における国と国の勝ち負けそれ自体はゲームみたいで現実味が無いが、戦争に突き進む国家が犠牲を強いるのは無名の兵士とその家族で、勝っても負けてもそれは変わらない。生き残って帰還したとしてもそれでめでたし、では当然なくて、まっとうな神経であればあるほど消えない慚愧の念を抱えて生きることになる。一方で「あれはなかったことにして」次の時代を軽薄に踊る人たちもいる——。そんな戦後史を読む者に考えさせるのに、説教臭さや振りかぶった主張はなく、おもしろい物語としてひと息で読ませる技。端役まですべての登場人物に血が通っていて、エピソードの一つ一つに心が揺さぶられる。敗戦から70年が過ぎる今にこのマンガが連載され、きちんと完結したということが一つの事件だったのかも思ったりする。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

## 「あをによし、それもよし」石川 ローズ

- 必要最低限のものしか「持たない暮らし」に憧れている主人公が、奈良時代にタイムスリップして、自給自足の本物のミニマリスト生活を楽しむお話。基本はギャグなので、奈良時代を知らなくても楽しめる。しかし、主人公の名前「山上」をみて、ピンとくるよね？そう！って感じで、万葉歌人、万葉集をちょこっとでもかじってる人はより楽しい作品。好きです。

主婦 / 赤坂真実

## 「いそあそび」佐藤宏海

- 田舎町の丁寧な描写はまるで旅行気分。磯での遊びを描くこととも合致し、ハマる題材を見つけた作者の背骨の強さと安心感。

往来堂書店 / 三木雄太

## 「インヘルノ」マツモトトモ

- 昨年出た5巻が最終巻でした。轟くんが医者って最高でした。更さんはもう最後のあたり椎名林檎さんに見えてきた。最後まで地獄。そしてこれからも地獄。という感じでしたが、ドロドロでもなく昼ドラでもなく、さりとした読後感でした。いろいろあんまり押し付けがなくて、フラットな距離感が好きでした。そしてストーリーとは別に、その巻の柱コメントで全読者はある意味地獄に突き落とされたわけなんです（当時「これが本当の地獄（インヘルノ）…？」と頭を抱えた）今年発売された過去作品をまとめた新刊でその件について触れてくださっていて吹き出しました。でもほんとうに、あの一、何年も会えないのすげー寂しいから！できるだけ早く！ちょっとでも顔見せてくれたら！嬉しい！です！おねがいします！！！！！！

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

## 「うたかたダイアログ」稲井カオル

- 他愛のない会話ネタを面白く読ませるセンスの塊。本作のヒットを機に「銀河系不動産ほしの」「平凡探偵つきなみ」なども書籍化して欲しい。

ライター / 福井健太

- はぐれヒロインにしてキテレツ界のホープ、と説明されるすっぱけ個性派女子と、長身金髪そのくせ実のところはヘタレという純情男子。ドラッグストアでバイトしている高校生男女の会話劇だ。コンビニではないところが渋いというかユニークで、いわゆる本部の締め付けが少ないゆえのユルさを感じさせて全体のムードづくりに一役買っている。おもしろさを説明しにくい（なのでぜひ単行本で読んでほしい）のだけれど、1ページに3～4回、つまり2コマに1回くらい以上、クスクス笑えるやり取りが投入されるにも関わらず、ちゃんと会話が成立し、伏線も張りまくられ、あまつさえすべて回収され、ストーリーはしっかり進展し、ちゃんと1話16ページでオチを迎える。これはほんとうにすごい。あるコマと次のコマはボケとツッコミの関係を役割分担し、ツッコミのコマは次のコマにとってのボケとなり、そのまた次のコマにツッコまれ（以下略）というループが、のんびりしつつも独特のリズムを作り出している（作者は大阪出身とのこと）。「無駄口叩いて青春を浪費して」みたいなことが2巻のカバーに書いてあるけれど、言葉通りに受け取るのはヤボで、それができるのが青春の特権なのだ。きょうもきょうとて、あしたも続いていくのだなあ、という2人のやり取りが、なんとも平和な感覚をもたらす。しかしながら最終3巻（発売は対象期間外）は、そんな平和は期限つきであり、だれもがそれを高校時代に特有だと知っている、という前提に立って後味の良い成長譚としてまとめている。高校生にしか感じられない何か、その「何か」は時代やその子自身によっても違えけれど、その「何か」を踏まえて大切な人との関係性を前に進めるのだ、という至極まっとうな考えで描かれる大団円は好感度高し。惹かれるって「若い心」と書くのか。気付かなかった。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

## 「えれほん」うめざわしゅん

- 規制だの差別だのが一々大きく騒がれる昨今、この作家さんの作品にはいつも「ちょっと時代が違えば出てなかったのでは？」とハラハラします。この表現大丈夫？この設定良いの？そう感じる部分もある意味魅力。漫画だけど哲学書を読んだかのような、ただ絵と文字を追うだけでは理解が追いつかず読んだ事にならないような、普段怠けている脳がとても刺激される作品な上に、ギリギリ感が凄い。描き続けて欲しいです。こういった作品が『玄人受け』で済まされず、広く読まれ続ける世界であって欲しいです。

(株)首都圏 TSUTAYA / 井出麻悠美

## 「おうちで死にたい」広田 奈都美

- ベテラン漫画家があえて介護の現場に飛び込み、訪問看護師として働きながら描くリアリティに圧倒される。何より「死」を前にした様々な人生模様、家族模様のドラマを一話完結でシャープに描く作者の力量に脱帽する。「死」は誰にも等しく訪れるが、そこに至る過程に同じ道は一つもない。そして「生」をどのように全うするかに正解は無い。この大いなるテーマに体当たりで挑む作者に拍手を送りたい。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

## 「おじさまと猫」桜井 海

- ちょっとタイトルアレなんで読むのに躊躇していたところウチの夫が面白いよ？と言っていたので読むことに。自分、猫飼いはじめたので、ちょっと泣けました笑猫が喋るとか好きじゃないんですけど、可愛いです。おじさまも可愛くてほんわかします。

専業主婦 / 柴佳衣

- 読みながらポロ泣きしちゃった作品。猫もおじさまもよかったねえ。愛は人間同士で待つだけでなく、孤独も人間同士で埋め合うものでないと気づかせてくれる一冊。2人とも？1人と1匹とももっともっと幸せになって欲しいなー。

鳥取県高等学校美術教員 / 佐川由加理

- ただただ、ふくまるがかわいい……。ただの、ぶさかわ猫漫画だと思って買ったら、涙あり、笑いありと、ほっこりさせられる。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

## 「かくう生物のラブソング」沼田 ぬしを

- 2018年、いえ、わたしの16年間の書店員人生でも1・2を争う推し作品です。「絵柄が人を選ぶ。ゾンビというテーマが人を選ぶ。」と、正直さんざん言われました。ええ、ぜひ、選んで、この作品を選び取ってください！その価値が絶対にあるマンガです。震災と隕石という二度の災害に見舞われた街で生きる人々は、主人公の女子高生・夜目子をはじめ、全員が魅力的！重めの絵柄と設定の複雑さで読むハードルが高そうに思えるかもしれませんが、実は意外とコメディタッチで、それなのに人間のやさしさ、愛情、悲しみ、覚悟、死生観などが深く描かれているお話です。濃密な世界観を味わいたいあなた、読み応え120%ですよ！

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

## 「カムヤライド」久 正人

- 久正人先生といえば、スーパー戦隊シリーズのデザイナーとしてもご活躍の「ホンモノ」の方ですが、『エリア51』でもふんだんにまぶされたパロディ心といえますか、様々な先行文化へのリスペクトと愛を感じるイジリが最高にイカした作風の先生です。いまや「ホンモノ」になった先生が【日本神話×特撮ヒーロー】なんてモンをブッ込んでこられたら、私のような拗らせものはたまらんわけです！ポーズを取ったらハニワを踏んづけ、叫ぶ掛け声「ライド！」、たちまち神秘的土がその身を包み、誕生！ヒーロー「カムヤライド」ってなもんですが、このお約束に日本神話モチーフのファンタジー的な理屈をつけて、封印されたはずの国津神と戦わせるというこの美しい展開！思えば、顔まで覆うヨロイを身につけた変身ヒーローというのも日本独自のもの、言ってみれば現在進行形の神話のようなもの。じゃあその神話を過去に過去に辿っていった大元には、こんなヒーローがいたかもしれないと想起させます。特撮ヒーロー好き、日本神話好きには間違いなくブッ刺さる怪作です。

アニメイト秋葉原 キャラクターグッズ担当 / 岡部真矢

## 「けもらいふ」雪本 愁二

- とにかくかわいいです。とにかく、かわいい。

ミュージシャン / 杉本善徳

## 「こぐまのケーキ屋さん」カメントツ

- ドントシンク！フィール！！ブルースリーじゃなくてもこう言っちゃうくらいこぐまの店長さんが可愛いです。はやくも3巻がでてるけど、作者の先生の描き方がうまいからか、登場人物が飽和することも飽きる事もなく読まれる。日常の何気ない出来事が幸せとユーモアに溢れている。それを見つめられる作者さんとこぐまのかもしれないと思います。

鳥取県高等学校美術教員 / 佐川由加理

- ある日突然、ツイッター上に1編の4コマまんがが投稿された。『こぐまのケーキ屋さん』は瞬く間に伝播し、なんとツイッターマンガ史上最速で書籍化に至る。個人的は話だが、こんなにマンガのケーキを食べたくなかったのは、よしながふみ作『西洋骨董洋菓子店』のパティシエ・小野裕介以来だ。こぐまが作って「店員さん」がサービスするとか、神の閃きか。おしゃれ女性誌で「あなたのベストケーキ紹介」のアンケートの仕事依頼がきたら絶対激推しする覚悟。

菓子研究家 / 福田里香

## 「ここは今から倫理です。」雨瀬シオリ

- 「倫理」を携え特異のアプローチで生徒を導く高校教師が主人公。鬼才、雨瀬シオリの独特な画がより作品に深みを与える。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- いいこと言うイケメン。これが倫理なのかと思いましたが、クールな感じではあるが中々熱血漢な教師にも見える。数学でも国語でもこの教師だったらいいのではないかと思うが、「倫理」という所によくわからない説得力がある！！

デザイナー / 平沼寛史

- 倫理を教える教師のお話。一見冷たそうな主人公の教師は一人一人の生徒に対して、真っ直ぐに真剣に向き合い、生徒の心を解きほぐしていく。有名な哲学者の言葉を借りるなどし、生徒に説いていく姿は読んでこちらも納得させられる。興味深い話ばかり

bar 図書室店主 / 岡部愛

## 「コタローは1人暮らし」津村 マミ

- 昨年に続き、2年連続で票を投じさせていただく。アパートに一人で暮らす大人びた振る舞いの4歳児の心の裏側には何が潜んでいるのか。かわいらしい絵柄と「わらわ」「ぞ！」という"殿様語"を駆使するセリフ回しの向こうには、心を震わせる切ない物語が描かれている。1話分のページ数は決して多くないが、心温まる話がていねいに描かれている。各話ごとにいい読後感が味わえる。心の目を潤したい方に。

編集者/ライター (馬場企画) / 松浦達也

- 最初はちょっと不気味なぐらい、無表情だった主人公・コタローが回を重ねるごとに表情豊かになって、ごくたまにわがままも言えるようになって……という小さな小さな変化に、心を揺さぶられる。コタローを放っておけない隣人たちも決して、順風満帆な人生を送ってるわけではなくて、それぞれしんどさを抱えてたりもするんだけど、それでも関わりあう。一方的に助けられるのでも、優しさを分け与えるのでもなくて、お互いがちょっとずつ荷物を持ち合うような人間関係にホッとさせられる。しょうもないギャグの応酬を見ていると、妙に心が休まる。疲れたなーと思った夜に読み返したい一冊です。

ライター・編集 / 島影真奈美

## 「コノマチキネマ」瀬川藤子

- 人が好きでみんなと楽しく暮らしたい主人公に対して降りかかる現実。なんで人って分かり合えないのか、でも前向きに進む主人公。こちらも人間関係について考えさせられる作品です。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

## 「この愛は、異端。」森山絵風

- 悪魔と少女。いびつに見えるけれど、悪魔の無償の愛がすごくて泣けます。そして真面目なのにちょっとお茶目で笑えるところが好き。

主婦 / 紺野泉

## 「ご注文はうさぎですか？」Koi

- 今年のコマ枠は原点回帰して、こちらです。今や萌え四コマの代表作と言っても過言では無くなりました！可愛い女の子達をしっかりと愛でて下さい。女性ファンも増えているとかいないとか！?

株式会社 TORICO コミック事業部 / 日吉雄

## 「サトコとナダ」ユペチカ、西森 マリー

- ガールミーツガール。日本人のサトコとサウジアラビア人のナダの異文化交流4コマ。異文化に暮らす二人の共同生活ならではのエピソードを追っていくうちに、自分をサトコに投影するように、ナダという女性が自分の親しい友人のように思えてくる素敵なお話でした。

会社員 / 工藤圭

## 「サマータイムレンダ」田中 靖規

- 夏の高校生の物語のような表紙とタイトルから想像しなかった展開。何度も過去に戻りながら物語が進むタイムリープです。内容が中々のファンタジーでタイムリープの度に楽しんで読めます。まだ、ストーリーで起こる事件の本質がわからない所が多くあり、気になるマンガです。

デザイナー / 平沼寛史

- ありがちなタイムリープものなのですが、そこにいろんな要素を含めることで一線を画すことに成功している作品だと思います。読み進めることにミステリー、サスペンス要素が深くなり、バトル要素まで出てきてハラハラドキドキしてしまう展開が熱いです。

会社員 / 三浦佑樹

## 「さよならミニスカート」牧野 あおい

- モヤモヤすることがあったのに、確かにマンガに描かれてきた題材ではないことを取り扱ってる本作。今だから生まれた作品だな、時代を切り取ってるなと思う。りぼんは確かに私の小学校の愛読書だったけど、いつしか卒業してしまっていた。まさか今になってりぼんを読むとは。そして少女漫画の枠組みを超えてジャンプ+に配信されるとは。と驚いた。恋愛とか成功物語とかシンプルなものではなく明確にメッセージが読み取れる作品。それは痛さもあるし、共感もあった。単純な男 VS 女の構図ではなく、生々しい存在「未玖」がいることで、現実世界とのリンク度がすごい。社会人になってだいぶこういう女子とは遭遇することもなくなったけど、学生時代にはこういうこともたくさん経験した。そのときのモヤモヤにどんな救いがあるのか、もしくはないのか、今後が楽しみです。

会社員 / 西尾美里

- レーベルが「りぼん」というだけで、嫌煙して欲しくない。年代問わず、男女問わず、読んで欲しい。ただの少女マンガかと思いきや、現代を象徴するかのような話の展開に驚かされた。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- りぼんを読んでいた時代に感じた「来月が待ち遠しい！」という感情が蘇りました。少女時代にこの作品を読んでみたかった。きっと今とは違うもっとキラキラした感情で読めたかもしれない。

丸善丸の内本店コミック担当 / 八重田幸子

- 主人公の秘密。秘密は隠し通せるのか、あの人は味方なの？など気になる伏線があり、今後の展開に期待。リアルとドラマを盛りだくさんにしてこれからも盛り上げて欲しい作品です。

マンガ家・マンガ編集者専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

## 「さんかく窓の外側は夜」ヤマシタ トモコ

- 色々繋がってきてこれからどうなっていくのか…。

主婦 / 紺野泉

- Amazon のレビューとかに BL で気持ち悪くて読めないとありますがたしかに BL 要素は強いものの読むところはそこじゃない！巻数が進むほど少年漫画のような熱さに迫ってきます。怖さ熱さキャラクターの感情の動き全てが相まって、とても良い作品になってきます。

専業主婦 / 柴佳衣

- 昨年に引き続き推します！次の巻の発売を一番楽しみにしている作品。年に1回のペースなのがもどかしい…。最新巻ではそれぞれの人物像、関係性が少し見えてきたのもあり、今までの不気味さとはちょっと変わってきた印象。早く次の巻が読みたい！って大事なポイントだと思う。

三省堂書店 / 内野智未

## 「しーちゃんのごちそう」たかなししずえ

- 漫画家たかなししずえさんの幼少期の思い出をもとに描かれた作品。同年代ではないけれど読んでみると自分の子供時代の食卓が色鮮やかに蘇ってくる。特別な食べ物ではなく、日々の食卓と、その周りの出来事や情景。とにかくお味噌汁が飲みたくなる。卵をぼんしてもらったやつ。

三省堂書店 / 内野智未

## 「じけんじゃけん！」安田剛助

- ミステリマニア女子高生の残念ぶりを描くコメディ。屈折した読書ネタ漫画とはテキストへの姿勢が違う。

ライター / 福井健太

## 「しまなみ誰そ彼」鎌谷 悠希

- セクシャルマイノリティがテーマであることが前面に出やすい作品かとは思いますが、最も心に残ったのは誰も誰かを「わかりきらなくてよいのだ」ということでした。そういったことすべてが鎌谷先生の丁寧で濃密な筆致で描かれている、とてもうつくしい本でした。

会社員 / 工藤圭

- この漫画が1番コメントに悩みました...!!主人公の男の子が、同級生に、同性が好きということがバレってしまったところから物語は始まります。アプリのマンガワンで見つけてなんとなく読み始めたら、どんどん引き込まれて最終話まで一気に読んでしまいました。読み終わってボロボロ泣きながら、この作品に出会えてよかったと強く思いました。全話読んだけど、本屋さんに行って紙の本を買いました!私が何を言っても、どう感じるかは読んだ人次第だと思うのですが、この作品こそ、読んだ本人が感じたことが全てというか、正解なんてわからないけどそれが正しいというか...もうだから私の感想は必要ないのかもと思います。それよりも自身で感じてほしい。どうぞ、読んでみてください。

声優 / 富岡美沙子

## 「ジュニオール」灰谷音屋

- 初めての対戦相手と同じ学校の野球部で、「?」となったのも束の間。何に縛られるでもなく、明るく楽しく楽しくサッカーをするメンバーに、本来のスポーツの在り方を見た気がしました。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

## 「スギナミ討伐公務員～異世界勤務の人々～」佐藤祐紀、春原ロビンソン

- ジャンプ+というネットで連載中ですが、とにかくにも面白いです。ジャンルは異世界リアルファンタジーみたいな感じですが、主人公たちが公務員のため、良いところでお役所としての現実が立ちはだかったりします。そこをまた魅力的なキャラたちが、リアリティ溢れる言い訳じみた上手い言い回しで、法を掻い潜ってく様が、見ていて気持ちいいです。作画もきれいで見やすく、基本的に可愛い絵柄なのですが、異世界のモンスターだけいきなりやたらグロく登場するので、すごくビビります。(でも昨今の可愛グロい萌え系の漫画とは全然違う)ジャンプ+はコミックスが売れないとすぐ打ち切りなので、売ってほしいです。

バーテンダー / 村井真也

## 「セイキマツブルー」ヒロタ シンタロウ

- 女子×世紀末。世界の終わりを迎えるトリガーは女子中学生だった。信頼、友情、いじめ。青のインクで印刷されているのも凄いです。紙の単行本で見て頂きたい一冊。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

## 「世界で一番、俺が〇〇」水城 せとな

- "一番不幸になった者の願いを叶えるゲーム" という設定に目がいきがちだが、それを通して仲が良かった幼なじみ3人が不穏な空気になる過程の心理描写が、本当に素晴らしい。人間の人間らしい、きれいだったり汚かったりする内面と、取り繕う外面。相手のことを思うあまり、うち出た行動。衝動。胸が痛くなる。好き。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

## 「ぜっしゃか! - 私立四ツ輪女子学院絶滅危惧車学科 - 」せきはん

- 20歳あたりだから1985年から5年間ほど、1975年(昭和50年)型のスカイライン2000GT、すなわちケンメリの4ドアに乗っていた。従兄弟が乗っていたものをもう乗らないからと回してくれたもので、ショックがコニに変えられていてとても硬く、ちょっとした路面の凸凹が伝わって乗り心地はハードだったけれど、カーブなどで深く沈み込んで足を引っ張ることなくきびきびと走ってくれたし、いじってあったのかL20型のエンジンもしっかりと回ってくれて、1トンを超える重量を持った車を坂道でもしっかりと引っ張ってくれた。とはいえ面倒ごとが多かった。エンジンオイルやオイルフィルターを定期的に交換する必要があったし、キャブレターに空気を送り込む場所に取り付けるエアフィルターの交換も必要で、そうしたパーツをカーショップに行き探す必要があった。そして10年も走っているとあちらこちらにガタも出ていた。ブレーキは何度か踏まないと効かないことがよくあった。ワイパーもモーターとクランクをつなげる部分が外れて止まってしまうことが頻繁に起こった。フロントガラスの隙間から雨漏りもした。一方で、乗っている方も初心者だったため、あちらこちらをぶつけてへこませてしまって綺麗だった車体がボロボロになってしまった。それでも5年間乗り続け、10万キロは走らせたものの東京へと出ることになって車は持っていけず、そのまま廃車にしてしまった。今にして思えば、乗り続けてフルレストアすれば良かったと思っている。旧車、あるいは絶版車と呼ばれる日本の1960年代から70年代の車に対する興味はなかなか高く、ハコスカのGT-RやフェアレディZ432といった希少な車だけでなく、ケンメリですら数百万円で取引されているからだ。空力が重んじられ、CADの上で無限にいじくり回されながら微調整され、そして合理性から他の車種との共通化も図られるようになった設計の上で生まれてくる今の車はどれも似通っていて、デザイン的に圧倒的な存在感を見せて乗り手を誘うことが少なくなっている。大して1960年代から70年代にかけての車には、格好良さを狙ったデザインから多少の引き算をされた姿で量産化されても、そこにどこか手作りの跡が感じられる。スカイラインでいうならサーフラインと呼ばれる、リヤホイールの上に浮き出したラインは空力的にも強度的にもたいした意味はない。それをボディ加工の段階でプレスして浮き上がらせて見た目の上でスタイリッシュな印象を醸し出そうとしている。そうした作り手のこだわりと、そして長く乗って来た人の愛着が重なり合って生まれる情感が、旧車にはあって今改めて人気になっているのかもしれない。単純に子供の頃に憧れた格好良さを、大人になって得た金で再確認しているだけかもしれないけれど。そうした大人のノスタルジーを、若い女子高生が感じて入るかは分からない。ただ、せきはんがぜっしゃか、すなわち私立四ツ輪女子学院にあるという、絶滅危惧車学科に入学した女子高生の百瀬莉子が、道ばたでパンクして止まっていたマツダR360クーペに乗っていた老女に話した、「古いクルマって、なんかどうぶつみたいだなんて今のクルマよりちっちゃくて個性的な顔しているしおばあちゃんのクルマもカエルみたいですごくかわいいですよ」という言葉から感じるに、今の車にはない味がやはり旧車にはあるようだ。あと、莉子が続けた「ちゃんと散歩連れて行かないとすぐ調子悪くなっちゃうんだよおもしろいよね」という言葉には、取扱の面倒さが逆に動物と、あるいは人間といっしょにいるような感じを抱かせて、ずっと寄り添っていたいと旧車に対して思わせる理由が含まれている。そうした言葉が女子高生の口を借り、百瀬莉子らが登場する「ぜっしゃか! - 私立四ツ輪女子学院絶滅危惧車学科-」(KADOKAWA、1巻2巻各580円)を描いたせきはんの思いではないとは限らない。た

だ、長く乗っているいろいろな場所に行った車に思い出を感じる、大好きな身内が大事に乗っていたことでいっしょに愛着を覚えるといったことは、女子高生でも誰でもある。そんな気がする。そうした車への思い出を、廃車によって消さずレストアによって蘇らせ、明日へとつなげていくことを目的にした女子高生たちの物語が、「ぜっしゃか！ー私立四ツ輪女子学院絶滅危惧車学科ー」だ。スズキフロンテクーペでありスバルサンバーであり、ハコスカと呼ばれるスカイライン2000GTの4ドアセダンでありスバル360であり、マツダコスモスポーツであり後期型いすゞベレットGT Type Rといった大人が聞けば懐かしい車がずらずらと登場していて、可愛い女子高生たちのキャラクターとは対照的に、どこまでも正確なディテールで絵にされていて、そこからも莉子がいうような個性を感じ取れる。そして、物語の中で故障が起こり、チョークを引っ張らなければエンジンがかからないような描写を通して、取扱の厄介さと、それとは裏腹の一手間かける愛着を覚えさせる。誰もが旧車への愛情を見せる訳ではない。新型のポルシェにのって、納屋に放って置かれたスバル360をレストアしてもらい売り飛ばそうと言う若い人間も登場して、そういう人間が大半であり、だからこそ自動車産業も回るのだらうとも思わせる。ただ、先輩のクレアが莉子に贈ったどこか不思議なゴーグルを通して、過去にポルシェのオーナーがスバル360の故障を直す父親の後ろで起こっている場面が見えたことで、反意ではあっても思い出があったことは伺える。そうした思い出を改めて感じ取ってもらうため、女子高生たちはレストアに挑む。見てポルシェのオーナーが何を感じるか。分からないけれども読んだ誰かは捨てようと思っていた何かを手元に残しておきたいと考え直すかもしれない。それで良いのだ。環境問題を考えるなら、燃費が悪くて排気ガスにも汚染物質が多い旧車は決して歓迎できるものではない。ただ、近隣を転がして楽しむ程度の範囲ならそうした問題も大きくはならない。車が若い人に売れない時代に、何が車の魅力なのかを感じてもらおうといった面が旧車にあるなら、そこを基点にして考えていくきっかけにはなるだろう。決して日本の旧車への愛一辺倒ではなく、ヘリテージカーと呼ばれる海外の、クラシックカーよりははや新しい旧車を担当する学科の存在も描いて、バンデンプラスプリンセスなりフィアット600ムリティプラといった車にも良さがあって、それらを愛する人たちがいることを紹介している。普通に新しい自動車を作ろうとしている人たち、自動運転技術に挑もうという人たちもいて、それぞれが車への思いと憧れを持って取り組んでいる姿を見せてくれる。それはそれで素晴らしい。旧車愛だけでは車は産業として動かないし、道具としても対価してしまう。そうした車への再認識を抱かせつつ、それでも旧車へと向き合う気持があるとしたら、それはどういった部分からわき出るものなのか。そんなことを「ぜっしゃか！ー私立四ツ輪女子学院絶滅危惧車学科ー」という漫画は考えさせてくれる。読んでもし、旧車、絶版車、ノスタルジックカーといったカテゴリーに対する興味が浮かんだのなら、注意して当りを見渡し、街中にあるそうした車、草むらで錆び付いているそうした車を見つけてどこが面白いのかを感じてみよう。機会があるなら乗ってみると良い。きっと思うから。扱いつらいと。でもそれが良いのだと。

書評家 / タニグチリウイチ

## 「セリー」森泉 岳土

- 壁一面の書架がある家で、読書家の男性と女性AIが静かに終末を迎える文系SF。実在の名著が多数引用されていて、それがこの物語の輪郭を作っています。著者の膨大な読書量に裏打ちされた物語で、小説の案内本としても読める。本を燃やして暖を取ろうというAIに、本は燃やせないよという主人公が印象的でした。

主婦 / 堀江千秋

## 「ソウナンですか？」さがら梨々、岡本健太郎

- 猟師をやりつつ自分でマンガを書き進めなければ絶対に書けない大傑作「山賊ダイアリー」をものにした岡本健太郎さんが、圧倒的に現代的な女子高生を描けるさがら梨々さんに作画を託して描かれている、超・異色作品。遭難した3人の女子高生のうち1人が、これ以上無い本格的サバイバル知識、たとえば遭難時には食事よりも水分、その水分を「魚を絞ってその汁を飲む」という超絶夢のない解決方法で実現する、というこれを、めちゃくちゃキュートでリアルな絵柄で解説し、その前後にラッキースケベ、いや無人島なら必然のスケベが連発するという、もう、なんと言っていかわからないマンガ的自由さにみちみちた作品。セミを食べる女子高生を見ていると、遠くから、「こまけえことはいいんだよ！！」って誰かの叫びが聞こえてきそう。でも、読んでたらホントにサバイバルできそうなんだよね…！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

## 「その女、ジルバ」有間 しのぶ

- 感動ものの中に張られた数々の伏線。完結してしまったので今是非推したい

会社員 / 齋藤隼

- 人は常に選択肢を意識的に、あるいは無意識的に選んで生きている。ひとときわ輝く出会いを見逃さなかった、とある熟女の物語。なんだかほっこり泣けてしまう作品。

音楽家・農家 / 谷澤智文

- 40歳の、金も未来もない貧しい女性が、平均年齢70歳以上の高齢バーで新人として働きはじめる話。伝説のママ、ジルバ。なによりもまずショックだったのは、世の中には、こういう場所でしか美味しいお酒が飲めない、楽しい時間がすごせない人たちがいるってことが明らかにされてたこと。おいおいすげえ世界があったもんだなあってドタバタ劇なんだけど。登場人物の年齢が高いもんだからいつの間にか終戦直後から戦後日本の夜の世界を統括しちゃようなストーリーになだれ込んでいくのが素晴らしい。しかもそういう漫画が7年かけて5巻で完結するってもう美しいでしょう。ガツンと一気に読みすべいです。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

## 「その着せ替え人形は恋をする」福田 晋一

- 女の子が絶妙なエロさをかもし出しているけど、それが厭らしくない、むしろ可愛いのが福田先生の描く女の子だなあと感じます。全く関わらないだろうと思っていたクラスの元気な明るい友達も多そうな女子。その女子の趣味はコスプレでひょんな事から主人公がコスプレ衣装を製作するという流れで進む物語。好きなことは好きと言えるその女子に引っ張れつつ、お互いに惹かれあっている感じがとても可愛い。まだ2巻なのでこれからさらに成長する作品だと思いますが、今回おすすめさせて頂きました！

三省堂書店海老名店 / 近西良昌

- ヒロインが兔に角可愛過ぎる！最近流行りの陰キャとギャルのラブコメ的青年漫画は、大抵どちらの描写にもイラっとしてしまうのですが、この作品は『好きな事を好きと大声で言える人』と『言えない人』の判り易いキャラ付けとして陰キャとギャルを使っているだけなので、青年誌的お約束はあっても素直に読めます。相手の行動にドキドキする側が逆転した後の展開は、何度読んでもニマニマ必至です。

(株)首都圏 TSUTAYA / 井出麻悠美

## 「それはただの先輩のちんこ」阿部 洋一

- 夫のちんぽがはいらないとか言ってる場合じゃない。こっちはちんぽがとられた！天才阿部洋一のシュールコメディ。

作家 / 海猫沢めろん

## 「ゾンビバット」松林 頂

- 映像方面やその他のメディアにて近年に多く生まれたゾンビ社会を通しての登場人物のヒューマニティーや倫理観をジリジリと炙り出す作品の中でも、頭ひとつ抜けている感じがした作品。オススメです。

コミック高岡 店長 / 市川祐治

## 「ダーリンは72歳」西原 理恵子

- 西原理恵子が描く、壮年ラブコメ叙情マンガ。持ち前の無頼感を失わないまま、こんなにも人の心のきれいな部分を描けるのは、その裏側でどれだけ人や社会の闇を直視してきたのか。「ダーリン」とはメディアやCMでおなじみ、高須クリニックの高須克也院長だが、本作では心根の優しい一面も描かれる。どのような闇や煩惱を抱えていても人は清らかさを失わず、性善説と性悪説という二元論で人間を語ることがいかに浅薄なことかを痛感させられる。お相手の高須院長が毎年を重ねるので、タイトルは「70歳」、「71歳」と変わっているが、事実上第3巻という読み頃作品。

編集者/ライター (馬場企画) / 松浦達也

## 「ダルちゃん」はるな 檸檬

- 自分らしくとか、自分を幸せにしようといった甘い言葉とは裏腹に、強い覚悟と犠牲が必要で、さあどうする？といった問いを真正面から描いている。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

- 生き辛い、と感じている人に強く強くオススメしたい漫画。2巻の p78,79 は一読の価値有り。

ジュンク堂書店池袋本店 / 杉佳尚

- 量産型女子に擬態する女子を、あのような形で描いてみせるマンガ表現がおもしろかったですし、フィクションでありながら、他人ごとではなく自分ごととして読ませるグイグイ感が本当にすごかったです。

ライター／早稲田大学文化構想学部助教 / トミヤマユキコ

- 資生堂の花椿 HP で連載されたカラーまんが。24歳の派遣社員・丸山成美として、仮の姿で生きるダルダル星人の「ダルちゃん」が、人間関係を通してさまざまな壁に打ち当たり、また乗り越えようともがく様子を描いて、連載当時より大評判になったことは記憶に新しい。

菓子研究家 / 福田里香

## 「デザインズ」五十嵐 大介

- 半獣人を、描いた作品、動物の特徴や、感じる感覚を意識させられる、生物という生物は繋がっていると思ってしまう、それにも増して画力と表現力がハンパない。

tetote 代表 / カ丸真

## 「テセウスの船」東元 俊哉

- モーニングで最初に連載が始まったときは、「僕だけがいない街」もすでに流行っていたころで、タイムスリップミステリ解決ものか、と思っていたけど、どんどん展開が面白くなってきて、同時にどんどん複雑になってきて、簡単にさらりと読むよりも何度も読み返して楽しめるマンガ！！はやく犯人が知りたい！！！！

会社員 / 西尾美里

## 「テロール教授の怪しい授業」石田点、カルロ・ゼン

- 大学でサークル勧誘に交じるカルトや政治団体などに無関心な生徒に「皆さんはテロリスト予備軍です」と喝破するテロール先生の対テロリズム講座という怪しくも激しい授業風景。学生さんには必読かと。

住職・ライター / 蟬丸P

- まだ一巻のみなので評価しづらい部分はあるが、他の漫画にはないオリジナリティがあり、シリアスなテーマを扱っているのにそれをカジュアルに読ませる絵の力もある。今後への期待も込めて

会社員 / 齋藤隼

## 「となりの妖怪さん」noho

- 妖怪と人間が共存する世界観がもう素晴らしい。お互いへの敬意に優しさを感じる。

医師 / 岸本倫太郎

## 「ドリフターズ」平野 耕太

- やっときた6巻?? 1巻から読み直したけどやっぱり面白い！

ロングランプランニング株式会社 マネージャー / 小森和博

- いつ出るのかいつ出るのかと心待ちにしていたが、結局昨年はコミックスが出ずじまい。今年、ようやく第8巻が発売された。歴史上の人物を異世界にトリップさせ、キャラクターという命を吹き込み、2つの軍勢に再構成し、禍々しいまでに盛大に両軍を戦わせる。死生観まで含めた圧倒的なスケール感。デフォルメキャラに象徴される小ネタギャグも楽しいが、あくまで本作の魅力は壮大なスケールと登場人物の（本質的な）キャラクター。アニメ化もされていますし、作品自体はご存じの方も多いでしょうが、そろそろクライマックス……？ と思わせるような最新刊の読み応え。次巻への期待も込めて。

編集者／ライター（馬場企画）／松浦達也

- 新刊を待ちわびて待ちわびて、やっと会えたねの『ドリフターズ』。もはやだれが主人公なのかもよくわからなくなりながら読み進めているけど、巻を追うごとに、チャーミングさが増していく島津豊久。でも、土方歳三も捨てがたく、貴様らどういうつもりだ！ と地団駄踏みながら、次の巻を待っています。せめて、せめて年に1冊は……と、もはや祈るのみ。史実を知ってるからこそ楽しめるキャラもあれば、史実をよく知らないから、こうなったら次の巻が出るまでは史実のほうを追いかけるとかきかたえられるキャラもいて、どうにもたまらない。歴史好きの友達にプレゼンとして、同じ沼によろこそ！ したい一冊。

ライター・編集／島影真奈美

## 「とんがり帽子のアトリエ」白浜 鷗

- 絵柄の美しさにファンの方々が多いみたいです。ときにコマをはみ出す装飾も、まるで芸術作品を見るよう。ファンタジー、魔法、そして成長譚。ミステリアスな“悪役”もいい味を出しています。子どもから大人まで、誰しもうれ楽しめる作品だと思います。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書／三葛敦志

- ファンタジー世界観だけでなく、それぞれのキャラクターの成長が楽しめる作品。家族で読める。

自営業／小野ゆうこ

## 「ど根性ガエルの娘」大月悠祐子

- ど根性ガエルの作者、吉沢やすみさんの実子にしてマンガ家の大月悠祐子さんの実録告白物語。1巻のスタートから、吉沢やすみさんの破天荒にも愛らしい、でも絶対許されざる振る舞いが書かれている、ところまでのお読みになった方は多いと思うのですが。実はこの作品、紆余曲折あって、白泉社「マンガ Park」というマンガアプリに連載が移っています。マンガは、連載の途中で編集方針が変わることがありますが、変化後から、もう、ぞっとするほどの大展開。家族の話だからきれいにたたんでおくか、という無難さは一ミリもなくなり、ほとぼしるように実際にあった出来事が生々しく描かれていきます。本来メインのはずだった父親のストーリーは呼び水で、そこから大月さんと、その夫にしてマンガ家の大井昌和さんを巻き込んでの、超特大精神格闘ドキュメンタリーマンガに展開してゆくのです。月並みな言い方ですが、ホント、ここまで書きちゃっていいのでしょうか…?! 2019年現在、いま一番先が気になる生き様マンガ。

ニッポン放送アナウンサー／吉田尚記

## 「なくてもよくて絶え間なくひかる」宮崎 夏次系

- 宮崎先生の作品の終わり方、何故か泣きそうになる台詞等の余韻にいつもやられております。最近では複数の連載もされており、どれも空気感の違う為とても良い意味で裏切られながら読んでいます。突然突き放されたり、泣かされたり、心が揺さぶられる作品を読みたい方にオススメします。

バンドマン／ターシー

## 「ナラクノアドゥ」山本 晋

- コレ打ち切りなんですかね…こんなにおもしろいのに！こんなにカッコいいのに！異世界転生全盛の中、こんなに骨太なファンタジーがあったことはもっと世の中に記憶されていて欲しい。

株式会社ヴィレッジヴァンガードコーポレーション 店舗開発課／大山敏樹

## 「ならしかたなし」雪野下ろせ

- 毎回のたわいもないことから展開されるしゃな子と鹿男の掛け合いが好き。ずっと読んでいたい1冊。

ロングランプランニング株式会社 マネージャー / 小森和博

## 「ニュクスの角灯」高浜寛

- 高浜さんの描く世界が、心地よくて、好きです。蝶のみちゆきの登場人物がつながっているのが、とても嬉しいです。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

- 昨年に引き続き、一次選考での投票です。周囲に勧めまくり、自分でも1巻～5巻まで何度も読み返しました。洋服や小物など細部のディテールまで拘っているのが、読む度に新しい発見があります。5巻では、主人公の美世も花の都パリに飛び出し、世界に視野が広がっていきます。ゴッホやゴーギャンがジャポニズムに影響を受けたことは知識として知っていましたがこの漫画を読むと、フランスで実際に流行した様子が想像できて楽しいです。ジュディットの病気や戦争など次の最終巻では辛い描写も覚悟せねばとは思いますが。以前、明治時代に実在した個性的な人物たちの評伝集にハマっていた時期があるのですが、読後に似たような印象を覚えます。昔の時代に日本にもこんな人たちがいたんだということが、新鮮な驚きとともに生々しく迫ってきます。あと表紙が毎回、凝っていてそこも好きなポイントです。

会社員 / 佐々木つむぎ

## 「ハーン - 草と鉄と羊 - 」瀬下猛

- よく昔から話が出てくる「源義経」が「チングスハーン」だったというお話。大陸へ渡って生きていく義経が異常に強い。そんなに強かったら日本で生きたんじゃないかってくらい強い！もしも生きてたら…と言った物語は様々な思いがあっていいです。

デザイナー / 平沼寛史

## 「ハヴ・ア・グレイト・サンデー」オノ・ナツメ

- 日本人が忘れていた心がある。こんな生活…理想だな

あゆみ BOOKS / 土屋修一

## 「ばけむこ」枝屋初

- 男装女子となめくじの姫の異類婚姻譚。人と妖物が紡ぎ合い睦み合い、男も女の境も、開けてはいけない扉も覗いてはいけない仕事も触れてはいけない宝も言ってはいけない言葉も見てはいけない正体もない、とありとあらゆる禁忌をゆるゆるととろかしては異界の闇を垣間見せてくれる（かもしれないよ？）ということのを仄めかす幻想譚であり大変好みでありました。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

## 「ハコヅメ～交番女子の逆襲～」泰三子

- 今一番連載が楽しい漫画です。警察の方達の内情についてもそうなんですが、会話のテンポと言い回しがいちいちスピーディ過ぎて凄いです。しかも単行本発売ペースも早いので心配になりますが、正直めちゃくちゃ嬉しいです！尋常じゃないスピードで絵も上手くなっていくのは本当に凄いですね。

バンドマン / ターシー

- 警察あるある、一言で言えばそんなマンガなのですが、清く正しく美しい警察官だって人間です。きれいごとになりすぎず、露悪趣味に走りすぎない、おまわりさんたちの新たな一面が垣間見れます。今年はずはこれに投票することは決めていました。「日本一ヤバイ組織の女」「階級ロリコン」って言葉が出てくる笑えるマンガです。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

- 警察官経験者でなければ書けないリアルな警察の内面。決して暴露ものではない。とはいえ、職場根性ものでもない。おまわりさん、刑事さんたちは、実際こんなに苦労しているんだ。涙なくしては読めない過酷な勤務環境と、それに負けない警察官たちの活動。ネタが続く限り、書き続けてもらいたい傑作です。

弁護士・長島大野常松法律事務所 / 三村量一

## 「バジーノイズ」むつき 潤

- 音楽ものといえば「激しく熱い」が多いなか「穏やかに熱い」のがこの漫画。時代とともに移り変わる音楽シーンが見てとれる。心地よく読める作品だ。

あゆみ BOOKS / 土屋修一

- 読んでいて作品から聴こえてくる音楽が心地良い。過剰に表現し過ぎないことでメッセージが伝わってくる。

あゆみ BOOKS / 太田和成

- 2018年最高の見開きシーンがこの1冊の中に。SNS時代のクリエイター、エンターテインメントとの関わり方、マンガにおける音への描写。「いま」を感じずにはられない。

往来堂書店 / 三木雄太

- ちょっと新しい漫画を読んだ感覚。絵柄もお話も"今"をととても意識していて、若い、新しい空気を感じました。応援したいと思う作品。

bar 図書室店主 / 岡部愛

## 「はじめアルゴリズム」三原 和人

- 数学の才能をもつ小学生が師匠と二人で成長して行く物語。数学を通して見える世界を分かりやすく絵になることによって、新しい世界が広がる感覚がきもちいい。主人公を水先案内人として、整然として、無機質な、美しい数学の世界を探検する感覚がとても気持ちいい。新しいことを知り世界が広がるワクワク感と、学ぶことの楽しさを思い出させてくれるマンガです。

Sler システムエンジニア / 廣瀬公将

- 数学ですよ数学！私の人生の中でなかった世界が広がってます。少年の世界には数学しかなく、目に映るもの全てが全て数学の世界で輝いている。そんなワクワクする世界を垣間見れる作品です。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

## 「はじめての猫：2人編」志村 志保子

- 世の中に猫漫画はたくさんありますが、今まで何匹もの猫と暮らしてきた猫飼いのベテランの方々の方々の漫画が多く、初めて猫と暮らす時の不安や発見やドキドキする気持ちをこんなに丁寧に描いてくれた作品はあまり無かったかと思います。2年前に発売された『はじめての猫』に続くこの巻は、猫好きの恋人と、猫を通して距離が近くなる恋模様にもときめく『2人編』。心があたたまる1冊です。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

## 「はなにあらし」古鉢 るか

- 最近百合ものの人気が高まってきています。この作品も百合に括られる作品かもしれませんが。それでも恋メインより、友達以上という感じがあり、読んでいて爽やかだし、とても微笑ましい。仕草や、表情、心情が丁寧に描かれて、好きなんだという気持ちが伝わってくる作品。百合苦手という方にも是非読んで欲しい。

三省堂書店海老名店 / 近西良昌

## 「パンダ探偵社」澤江ポンプ

- どんどん動物に変化していき人間の心もなくなっていく「変身病」そんな病気になったら・・・せつなさがあったかさがおだやかに交わっている漫画です。

ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり

- 人じゃなくなることを描くからこそ際立つ、人とは何かという問い。言葉にしにくいものこそ物語で読む甲斐があるな～と感じられます。年始迷えばこの一冊から。

往来堂書店 / 三木雄太

- タイトルからは想像がつかない、とても切なさを帯びた作品。動物に変身してしまう病気が存在する世界の話、という不思議な設定ながら違和感なく世界に入れる。一巻の最初の話は特に予想の先を行く話で、泣けました。愛のある動物描写と見開きの絵の力がすごい。

bar 図書室店主 / 岡部愛

## 「バンデット」河部真道

- 1月刊行の第6巻で想定外の打ち切りになってしまった大河ドラマ「太平記」偽伝漫画版。赤松円心、楠木正成といった悪党（歴史用語）をはじめ、後醍醐天皇までもがリアルに描かれている出色の歴史ドラマ。足利家の内情も踏まえる細心な史実考察と大胆なフィクションの組合せ。せめて観応の擾乱のハチャメチャな世界まで続けて欲しかったが、あっさり途中で打ち切りとは残念至極。是非とも続編を書いて欲しい作品。

弁護士・長島大野常松法律事務所 / 三村量一

## 「ふしぎの国のバード」佐々 大河

- 明治に実在した女性冒険家が日本を旅する物語。主人公バードの熱意にまるでスポ根漫画を読むごとく思わず胸が熱くなる。彼女が見てきた昔の日本の姿に、考えさせられた。

マンガ家・マンガ編集者専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

- コメント難しいですが、自分の民族のルーツのようなものを感じる不思議な漫画です。

公務員 / 東くるみ

- いかにもコミックビームっぽい絵柄ですが、元は実在の人物をモチーフにしたお話らしいです。明治初期の日本を、イギリス人の視点で描いていくのですがこれが新鮮です。ていうか、現代の日本人が発展途上国の人たちを無意識に見下している視点と酷似していて、読んでると反省と共に国レベルの文化について真剣に考えたくくなります。そんな難しいことは置いといても純粋に面白いです。そもそも江戸の文化が残る明治初期の日本の庶民の生活って、日本には文献としてほとんど残っていないらしいです。明治政府が消しちゃったんだそうです。（ワンピースの空白の100年と同じ）でも最近になって、日本に行っていた外国人の文献が出てくるようになって、その時代の日本の風景が見えるようになったらしいです。なので、本当の歴史の勉強にもなる、かも。

バーテンダー / 村井真也

## 「ブラックナイトパレード」中村 光

- それぞれの役割が次第に明確になっていって、一つ一つのパーツが音を立てて組み合わさっていく感じが堪らない。

教師 / 持丸宏司

## 「プリンセスメゾン」池辺 葵

- 連載は、2018年に完結。単行本は2019年1月発売なのだが、どうしても今回推しておきたかった。「ひとりであること」を描き続けてきた作者が、ラストで少し違う方向に舵を切ったようにもみえて（作者自身も以前このテーマはもういいかな？というようなことをおっしゃっていたと思う）、これからもずっと追いかけていきたいと強く思う。さびしさとやさしさが白く淡い光になってページに充満している……ような独特な絵も、連載を通してどんどん洗練されていったのだなあとあらためて思った。

漫画ライター / 門倉紫麻

- 「女ひとり、生きていく」なんてこのご時世、珍しくもなるともない……はずなんだけど、「どうやって生きていくか」という問いの答えはわかるようでわからない。家を買う、それも理想の家を探すってどういうことなのか。主人公“沼ちゃん”をはじめとする、家をめぐる女性たちの物語を見ながら、自分自身の通ってきた道、これから向かう道に思いを馳せたり。容易ではないこともたくさんあるけど、でも、人生って捨てたもんじゃないとちょっと勇気をくれたりもする、温かな一冊です。

ライター・編集 / 島影真奈美

## 「ブルーロック」ノ村 優介、金城 宗幸

- こんなにも痛烈に日本代表を批判したサッカー漫画は他にないと思います。日本をW杯で優勝させるために世界のストライカーを生み出すプロジェクト。それがBLUE ROCK。将来有望なFWのみを集めて、試合やトレーニングをするというのも斬新です。エゴとエゴのぶつかり合いがめちゃくちゃ熱い、一押し漫画です。

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

## 「ベアゲルター」沙村 広明

- グロい部分だけ見ると、こういう作品はあまり万人にはお勧めできないのかとも思うんですが、アクションも良いし、ストーリーも複雑なんだけどきっちりつながっていくから読んでいてずっとドキドキします。

会社員 / 林礼春

## 「ヘテロゲニア リングスティコ ～異種族言語学入門～」瀬野 反人

- 「今いちばん声に出して読みたいマンガタイトル大賞 2019」があったら、きっとこの作品でしょう。ヘテロゲニア リングスティコ。魔物の種族ごとの言語学を調査する旅のお話、と切り口自体もユニークですが、マンガの内容も相当にユニーク。気持ちのいいアカデミックな笑いがそこかしこに添えられています。異言語同士のコミュニケーションが少しだけズレてる感じも、たいへんリアリティがあって楽しいのです。でも「ワン！」は嫌。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 異世界ファンタジーの世界を人類学的な視点で描いていて、異界を旅している感が新鮮で面白い。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

## 「ペリリュー ―楽園のゲルニカ―」武田一義、平塚 柁緒 (太平洋戦争研究会)

- 地獄をえぐり出す筆にいささかの緩みなし。心底すごい。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 太平洋戦争時、ペリリュー島での戦いをもとにした作品。日本軍の陥った「地獄」に目を覆いたくなるが、作者のほのぼのとした作風でなんとか読み進められる。戦争の悲惨さを後世に語り継ぐ必携の作品。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

## 「へんなものみっけ！」早良 朋

- 何故博物館が存在するのかを小難しく解説したものではない。特色があり過ぎなキャラが本当に好きなものを未来に繋ぐために全力を注ぐ痛快な物語である。

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部大介

- 2巻3巻と進むにつれ恐竜・鉱物・南極&極地研についてなど、ジャンルの的にも更なる広がりを見せており、ますます知的好奇心をくすぐられずにはられません。登場人物も愛すべきキャラクターばかりで、人間ドラマを絡めたエピソードには感動させられることもしばしば。早良先生は実際に博物館で仕事をされていたご経験もあるということで、作中で取り上げられる生物や、語られるトリビア的なものも一歩踏み込んだマニアックで興味津々なものが多く、読んでいて「生き物好きでいて良かったー！」と嬉しくなります。生物好き・博物館好きな方にはぜひ読んでみてほしい作品です！

会社員 / 小野塚博之

- 博物館で働く人たちの物語。このマンガに出てくる様々な専門を持つ変人たちの働く姿や、想いに触れると、子供の頃の好奇心を呼び覚まされるような気がします。自分が何かを好きだったこと、好きになるきっかけを与えてくれた人たちのことといった、自分を形作る原点のようなものが思い出されてきて、自分を見直すきっかけを与えてくれます。日々を追われて見逃している美しい世界を、改めて見直すきっかけを与えてくれるマンガです。

Sler システムエンジニア / 廣瀬公将

- 博物館は私の勝手なイメージの中では静かな空間で特別なものを観に行くと言う感じがしています。ですが、それもこの作品を読むまでのこと。すべてが覆されました！いい意味で。興味深い内容に加えて知ることのできない現場の状況を知れば知るほど博物館での展示を見る目が変わります。

丸善丸の内本店コミック担当 / 八重田幸子

## 「ボクらは魔法少年」福島 鉄平

- ヒーローが強くなれるのは、皆の声援を受けるからじゃなく、自分で自分の「カワイイ」を信じられるから！ 承認欲求で溢れかえった現代社会に、「カワイイ」による自己肯定を真正面から描いてくれる清々しさが最高です。

会社員 / 末永龍介

## 「ほしとんで」本田

- 俳句というなかなかニッチなテーマ。広げ方も潜り方も素晴らしい。個性的な登場人物が見事にハマっている。

音楽家・農家 / 谷澤智文

## 「ボンクラボンボンハウス」ねむようこ

- 結構ダメ人間がちょっとずつ頑張んなきゃいけなくなって頑張るんだけどなかなかうまく行かなくてというあまり身にならない話なのにねむようこさんの漫画はついつい毎回読んでしまっている。。何故だか魅力的。

カメラマン / 平沼久奈

## 「マイホームヒーロー」朝基まさし、山川直輝

- 成人向きだけど、マガジン系らしいしっかりしたおもしろさ。一気に読めてしまう。

スタジオフーズ 代表取締役 / 小林智之

## 「まいりました、先輩」馬瀬 あずさ

- いやもう良い歳をした親父が、若い二人のぎこちない恋の行方にハラハラドキドキ…。本当にこの二人の幸せを心から願わずにいられない。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

## 「まがいの器 古道具屋奇譚」水木 由真

- あなたの人生に今、必要なものが手に入る、不思議な古道具屋・慈空堂をめぐる物語。美しく、そして恐ろしく、読む人の心を震わせること間違いなし。人やモノに宿る魂、記憶、想いを美しい絵と繊細な言葉で丁寧にすくい上げ、気づけば自分も物語の中に入り込んでしまったような感覚になりました。この本にも作者の水木先生の想いや魂が存分に注がれていると思います。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

## 「マロニエ王国の七人の騎士」岩本ナオ

- 中世騎士ものがたりと言うテイストでファンタジー要素いっぱい作品。マロニエ王国の女将軍・バリバラには七人の息子は「いつかかっこよく我が国のお姫様を助けること!!」を胸に抱いているのだけど、大切なお姫様を巻き込んだ陰謀に巻き込まれていて…！まだ、始まったばかりなのに、伏線が散りばめられているようで何度も読み返してしまってます。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

## 「まんが アフリカ少年が日本で育った結果」星野ルネ

- 何よりもマンガとしてまず愉快で豊か。そして面白くてタメになる。作者のクリアでクレバーな洞察、省察が光るがまったく説教くさくない。さわやかな読後感。

朝日新聞記者 / 小原篤

## 「まんが少年、空を飛ぶ」山崎 祐則、稲泉 連

- これをマンガ作品の候補として挙げるのは間違いだとわかっていますが、マンガ読みとして、昨年最も心を揺り動かされた一冊でした。19歳で戦死した特攻兵が、予科練などから、家族に描き送ったまんがと手紙を収録した本。それがかなりユーモラスでうまい。手塚治虫より3つ年上ですが、生きていたら「漫画少年」あたりでデビューしたかもしれない。個人的に衝撃を受けたのは、彼が子どものころの手塚さんのように、ミッキーマウスを普通に描いていること。アメリカを撃つための訓練をしている航空兵の卵が、一方で大好きなミッキーをお守りみたいに描いているという矛盾。いや、矛盾ではないのかもしれない。まんがを描くという行為は、彼自身の安寧のためでもあり、心配する家族を安心させる手段でもあった。マンガが持つ「本質的な力」のようなものを感じました。それだけに、最後のくだりはあまりにつらい。稲泉連さんの解説は行き届いて淡々として、ことさらに悲憤に訴えていないのが本書の価値を高めています。あの時代、きっと数多くの手塚治虫がいたんだろうと思う。その声なき声が、今の戦後マンガを作ったんじゃないかとさえ思います。

読売新聞文化部編集委員 / 石田汗太

## 「ミギとダリ」佐野 菜見

- ブラック?なユーモアとサスペンスがなんともツポでした。「坂本ですが?」の佐野先生はこの作品をどんな表情で描いてるのか知りたいです。今回は更にストーリーに秘密が隠されてて今後の展開が楽しみです。

マンガ家・マンガ編集者専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

## 「メイドインアビス」つくし あきひと

- 圧倒的な破壊力。読めない展開にドキドキしながら読む手が止まらない。

教師 / 持丸宏司

## 「めしあげ!! ~ 明治陸軍糧食物語 ~」清澄 炯一、軍事法規研究会

- グルメ漫画という形をとりながら実は帝国陸軍の兵士の日常をマニアックに取り上げた作品。日露戦争をここまでキチンと描いた作品はこれまでになく、とても貴重な作品だと思う。

コミック高岡 店長 / 市川祐治

## 「メメシス」柳生 卓哉

- いい意味で、とても“サンデーらしいバカバカしさ”を突き詰めたマンガだと思います。ここまで振り切りっておきながら、話はとても丁寧にまとめられているのは、さすがのサンデー。設定そのものは至ってシンプルにパーティを取捨選択するロールプレイングゲームから着想を得ていると思うのですが、読み手からしてみれば今後RPGをするときについ頭の隅をよぎりそうな気がしてしまいます。ほんとに、合成とか気軽に出来ないかも笑。多分、キャラクターが過剰に感情的なのと、チラチラと垣間見える人間関係のヒエラルキーがリアルなのが理由かな、と。

会社員 / 佐藤優

## 「モディリアーニにお願い」相澤 いくえ

- 「東北にある、バカでも入れる小さな美大」がキャッチコピーですが、侮るなかれ。非常に美しい漫画で驚きました。手書きで描かれる線が一コマ一コマ丁寧で鮮やかで。自分の才能と将来の不安に悩みもがく一言一言が響いて。千葉くんたちが馬鹿でいじらしくて、可愛くて。若いころの将来の不安や、才能への焦りを心の芯でつながっている友達と一緒に悩んで成長していく姿がガラスのように暖かく綺麗です。キラキラしたもので心が満たされる作品です。

会社員 / 佐々木つむぎ

## 「ものするひと」オカヤ イヅミ

- 「なんて不安定なものなんだろう」そんな先の見えない道を志す男の話なのに、ページから伝わる空気、温度、匂いは安心感を与えてくれる。作中から言葉を借りると「一言で言えないのがおもしろい」のだ。言葉を愛し、遊び、紡ぐ楽しさが何だかふんわりと漂ってきて、何だか絶妙に浸っていたい心地よさなのです。

会社員 / 伊東敬祐

## 「もののがたり」オニゲンソウ

- 毎年の癖ですが、マンガ大賞には1個は少年漫画っぽいものを選びたいとどうしてもおもってしまい。今年のこのジャンルの一押しはこれでした。

スタジオフーズ 代表取締役 / 小林智之

## 「モブ子の恋」田村茜

- モブ。決して主人公にはなれないと感じる事はきっと誰しもある感情かもしれない。共感する場面が多数あるこの新しい恋物語。主人公でなくても好きな人は出来るし、好きになってくれる人はいる。この二人の恋物語を温かく見守りたいし、応援したい。そして元気になる作品。

三省堂書店海老名店 / 近西良昌

- いちいちにキュンとしてしまいます。田中さんみたいな気持ちって男でもあると思う。と思うとお互いの視点で似たようなこと考えてるからやっぱりあるんだと思います。

Migimimi sleep tight / 涼平

## 「やがて君になる」仲谷 鳩

- 構図やコマ割、心理描写の表現がとても上手い。少女達の「好き」という気持ちに共感したり考えさせられたりします。文句なしに今まで読んできた恋愛作品の中でもトップです。百合作品だからと敬遠しないで、多くの方にもっともっと知ってもらいたい作品。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤瑛

## 「ヤコとポコ」水沢悦子

- 今よりも未来、革命後といわれるインターネットが廃止された世界は、現代社会のような便利さはないけれど、ゆっくりとした暖かな時間が流れています。そんな世界で暮らす、漫画家の「ヤコ」と、てきとうモードのネコ型ロボット「ポコ」のお話。ポコが可愛らしくて笑えます。素直じゃないけどとても優しいヤコも好き。1話完結のお話が多く、毎回ハッとさせられたり、優しい気持ちになれたり、見習いたいと思ったり、大切な気持ちを思い出させてくれる。それらがゆったりと暖かく心に沁み、ポロっと涙がこぼれる。人に寄り添ってくれる漫画だと思います。マンガ大賞2018から選考委員として参加していますが、お話を頂いたとき、このマンガは絶対入れたいと思っていましたが、残念ながら新刊が出ず投票することができませんでした。今回は新刊が出てくれました！1番好きなマンガと言っても過言ではないです！

声優 / 富岡美沙子

- ポコたちロボットの健気さにホロリとなりつつ、思いの外SF & ハードボイルドな世界観に惹き込まれます。夕暮れ時のような少し切なくて温かい物語。

商品企画 / 畑中瀬路奈

## 「やさしさいっぱいの上で」アボガド6

- Twitterのイラストで知った作家さん。ロボットたちの方が「人間味」があり、大人たちはモブで悪の象徴として描かれる。悲しいとか寂しいとか、愛しいという感情はどこからくるのか。ラストの墓標だらけの光景に希望が見える。ものすごくシンプルなのにたくさんの情報がつまっている作品。この先も何回も読み返したい。

三省堂書店 / 内野智未

## 「憂鬱な朝」日高ショーコ

- 終わってしまった。あしかけ10年のBL大河マンガが。時は明治、父親の死により幼くして家を継ぐことになった主人公と、謎めいた美しき家令の恋物語。お坊ちゃまと使用人…というだけではない二人の、恋愛、親愛、時に憎悪の心の遣り取り。内臓を握りつぶされる思いで読みすすめました。当時の時代背景、衣服などの生活シーンも垣間見えて、とても読みごたえがある全八巻。BLだからって読まないのはもったいない！読んで。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

## 「ゆみとくるみ」うるひこ

- ある雨の日に拾ったぬいぐるみに「くるみ」と名付け、その日からかけがえない存在になってゆく。付喪神でなないけど、大切にしている物に魂が宿るって信じていることもあって、見守る「くるみ」の健気さが心を打ちます。表紙を外して見られるあの絵は堪らなかったです。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

- くるみちゃんが、愛しい。手芸家の店長さんが、素敵過ぎます。読み終えた後は、とても幸せな気持ちになります。良かったです。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

## 「ゆりあ先生の赤い糸」入江 喜和

- 大人のための少女漫画、というテーマにふさわしい。冒頭の少女時代のバレエのエピソードから、今後の生きづらさを約束されたかのような主人公に心をわしづかまれる。平穏だった日常を襲う衝撃の展開を、まるで嵐のなかで踏ん張るように耐えるゆりあの「やせ我慢」は気風の美学でもあり、父から受けた呪いでもあり、今後どう昇華されるのか気になる。ほかで読めない唯一無二の入江作品、今作も全力で多くの人に勧めたい。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 主人公ゆりあさんは、相思相愛のダンナさんと大の仲良し。多少つまらなくても平和で幸せな結婚生活を送ってたはずなのに、ダンナさんが突然倒れたことで、事態が急転。倒れたときに一緒にいたのはやたらイケメンの恋人だわ、「パパ」と呼ぶ子どもたちまで現れるわで、しっちゃかめっちゃか。バカにするのもたいがいにしるな状況なのになぜか、ゆりあさんは男気を発揮し、猫も杓子も面倒みちゃう。可愛げのなさにかけては右に出る者がいなさそう彼女のその健気さがグッとくる。なんだかんだいって強いし、きっと幸せになれる（なってほしい）。不器用さで悩んでる友達に贈りたい一冊です。

ライター・編集 / 島影真奈美

## 「ヨルの鍵」高村 真耶

- 鍵という魔法の能力をめぐる物語。キャラクターがとても魅力的なファンタジー。

主婦 / 紺野泉

- それぞれの属性に関わる魔法を持って生きる世界で、一人の王子がその魔法で街一つ消してしまった悲劇から物語はスタートする。絶望の中から、その忌むべき力を受け入れ、仲間と助け合いながらプラスに変えていく展開に、引き込まれます。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

## 「ラグナクリムゾン」小林大樹

---

- いわゆる“強くてニューゲーム”系で、中世ファンタジーの“メジャー”な設定の漫画です。だからこそ他作品との差別化が非常に難しいジャンルだと思うのですが、キャラクター設定と深り下げのバランスが素晴らしく、中二心をしっかり驚つかみしてくれます。ですので過去にそんな漫画やアニメに夢中になったことのある方にオススメ出来ます。またバッドエンドからの巻き戻りが話の起点になっているので、時折サスペンスの様な要素が見え隠れします。それが独特の緊張感のある空気になっていて、ファンタジーものとしては非常にユニークな漫画です。

会社員 / 佐藤優

## 「ラムスプリングの情景」吾妻 香夜

---

- 同僚にプレゼントされて読んだのだけれど、あまりの完成度にびっくりした。BLというジャンルの作品であり、一部に少し強めの性描写があるため、それゆえ読む前から手に取ることを敬遠する方がいるかもしれない。でも、そんな理由でこの作品を読み逃すのは本当にもったいない！映画のワンシーンのような始まりから、主人公たちの育ちと生活、心の動きが描かれていく中盤、そこから収束していく物語とラストは「お見事」の一言。こんなに丁寧に描いた物語が、それも一冊でまとめられているなんて。感嘆するよりほかはなかった。マンガ大賞という形にはちょっとずれているかもしれないけれど、私はこの作品を読めてよかったと心から思ったので推します。ぜひ、読んでください。

フリー / 田中香織

## 「ランウェイで笑って」猪ノ谷言葉

---

- 人とモノと意志が絡み合って形になる瞬間の溢れんばかりの熱量に、胸が熱くなります。

教師 / 持丸宏司

## 「ランド」山下 和美

---

- 新しい解釈の聖書みたいなマンガ。

PENICILLIN / HAKUEI

## 「ルーザーズ～日本初の週刊青年漫画誌の誕生～」吉本 浩二

---

- ギラギラした漫画編集部員たちが生み出す新しい青年週刊誌と、作品を認めてもらいたい漫画家。彼らの、ぎゅっと詰まった汗と涙と葛藤と挫折と希望と夢。「アクション」を創刊してくれて感謝してます。出版業界にいる身として、大切にしたいと思った作品です。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

- 漫画アクションの創刊とその時代の克明な描写が引き込まれる。今はもう、ほとんど全てない景色なんだろうけど、雑誌によってその精神は生き続けているんだと思うと、当然のことながら感動する。

医師 / 岸本倫太郎

- ユニークな作品を生み続ける漫画雑誌「アクション」。その誕生秘話を、昭和の「ニオイ」を感じる画風の吉本先生が描く意欲作。漫画好き必読。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

## 「レイリ」室井大資、岩明均

---

- 死という概念が、特別でもなんでもない当たり前のことだということを、いつ読んでも思い知らされる。だからこそ「今」をどうするのか？ということ突きつけられる作品だなあといいながらも、ただただめっちゃくちゃかっこいい殺陣シーンにしびれる。ほんとすき。応援しております。

オリオン書房アレア店 / 池本美和

- 長篠の戦いの敗戦後、崩壊していく武田家。唯一の希望は、当主である武田勝頼の息子・信勝であった。そんな信勝の影武者となったレイリ…。最新巻では高天神城も落ち、武田信勝も声変わりが始まりレイリが不要になってきたが、またまた新たな展開が期待できる。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

## 「ロード・エルメロイⅡ世の事件簿」東冬、三田誠 / TYPEMOON、坂本みねぢ TENGEN (著)

- 魔術のある世界でミステリが成立しえるのかという実験作。タイプムーン作品のコミカライズの中でも単品で読める独立性の高さと、現代魔術知識講座としても読める専門性をエンターテインメントに落とし込んだ良作。

住職・ライター / 鱗丸P

## 「ロジカとラッカセイ」紀ノ目

- 最初はほんわかファンタジーの世界かと思っていたのですが、カーナーリーのブラックさにやられました。少しずつ解き明かされる世界の謎が気になります。

商品企画 / 畑中瀬路奈

## 「ロッキンユー!!!」石川 香織

- 久しぶりに、こっちに殴りかかってくるような熱い音楽マンガに出会えました！ それもナンバガに初音ミクって……これはもう、根暗コミュ障ロックファン必読ですよ。

会社員 / 末永龍介

- エモい！35歳前後の人を狙い撃ちなアーティストや曲を多用しており、当時、この作品に登場する色々なアーティストを聴き漁っていた自分には懐かしい。若い人にも読んで欲しい。

和成

## 「ロマンス暴風域」鳥飼 茜

- その手のお店で出会った女の子に運命を感じて一途に入れ込んだあげく、彼女の知られざる衝撃の事実を知って…という第1巻から一転、放蕩の2巻が年末に刊行された（これで完結）。主人公である30代男性、非正規雇用の美術教師サトミンはじめ、ダメダメで不機嫌で現実逃避しがちな大人が多く登場する。もう若くもなく、先の見通しもたいしてない。理想の恋愛、理想の関係になど、きっと自分は近づくこともできない、と経験からすでに知っていて、自分や自分の周囲のいろいろをうっすら見切っている。そんな「気分」がまったく無縁という人は少ないだろう。そのような彼や彼女がくっついたり、離れたり。吹き溜まりのような、惰性のはてのどん詰まりのような、見方によっては絶望的とも言えるエピソードが次々に繰り出される鬱展開で、読んでいるとだんだん落ち込んでくる。モノローグはネガティブな箴言だらけ。よくぞここまで徹底して描き切ったというか……。でも、というか、それだけに、というか、読み進めるうちに開き直ってきて、少し前でも向こうかね、という気持ちにさせてくれるのだ。底のない暗さを見据えるうちに見えてくるかすかな明るさ。探しているものは身も蓋もないところにある。取り繕うのもバカらしいほどのむき出しの欲望がカタチにする「確からしい何か」を求める祈りのような気持ち。それを持ち続けることはけっこう大事なんだ、と気づかせてくれたようにも思う。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

## 「わたしと先生の幻獣診療録」火事屋

- 世界観がちゃんとあるファンタジーは良いと思う。厳しさ、切なさや優しさ、喜びの双方が入ってる物語も素敵。

文教堂書店 浜松町店 コミック担当 / 金田健太郎

## 「異世界おじさん」殆ど死んでる

- 伝わり憎いかもかもしれませんが、ながいけん先生や田丸浩史先生のジャンルに久方ぶりに舞い降りてきた新星。これから更に面白くなってくるのだろうと期待してます。

コミック高岡 店長 / 市川祐治

- ラノベ界ではテンプレ化して手垢のついた異世界モノも、その後日談となれば真っさらのオリジナル。長年異世界でソロプレイを続けてきた男が、現実世界に帰ってきたらどうなるのか。異世界から帰ってきた後の哀愁に笑いがこみ上げる。剣と魔法と SEGA と YouTube の世界。おじさんを愛さずにいられない。

弁護士・長島大野常松法律事務所 / 三村量一

## 「映画大好きポンポさん2」杉谷 庄吾【人間プラモ】

- 映画は脚本だ。それがすべてではないとしても、脚本がダメな映画がダメな映画にならない可能性はやはり低い。だからハリウッドは脚本に時間をかけるし、お金も使う。予算の半分は大げさとしても、誰もが納得できるまで脚本を練り直し、完璧に近づけようとする。もっとも、時として完璧に近づけすぎて大多数が納得できる範囲に押し込められ、ほどほどでそこそこの出来に収まってしまうこともある。尖った部分や驚きを感じさせる部分がスポイルされ、ロジックではなくパッションで押し切るような場面も削られた挙げ句に及第点ではあっても、120点や200点といった点数がつけられ、映画の歴史がそこから変わってしまうような奇跡が起こる映画にはならなくなってしまった。2018年の映画界を席卷した上田慎一郎監督による「カメラを止めるな！」が、完璧なまでの脚本によってその面白さが差さえ得られていることに誰も異論はないだろう。もっとも、そんな脚本を与えられながら脚本の難しさに撮影を投げ出していたら、役者たちが諦めていたらあれだけの熱を放つ映画にはならなかった。完成後の役者たちによる体を張った宣伝が効いたことも事実だが、そうした宣伝に応えるだけの中身があったからこそヒットした。そうした中身を支えたものが、素晴らしい脚本であり素晴らしい監督であり素晴らしいスタッフであり素晴らしいキャストであった。すべてが調和してなおかつ増殖して生まれた「カメラを止めるな！」の奇跡をきくと、映画を撮る者たちなら誰もが一生に一度は起こしたいことだろう。そのために必要なことは何か。どんなことに気をつければ良いのか。前作「映画大好きポンポさん」でただのアシスタントだったジーン・フィニという青年が、ポンポさんという敏腕プロデューサーによって監督デビューし、ずっとため込んできた映画に関する知識と情熱を総動員して映画を作り、ニャカデミー賞を獲得するまでを描いた杉谷庄吾が、続編となる「映画大好きポンポさん2」(KADOKAWA、880円)で描いたのが、まさに優れた脚本を軸としつつ映画への拘りや情熱もそこに乗せつつ、曲がらないで折れない心を図々しさと共に抱き続けることで素晴らしい映画が生まれる可能性だ。あるいは蓋然性だ。ニャカデミー賞の受賞でジーン・フィニを起用したいと申し出るプロデューサーが現れ、人気スターが登場する超人気冒険活劇の続編を撮って欲しいと言ってきた。ジーン・フィニは受けて撮影の現場に赴くが、すべてがプロフェッショナルたちの完璧な作業によってシステムティックに動き、そこに完璧な演技を見せるスターたちが乗って一切のトラブルなく撮影が進む。そこにジーン・フィニは気持ち悪さを覚える。勉強によって映画に関する知識だけは抜群なジーン・フィニはプロデューサーが望む映画を撮り終えて編集もし終える。一応は恩人のポンポさんに見てもらい、間違いなくヒットすると言ってもらえたものの面白ойと言ってもらえなかったことが気に入り、それが自分の思うところのクズ映画だったと確信してまったく違う編集を行い、試写へと送り込んで逃走し、プロデューサーもキャストもポンポさんも驚かせる。映画好きが見れば面白さがあって興味深さもあるその編集は、商品としての冒険娯楽映画からは外れていた。ポンポさんは旧知のコルベット監督とともに娯楽作品としての編集を行い直してジーン・フィニのばっくれをカバーするが、それで心を入れ直すようなジーン・フィニではなかったようで、納得がいく映画を撮るなら自分で脚本を書くべきだと思い、書いては納得がいかずニャカデミー賞を獲得した映画で脚本を手がけたポンポさんに頭を垂れて教わりどうにか1本の脚本を仕上げる。娯楽大作の編集の健で多大な迷惑をかけ、その下から飛び出しながらも戻って脚本の書き方を教わろうとし、なおかつその脚本を元に映画を撮り始めたものの納得がいく映像に近づけようとして撮影期間が伸び、結果として主演女優のミスティアが出資者に声をかけ、貯金も崩して協力しても申し訳なさそうな顔ひとつしないクズ野郎のジーン・フィニ。けれども完璧な脚本があり、そしてポンポさんですら納得の映像が非道な振る舞いへの反感を抑えて協力へと至らせる。才能にとことん傲慢で、決して妥協しないにも関わらず、映画好きが感嘆する作品を撮れるジーン・フィニを誰もが真似できる訳ではないし、真似をすれば良いというものでもない。ただ、改めて映画とは何かを考え直した時に、万人が及第点を与える映画ばかりが蔓延る世界で良いのだろうかと考えた時、

ジーン・フィニという存在が見せる突き抜けた行動と、そして「カメラを止めるな！」が巻き起こしたとてつもない広がりを出し出す必要があるだろう。映画とは何か。映画とは誰のものか。映画はどこに行くのか。「映画大好きポンポさん2」は、そんなことについて、前作「映画大好きポンポさん」と同様に考えさせてくれる漫画だ。恐ろしいのはそうやって、尖りまくった才能をより尖らせて脚本を書き、キャスティングをして撮影をしたジーン・フィニをしても容易には書けなかった脚本をあっさり書き、そしてジーン・フィニが見て感嘆する映画を名優のコレット監督とともに撮りあげてしまうポンポさんの才能だ。爆走するジーン・フィニに触発されつつ、その暴走に頭に来たと言ってポンポさんが繰り出した映画での勝負はいったいどちらの勝ちだったのか。そこを示さないところに映画というものの底知れない面白さが味わえるのも事実だけれど、それでやはり勝敗が知りたい。続きがあるならそこで語られて欲しい。

書評家 / タニグチリウイチ

## 「映像研には手を出すな！」大童澄瞳

- 相変わらず、表現手法含め、とても感心させられます。何かを創るだけでなく、それを商品としてマネタイズしていく部分にも触れられ、自分の中では3巻で一気に好感度が増した印象があります。

ミュージシャン / 杉本善徳

## 「衛府の七忍」山口 貴由

- 「シグルイ」を描き切った作者の集大成だと思っているのだが、巻を重ねる毎にテーマが深まり、作者のさらなる進化に引き込まれればなし。

医師 / 岸本倫太郎

## 「岡崎に捧ぐ」山本 さほ

- 「漫画は自伝をやってしまうともうそれ以上は面白いものが作れなくなる。」というのを昔漫画編集者に聞いたことがある。漫画家の人生はどれもこれもこれが最高に面白く、描いてしまうと全てがさらけ出されてしまう、というのだ。この『岡崎に捧ぐ』は自伝的作品でありながら、まるでフィクションのようにドラマティックで、かつ『ちびまる子ちゃん』から続く伝統的なノスタルジーの世界を今に再現している。この作品がそれに留まらないのは彼女の全盛期ともいえる学生時代から一転、なかなかうまくいかない青年期、そしてその果てにある岡崎さんを通して見えた漫画家への道のりだ。面白おかしく少しせつない山本さほワールドによるこそ。

リリカル株式会社取締役デザイナー / 北山友之

- 4巻から予感があったけど…最終巻の怒涛の展開で青春モヤモヤマンガの金字塔に！もちろんその要素はこのマンガの魅力の一部でしかないですが、爆死しながら泣かされる！

株式会社ヴィレッジヴァンガードコーポレーション 店舗開発課 / 大山敏樹

- ちょっと変わった女の子2人の実話エッセイコミック。なんだかわけもなくじいんと泣ける。この自由さ、楽しさ、切なさ、寂しさ。ふたりだけの、ふたりだけにしか理解できない幸せな世界。最後まで読むと本当にぐっときます。

主婦 / 安田奈緒美

## 「乙女怪獣キャラメリゼ」蒼木スピカ

- 超絶キュートな絵柄でありながら、主人公がメタルバンドをやっていたり、狼人間の住む監獄学園に囚われて大立ち回りをやったり、そういう素敵なギャップある作品を作り続けてきた蒼木スピカ先生の最新作です。ただキャッチーさの演出のためだけに話題にしているわけではなく、先生ご自身のメタルなど題材への愛と造詣の深さがピンピンに伝わってくる先生の新作ということで個人的にも大注目していました。今まで以上にゴリゴリの少女漫画的な展開の中心になるのは、「怪獣」。主人公のクロエちゃんは、感情が高ぶると怪獣に変身してしまう奇病に悩む女の子ですが、この怪獣の造形が容赦ない。少女漫画に怪獣、っていうとちょっとツノやらシッポやらが生えたりそんなのを想像するかもしれませんが、そこはさすがの蒼木先生、円○か○宝か、はたまた大○なのか、というくらいの超本格派な怪獣の造形を目にした瞬間、ああやっぱりこの先生すごい……とため息が漏れました。ペットの名前が「ジャンボキング」だったり、隅々まで行き渡る怪獣特撮リスペクト。すごい。しかしそれでいてお話それ自体は悩める女の子の恋と葛藤というド直球の少女マンガで、誰もが手に取れる優しいおはなしです。絵は可愛く、ネタは超個性派、お話は正統派。ぜひブレイクしてほしい先生の作品です。

アニメイト秋葉原 キャラクターグッズ担当 / 岡部真矢

## 「乙女文藝ハッカソン」山田 しいた

---

- 思考ロジックを弄られるというか、ページごとのパラダイムシフトの速度というか、作品のそのものがあまりゆっくりした次元にいない。でもこのマンガはこれが強烈な持ち味になっている。自由を感じる。

コミック高岡 店長 / 市川祐治

## 「花野井くんと恋の病」森野 萌

---

- 恋ってなんだろう？…ほたるちゃん目線で甘酸っぱい記憶をたどる感じがしてキュンとします。

主婦 / 紺野泉

- 誰かを好きになること。それを表すこと。相手に向き合うこと。それらすべてをまだ知らない女の子が、ふとしたことから向けられた好意に戸惑いながらも目を向けていく日々が、もう本当に素晴らしい。わからないことはわからないと認めながら、それでも知ることを臆さない。恋愛だけでなく、「なにを大事にするか」「相手をどうやって大切にするか」という点で、人としてあまりにもまっとうでまっすぐな主人公が、眩しくてたまらない。すごいなあと思ってしまう。このまま、眺めていたい恋の成長譚。大事に、大事に、描かれ続けてほしい。

フリー / 田中香織

## 「怪盗かまいたち」都戸利津

---

- 『嘘解きレトリック』の著者が2009年に発表したレトロ探偵譚の初単行本化（14年に別冊付録化）。プロットの質と密度の高さは折り紙付き。

ライター / 福井健太

## 「怪物事変」藍本 松

---

- 今年は紙のマンガをほとんど買わなかった。そのためかデジタルの傾向はミステリーやグロテスクや、ラノベ原作や、ナロウ系が多かった気がする。結果そういうのを読んだ。だから最後はやっぱり少年漫画っぽいものを選びたい。

スタジオフーズ 代表取締役 / 小林智之

## 「海王ダンテ」皆川 亮二、泉 福朗

---

- 今年に入ってから、話の展開と謎の伏線がどんどん盛り上がりを見せてきており、まさに王道な少年漫画だと思えます。世界観はインディージョーンズのようにオーパーツなどの遺産と知識を巡る冒険譚。70年代80年代のアクション映画のノリがとても爽快です。中世と近代が橋かかるくらいの時代設定なので理論と宗教が互いに支え合いながらもせめぎ合っている独特な空気感があります。またスピード感溢れるアクション、興味を引く謎の多いオーパーツなどなど。皆川先生を知ってる方なら間違いなくオススメな漫画です。

会社員 / 佐藤優

## 「外見至上主義」 T.Jun

- 読んでみたら意外に面白かったという好例的な作品。見た目とストーリーのギャップがすごいと思います。パナー広告に別な意味で騙されてしまいました。

コミック高岡 店長 / 市川祐治

## 「骸積みのボルテ」 まつだこうた

- ファンタジーとしても、戦記物としても、広がりの感じられる世界観が素晴らしい。情け容赦の無い物語も大好き。平成のナ○シカと呼びたい衝動に駆られます。

文教堂書店 浜松町店 コミック担当 / 金田健太郎

## 「官能先生」 吉田基已

- 四十歳の小説家が若き女性に心奪われ、初恋のようにしどろもどろとして恋焦がれていくのが微笑ましい。暖かなタッチの絵がとても心地よく、文学作品を読んでいるような気持ちになります。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤瑛

- 舞台は路面電車が街なかを走るたぶん昭和 30 年代の東京。出版社に勤める 40 代の兼業作家と、彼が行きつけの喫茶店で働く 22 歳のウェイトレスの、じれったい恋模様をたっぷりの心情描写をまじえて描く。主人公の六朗は女性の内面を書くのが得意な純文学作家で、ポルノ小説の執筆依頼を受けるどうかで悩んでいるという設定。そういう小説を書いているだけに、相手の気持ちの変化をじっくり観察し、感じ、想像し、時にふらちな妄想をする。その対象となるヒロイン・雪乃とは、祭りの夜にあるきっかけで知り合う。時代背景もあって互いになかなか好意を伝えられない中、ひとりの女の子がじんわり、上気しながら、時には嫉妬に身もだえるように異性への恋心を募らせていく過程はドキドキもの。お子様には分からない大人のマンガだ。絵がとてもいい。スクリーントーンをあまり使わないタッチは古い映画のような空気が感じられ、猫目（重ねられているイメージはキツネだけど）の雪乃のくるくる変わる表情からは、まさにマンガを読む「官能」が味わえる。後れ毛の艶やかな襟足、ふっくらとした耳たぶ、伏せた長い睫毛、潤んだ瞳、珈琲カップを置く指先、ストッキングのかかと、ピンヒールまで、男性の視点を映したフェティッシュな（でも品の良い）描写はコマを追う楽しみになる。ゆったりめのスーツ、和装、下駄、商店街、黒電話、原稿用紙に万年筆、煙草といった昭和の文物の書き込みもしみじみと良い雰囲気。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

## 「幾日」 幾花にいろ

- コンビニ売り成人誌でまだこれだけ個性を出せる余地があったかと素直に感心しました。

マンガ研究・ライター / 会田洋

## 「起きてください、草壁さん」 秋★枝

- 惰眠 & お布団大好き草壁さんが、彼氏さんとお出かけ出来るのはいつの日か。お布団の魔力って偉大ですねー。

めがねっ娘教団大司教 / 田中海渡

## 「金のひつじ」 尾崎 かおり

- 尾崎かおり先生は『神様がうそをつく。』が秀逸でしたが、本作もそれに負けないくらいの名作になりそうです。4 人の男女の青春はヒビが入ってしまったけれど、それがどう再生していくのかこれからとても楽しみです。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤瑛

- 始まりの数ページで話にグッと引き込まれた。変わるものと変わらないもの。変わって欲しくないものと変わってしまうもの。誰もか人生において何かしら感じるところがあるように思うその部分に焦点を当てたこの作品は、扱うテーマこそ暗い雰囲気が漂う。しかし希望や救いを求めて進むキャラクターの今後に強い期待を持たざるを得ない。

ジュンク堂書店池袋本店 / 杉佳尚

## 「銀河の死なない子供たちへ」施川 ユウキ

- ついに長編の才能を開花させた！異才の渾身の作品。

作家 / 海猫沢めろん

- お転婆な姉のπ、内省的な弟のマッキ、彼らは死なない命を持って余しつつ永遠の生活を送っていた。ずーっと繰り返されると思われていたそんな日々、あるとき大きな転機が訪れる…。手塚治虫の『火の鳥』へのオマージュも感じさせつつ、命とは何か、生きるとは何かを考えさせる、短いながらも満足感が残る物語でした。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

- 叙情。そしてSFだった。やっぱり施川ユウキの叙情はすげえよなあ。いや、この漫画だけではないんだが。この『銀河の死なない子供たちへ』では、その善性をもっとも美しいかたちであらわれているんじゃないかな〜と思う。銀河で、死なない、子供たち。それとつまり永遠ってことだ。もちろんそんなものにさらされるとただの人間は「あ〜」ぐらいしか思えない。その「あ〜」の滑稽さとか哀しさとかなんともならなさとかをわりとごろっとそのまんま、施川ユウキの漫画は描いているような気がする。あ〜。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

## 「銀平飯科帳」河合 単

- マンガとは人間の営みに、何かのデフォルメが加えられるもの。それは人の暮らしのもっとも身近なところにある「食」マンガも同じ。だが本作に描かれている「江戸時代の食」は（専門家の時代考証も経た上で）限りなく史実に近づけながら、マンガという物語の文脈に乗せている。ファンタジーを膨らませるのもマンガにとっての役割だが、「異説」が重宝されがちな近代マンガにおいて、ひもといた史実を尊重しながら物語を組み立てるのは立派な偉業。読めば「江戸の食」を知ることができる、ある意味「大人の学習マンガ」。食というエンターテインメントに興味のあるすべての人へ。

編集者／ライター（馬場企画） / 松浦達也

## 「空挺ドラゴンズ」桑原 太矩

- 昨年のマンガ大賞では「龍を食べちゃうマンガだと思っていたけど、その龍とともに自然を描くスケール感に、私はこのマンガの魅力を見誤ってた」という大意のコメントを書かせていただいたのですが、私、また盛大に見誤ってました。龍という生物の生態や自然に加えて、街のルールや民族的文化、業種内での慣習・・・このマンガ、完全に世界を描いています。まだまだ語られていない人間関係やドラマ、龍たちの謎まで、まだまだ何度も見誤らせてくれるだろう、楽しみすぎるマンガです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- こんなに全ての登場人物を愛せるマンガは、やっぱり全ての人に愛してもらいたいです。

オフィスオーガスタ / 樋口健

- 龍を獲って食べる、売る、生活の糧にする、人の描写が面白いです、キャラクターの際立たせ方も嫌じゃない漫画では、龍肉ですが、実際にも作れそうで、美味しそうです。

tetote 代表 / 力丸真

## 「君を死なせないための物語（ストーリー）」吟鳥子、中澤泉汰

■ 何かの理由あって住めなくなった地球を脱した人類が、コクーンと呼ばれる宇宙に浮かぶ巨大な都市に暮らすようになった未来。そんな人類からネオテニイと呼ばれる新人類たちが生まれて来るようになった。宇宙に適応したためか寿命が極端に長く、中には数百年を生きるものもいる。成長も人類に比べてゆっくりしていて、20歳くらいになっても見かけは子供のまま。それでいて早熟なのか頭も良くて、早いうちからいろいろと発明や発見をしてコクーンの科学や経済の発展にも貢献している。ネオテニイは貴重な種族としてコクーンの中で優遇され、普通の人類たちから強い関心を寄せられている。そんなネオテニイの4人が主要なキャラクターとして登場し、だんだんと成長していく姿を追いかけるように描いているのが、吟鳥子によるマンガで、中澤泉汰が作画協力をしている『君を死なせないための物語（ストーリー）』（秋田書店）。第4巻までシリーズを重ねる中でどんどんと、人類という存在が未来において、宇宙時代にどう生きているのかを想像させるSFとしての色濃さを増し、読み手の関心を引きつける。第一パートナーとして、ある種の幼なじみとして育った男子のアラタとシーザーとルイ、そして女子のターラが長じて、キス程度のちょっとした性的接触も許されるだろう第二パートナーになり、それぞれに科学者であり軍人であり芸術家であり医学者といった立場になって、コクーンのためにその叡智を勝つようし始めている。そこから先、生殖をして子孫を残すための第三パートナーになるかどうか、といった段階でアラタとターラは足踏みし、ルイはシーザーからの第三パートナー契約の申し入れを断ってしまう。4人の中に漂っているのが、ダフネー症という16歳までしか生きられない病気に罹った少女の思い出であり、そして、同じダフネー症に罹っているジジという少女の存在。純粋無垢なジジはアラタに懐き、シーザーにも好かれ神経質で口の悪いルイからは仕事をもらったりもする。過去、ルイにはダフネー症の少女とパートナーになろうとして死なれた過去があって、それがずっと残ってシーザーとの関係を頑ななものにしていた。アラタは宇宙にあって資源の限られたコクーンで、間引きのように命を奪われるリストインの対象にされやすいダフネー症のジジが気になって、ターラと向き合えない。そんな状況にあって、コクーン社会を支配する科学者たちの組織、天上人（テクノクラート）たちが動き始める。ネオテニイの始祖で天上人の長を務めるソウイチロウを曾祖父に持っていて、類い希なる才能の持ち主でもあるアラタを天上人に引き入れようと画策してつきまとう。アラタの知り合いで、宇宙船を駆って輸送を行っているリュカという男が、普段の仕事の中で気付いてしまったある事実は、天上人たちにとって禁断の知識だった。そのことに気付いていながらリュカを止められず、悲劇へと向かわせてしまったことでアラタはジジを治療し、ダフネー症を完治させるため研究から道を外れ、「君をしなせない」ための決断をする。地球に人類が住めなくなって、限りある資源を活用しながら宇宙で暮らしている状況で、どういった階層が形作られているのかを描いたSF的な想像力に溢れたマンガ。人類を絶対的な高みから管理する存在があって、その思惑によって不要な命が間引かれ、断たれていくというディストピアめいた雰囲気もあって、そうした世界で生きている人はいったいどういった心理になるのかを考えさせられる。無能には生きている資格はないのか。従順こそが美德か。能力がある者だけがすべてを知り、それ意外の者には世界の根幹に迫る知識を与える必要はないのか。管理され抑圧され、それを自然なことだと受け止めている社会に生まれたほころびが、これからコクーンを、人類をどう変えていくかに興味が向かう。どうして人類は遠くに行ってはいけないのかも。そもそも人類は今、どこにいるのか。浮かぶ疑問に答えが示される続きが今は待ち遠しい。振り返れば、少女マンガには萩尾望都の『スター・レッド』や『銀の三角』があり、竹宮恵子の『地球へ…』や『アンドロメダ・ストーリーズ』があり、山田ミネコの『最終戦争』シリーズがあり水樹和佳子の『樹魔・伝説』があつたと、宇宙時代の人類の未来などが壮大なスケールで描かれたSF作品が幾つもあった。そうした作品に触れた年配の者たちが懐かしさを感じながら、今日的な問題についてSF的想像力の中で考える機会をもらえる作品。そして、そうした作品を知らない者たちも、同様に宇宙時代、地球から人類が脱出せざるを得なくなった時代に何が起こるのかを考えたい作品として読まれて欲しい。

書評家 / タニグチリウイチ

■ 汚染された地球を離れた宇宙コロニー社会、綺麗に管理されたディストピア感を描きながら、特別な遺伝子を持つ主人公達が苦悩し葛藤する姿をリアルに描き出しており、久々に力の入った本格SF作品ではないかと。

住職・ライター / 蟬丸P

## 「血の轍」押見修造

---

- 静子ママの「顔芸」を見たいがために、ページを捲る手が止まらない……。このジワジワくる恐怖は、押見先生の丁寧な筆致と、そこから生まれる粘度のある日常の描写があってこそ。静子ママは、そのサイコっぷりに震えさせられつつ「自分も一歩ズレればこうなるかもしれない」というシンパシーをどこかに感じてしまう。その点で西洋的な「モンスター」というよりは、六条の御息所や四谷怪談のお岩さんに通じる、共感要素のある日本の「怨霊」的キャラクターかもしれない。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 母親の描写がすごい。共感一切できないけれどやってることは少し理解できる。こんな人も本当にいるんじゃないでしょうか。

Migimimi sleep tight / 涼平

## 「月曜日の友達」阿部 共実

---

- 子供の世界は不思議だ。未知の世界への妄想と現在進行形の現実との境目が曖昧で、突拍子もないことが起こったりする。それでも彼らはいつか、何かを失う代りに何かを得て、「大人」になるだろう。そのセンチメントを見事に描き出した傑作だと思う。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 今までの著者の作品の中で一番素直な青春を感じます。相変わらず変な人たくさん出てくるけど、なぜか体験したことないのに青春を感じる素敵な作品です。

Migimimi sleep tight / 涼平

## 「元カレが腐男子になっておりました。」麦芋

---

- 設定はやや突飛だが、すれ違いや心情を丁寧に描いている。なかなか結ばれない二人の関係が良い。

あゆみ BOOKS / 太田和成

## 「元女神のブログ」本間実

---

- ファンタジー設定と現代社会の折り合いが絶妙。

マンガ研究・ライター / 会田洋

## 「古本屋台」Q.B.B.、久住 昌之、久住 卓也

---

- 現実にこんな屋台あればいいのになあただ屋台を動かせる人がいなきゃ無理だな。

あゆみ BOOKS / 土屋修一

## 「五等分の花嫁」春場ねぎ

---

- 家庭教師の相手は同学年の五つ子姉妹……！ヒロイン 5 人全員がとても魅力的で、とにかく可愛い。誰が読んでも好きなヒロインが見つかると思います。最終的に 5 人の中の誰かと結婚をすることになるのですがそれが誰になるのか、恋のバトルも見逃せないです。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤瑛

- 圧倒的な画力と繊細なタッチが美しい作品。絵と心理描写による 5 人のヒロインの描き分けが恐ろしいほどに上手です。そのお陰で各キャラクターがとても生き生きとしています。全然興味が無かった女の子が突然気になったり、自分の推したい女の子の良さを再発見できたりと、女性の魅力がふんだんに感じられる作品です。

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

## 「御手洗家、炎上する」藤沢もやし

- 母親の火の不始末で両親が離婚し、家を出ることになった杏子。実は元の家には、後妻として母親の親友でもあった女性が連れ子と共に入り込み…。その家事の真相を探るため、家事代行として元の家に入り込む。作家は期待の新鋭とのことだけど、タイトルにあるように、ストーリーの中心である、火事と家事と、SNS という炎上に繋がる部分が上手く絡み合っていて、よくできている。話の展開はとてもテンポよく、それぞれのキャラクターが、平行軸で関係しあう様子は、伏線がどこに影響していくのか、このキャラの行動がさらに新たな火種を生み出すのかと、次の展開を想像しながら、読み進めることができ、1巻を試し読みしたら、どんどん続きが読みたくなくて即最新刊まで買い揃えてしまった。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

## 「左ききのエレン」nifuni、かっぴー

- 出てくるみんながいっぱいいっぱい頑張っていてこれ20代の頃読んだら苦しかったかもなあ。でも今はみんな頑張ってお母さんの気持ちで読んじゃってる。登場人物たちが今はいっぱいすり減って必死に生きてて、この先のキラリとした未来をこの先読んでみたい。

カメラマン / 平沼久奈

- それなりに評価はされてきていると思うけど、もっとバズるぐらいでもいいはず！最近いよいよジャンプマンガらしさが全開で間違いなく化け始めてる。原作からの膨らませ方も愛と納得しかない。

株式会社ヴィレッジヴァンガードコーポレーション 店舗開発課 / 大山敏樹

- 厳しい要求、短い納期の中で、目の前の仕事に真摯に向き合っていて、歯をくいしばってアウトプットを出し続ける主人公。人生を削って仕事に食らいついてゆく姿はブラックと言われるかも知れませんが、要領よく効率よくがもてはやされる風潮の中であって、ひたむきに頑張った先に見える大切なものがあることをおしえてくれます。働く人なら心に刺さる言葉がたくさんちりばめられていて、仕事に限らず、困難に立ち向かう勇気を与えてくれるマンガです。想いを持って働くすべての人にお勧めのマンガです。天才になれなかった全ての人へ。

Sler システムエンジニア / 廣瀬公将

- 現代のデザイナーとアーティストを題材にした漫画です。テーマが「vs 天才」なのでリアリティとフィクションがあちこちに混在していて、その混ぜこぜのコントラストが物語を前に進めてくれる、とても特徴的な漫画だと思います。もしかしたら同業者はアレルギーを起こすかもしれませんが、そのギャップこそが正しく「vs 天才」のテーマを表現しているのだと思います。本当にこんな事があるかは置いて、仕事にちょっと迷った時にでも読むと、少し昔のことを思い出して恥ずかしいような元気になるような、そんな漫画です。

会社員 / 佐藤優

## 「傘寿まり子」おざわゆき

- スタート時は「80歳のおばあちゃんが出奔」という設定の新新さで注目されたが、それだけでここまでの長期連載は続かない。連載ならではの引きのあるドラマが読者を惹きつけて離さないのだ。とくに「シャッター商店街」編では、寂れた商店街の内実がリアルに活写されていた。それは作者のもう一つの得意分野の「築地食べ歩きネタ」で、たくさんの個人経営の飲食店の人たちと公私を超えた付き合いをしてきた経験が生きているのだろう。主人公・まり子の活躍にまだまだ目が離せない。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 「創作の苦しみと喜び」から今度は「シャッター街の鉛色の絶望」へ。老いたものたちが老いたくを突っ走るジェットコースターはどこへ向かうのか？ まり子は三浦雄一郎さんに負けない冒険家だ！

朝日新聞記者 / 小原篤

## 「仕掛暮らし」山田芳裕、池波正太郎

- 池波正太郎の世界が山田芳裕ワールドに見事染められてます。実際に読んで感じたい作品です。

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部大介

## 「私のおっとり旦那」木崎アオコ

- 旦那さんのセリフの言い回しが、癒されます。思わずうなるほど。木崎さん、素敵な旦那さまに会えて、本当に良かった…！と、心から思う作品。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

## 「私の少年」高野ひと深

- マンガ大賞でノミネートされて読んでからずっと追いかけています。子供だと思っていた真修くんがどんどん成長しちゃっていろいろ隠しきれなくなってきたのが辛い。序盤からこの話は着地点がどこになるのか心配だったのですが、いよいよ心配。しかし、このはらはらして胸が苦しくなるくらいリアルなところが魅力です。続きを待っています。

主婦 / 堀江千秋

## 「事情を知らない転校生がグイグイくる。」川村拓

- 「無知で、素直は、最強だ。」本作一巻の背表紙に書かれた言葉だが、そんなヒーローが現れてヒロインを救うお話し。取り扱うテーマが非常に日常的であるだけに、読んでいて、あの頃の自分が救われていくのを感じ、涙が出た。

医師 / 岸本倫太郎

- とある小学校に転校してきた高田君が、死神と言われてイジメられている女の子の西村さんに素敵だよ！とグイグイ来るだけのマンガです。その高田君のアホっぽいながらも真っ直ぐな発言と、そこにイジメられて心を閉ざしていた西村さんがドキドキしてしまう状況が大変面白い作品です。

会社員 / 三浦佑樹

## 「七つ屋志のぶの宝石匣」二ノ宮知子

- 久二ノ宮知子先生の のだめカンタービレ以来の熱い作品になってます笑主人公の志のぶちゃんの宝石の持つオーラを見る力で様々な事件を解決！？とか言うと、なんとなくオカルティックな感じがするけど話はそうじゃないところが二ノ宮知子っぽくて良いです。でも、話の展開の進みが遅くて多少イライラします。

専業主婦 / 柴佳衣

## 「実録 泣くまでボコられてはじめて恋に落ちました。」ペス山ポピー

- これは奇跡のような恋の話。ラブホで2時間殴られ、こみ上げるゲロを飲みながら好きって気持ち股間から溢れ出す……そんなシーンが涙でまともに読めません。性的マイノリティという枠を超えて、「生きにくい」「誰にも理解されない」という普遍的な苦しみに正面から向き合った傑作。コミックエッセイってここまで到達できるものなのかと震えました。

会社員 / 末永龍介

- 殴られてエクスタシーを感じる。マジョリティには理解されがたいマイノリティーの性癖エッセイかと思いきや、普遍的な人と人の出会いの話であり、奇跡のような愛を見せられる展開に震えた。身を削られるようなラストだったけれど、人生捨てたもんじゃないと信じたくなるような読後感。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

## 「酒と恋には酔って然るべき」はるこ、江口まゆみ

- お酒に目がない主人公・松子が年下男子に翻弄される姿が面白い。一筋縄ではいかない恋愛と酒欲に右往左往主人公の性格が魅力。会話のテンポやシニカルなジョークも面白い。

あゆみ BOOKS / 太田和成

## 「呪術廻戦」芥見下々

- ジャンプ作品（プラスも含めて）、2018年当たり年だったのでは？と思ってるんですけど、その中の筆頭的作品。バクマン風と言うなら、王道でもあり邪道でもあり、読む人によっていろんな楽しみ方ができるのがすばらしいです。連載前の短期連載（0巻収録分）がめちゃくちゃ好きです。

オリオン書房アレア店 / 池本美和

- バトルものの熱さと、ジャンプ漫画っぽくないダークファンタジーが見事に調和している。また登場人物の見せ方や、登場人物間の会話の端々に作者のセンスを感じる

会社員 / 齋藤隼

## 「終末のワルキューレ」アジチカ、梅村真也、フクイタクミ

- 神 vs 人類のバトルモノ。ありきたりな設定なのに、なぜか引き込まれる。個性的なキャラクターも多く、史実を織り交ぜながら話が進むので、歴史好き、神話好きにも読んでもらいたい。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

## 「終末の惑星」大家

- 少し不思議で、少しシニカルな物語群にグッと引き込まれました。どのお話も”その後”が気になる～。ショート・ショートが好きなので一票。

商品企画 / 畑中瀬路奈

## 「渋谷金魚」蒼伊宏海

- すごく気持ち悪いんだ金魚がリアルで。リアルな渋谷でリアルな金魚が人々を襲う、しかもしゃべるでかい金魚ってのがこんなに恐怖な存在だったとは思ってなかった…とにかく人々が食べられます！その原因となった事に少しファンタジー感を感じるのもよいです。

デザイナー / 平沼寛史

## 「銃座のウルナ」伊図透

- 戦争での女狙撃手の人生を描いた作品、怒りや、愛や、葛藤を上手に描いていると思います。主人公が戦争によって人生を翻弄される行末が気になります。

tetote 代表 / カ丸真

- この方の描く単館系シネマみたいなひねくれた空気が昔から好きなのですが、今回は話もキャッチー、長尺な雰囲気づくりが功を奏した驚きもあり、独特の絵づくりも健在。ナウシカの原作漫画が好きの人とかには特に勧めたい。どこに着地して終わるのか今から楽しみです。

WEB デザイナー / 河本智芳

## 「昭和天皇物語」能條純一、半藤一利、永福一成、志波秀宇

- 表現媒体としてマンガはやはり素晴らしいと思わされます。

株式会社 TORICO 代表 / 安藤拓郎

■ 登場人物の心の機微が精緻に描かれる傑作。最後まで目が離せそうにない。

めがねっ娘教団大司教 / 田中海渡

## 「信長を殺した男～本能寺の変 431 年目の真実～」藤堂裕、明智憲三郎

■ これは本物だ…! 今までの逆賊的な扱いの印象が強い明智光秀。実際に信長を撃ったのには、理由があった!? そして逆賊明智光秀を作り出した人物が居た!? 読み応え十二分な歴史コミックス、そしてその内容の濃さにも一切負けない藤堂先生のイラストの美麗さにも目を見張ります。歴史もの好きであれば絶対にお薦めしたい一冊です。真実はどこにあるのか!?

株式会社 TORICO コミック事業部 / 日吉雄

## 「新九郎、奔る!」ゆうきまさみ

■ 「中世は節操がなさ過ぎて書くのがつらい」って趣旨のことを残した小説家でしたが、個人的には好きか嫌いかは別として中世は興味深い時代です。その時代の幕引きをして、戦国時代の扉を開けることになる伊勢新九郎。司馬遼太郎の『箱根の坂』が書かれたときからは研究も進んでいるでしょうから、どんな新しい北条早雲像が出来るのか楽しみです。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

■ 下克上、という言葉から浮かぶ戦国武将を挙げるとしたら、やはり長井新九郎則秀こと斎藤道三であり、伊勢新九郎こと北条早雲が双壁として並び立ちそうだ。斎藤道三は通説では油売りとして各地を渡り歩く中で武家に取り入り家臣となり、その家をのっとっては守護大名の土岐家を追い出し、美濃国を手中に収めた。北条早雲も通説として一介の素浪人から成り上がり、小田原城を奪って5代に及ぶ後北条家の礎となった。名の無い風来坊でも才覚があれば、一国一城の主にも成り上げられる下克上ドリームの体現者として、斎藤道三や北条早雲は読み物の中で語られ持ち上げられては信奉を集めた。誰であっても頑張れば何者にもなれるという夢の容れ物として、時代を超えて憧れを集めてきた。逆に言うならそうした憧れを喚起するために、斎藤道三や北条早雲は油売りや素浪人からの成り上がりでなくてはならなかった。けれども昨今、歴史の研究が進んで、斎藤道三も北条早雲も講談のような物語の上に綴られた下克上のヒーローではなかったのではないかといった意見が出ている。虚飾が剥がれ落ちて魅力が下がり、憧れの対象にはならなくなる……かというそれは逆。研究が進めば進むほど、その人となりへの興味が高まり、具体的にどうやって史実として厳然としてそびえる一国一城の主となり得たのかを知りたくなる。空想上のヒーローが、超常的な力で敵をあっさり倒す物語にも人は憧れるけれど、現実の成功者が、緻密な計画と剛胆な行動で成功をつかみ取る物語にも人は大いにそそられるのだ。その意味で、ゆうきまさみが伊勢新九郎の方、つまりは後に「北条早雲」と呼ばれる男を子供の頃から追いかけて描いた「新九郎、奔る! 1」(小学館、630円)にも、史実に沿って描かれる、地続きのヒーロー像を見て楽しむことができるだろう。とはいえ、そこは漫画でありなおかつゆうきまさみ作品だけあって、リアルでシリアスな枷にとらわれ教科書でも読んでいるような気にさせられることはない。基本としての史実を抑えて登場人物たちを配置しつつ、ところどころにメタ的な視点であり、コミカルな性格を添えて室町という時代に生きた人々への親しみを惹起する。例えば主人公とも言える伊勢千代丸。後に新九郎と呼ばれるようになり、そして北条早雲となる少年が京都の屋敷で姉にいじられ、伯父で京都伊勢家当主にして室町幕府政所執事を務める伊勢貞親にからかわれながらも、伯父や父たちが幕府の中で権力争いを繰り広げ、時に戦の覚悟を固めつつ一族の繁栄のために奔走する姿をその目に見せて、武士の世界で生きていく大変さを感じさせる。そんな新九郎を通して、読者も武士の家に生まれたものが、係累を気にし、軍事や政治に気を遣って生きていくことが、あの時代には必要だったことを知る。そして同時に、一介の素浪人どころか伊勢新九郎は、室町幕府でも権力者だった政所執事の伊勢貞親を伯父に持つ家に生まれ、姉は後に今川家に嫁いで北川殿と呼ばれ、孫に今川義元を持つに至った家系だったことも知る。ポッと出が一気に栄達した訳ではなかったのだ。伊勢貞親にしても、その娘婿で新九郎や北川殿父親にあたる伊勢備前守盛定にしても、幕府にあって將軍を支えようとして奔走する。敵対する勢力を謀反の疑いがあると断言して排除しようとしてひっくり返されるけれど、そこで切腹して散ろうとはせず、一族を守るために京都を出奔して隠棲する。華々しさとは無縁で潔くもない政治と軍事のリアルが、漫画ならでは人間味を帯びた絵で描かれ、その人たちへの関心を誘う。後に応仁の乱で伊勢氏が参加した東軍にとっては敵となる西軍の指揮官、山名宗全も表情豊かな入道として登場しては、こちらは東軍の指

揮官として山名宗全とぶつかる細川勝元の嫁で、山名宗全にとっては養女のところを訪ね、そこにいた新九郎と出会って剛胆な雰囲気振りまく。それが史実かは不明ながらも同時代、同じ場所にいたのならあったかもしれないエピソードを通して、山名宗全という希代の武将への関心を高める。細川勝元といい山名宗全といい、歴史の上にその名を残し、応仁の乱という戦国時代へと連なる一大事件を引き起こす人物たちであっても、織田信長であるとか武田信玄上杉謙信毛利元就豊臣秀吉といった戦国武将に比べて印象として遠く、興味を抱きづらい。それが応仁の乱という事象への興味を減殺している節がある。「新九郎、奔る！」はそうした物語として好まれにくい歴史の事象を漫画で描き、関係者たちをキャラクターとして描いてグッと引き寄せる。第2巻ではいっそう深く、そして激しい応仁の乱の描写がありそうで、そこでは大勢が死んでいく姿も描かれそう。平安時代の羅生門に鬼が出て人を襲っていたようなおどろおどろしさを持っているのだろうか、戦死者が山と積まれて死臭と血の臭いが漂うような陰惨さに彩られているのだろうかといった興味も浮かぶうけれど、そこはリアルでシリアスであっても明るくて楽しい描写を混ぜ込み、目を背けさせないゆうきまさみのこと。気楽に触れて知らず応仁の乱について深く知ることができるだろうと思いたい。それですら伊勢新九郎の、そして北条早雲の物語はまだ端緒についたばかり。第1巻の冒頭、39歳となった室町殿奉公衆の伊勢新九郎が、足利茶々丸を討って歴史に名を馳せ、そして小田原の地に居城を定めて100年に及ぶ後北条五代の祖となるまでには相当な時間がある。その間、知られていないことも多くあるだろう伊勢新九郎の物語を、どういった史料から類推して描きつつ、どういった破天荒さを漫画として乗せて楽しませてくれるのか。連載の行方を見極めたい。

書評家 / タニグチリウイチ

## 「壬生義士伝」ながやす巧、浅田次郎

- ながやす巧氏が、デビュー時から一度もアシスタントを使っただけで、つい最近。つまり背景や効果まで全部一人で描いている。週刊少年マガジン連載の「愛と誠」もそうだったとは、あぜんとするしかない。さらなる驚きは、年齢70で毎日ペンを握る、バリバリの現役であること。しかも、絵がさらに巧くなって！カメラワークも演出も緊密で揺るぎない。もう10年以上コツコツ描き続けている本作、何と版元が2回変わり、昨年8巻目が出た。平成が終わる前に、こういう作品はもっと知られてほしい、読まれてほしいと思います。

読売新聞文化部編集委員 / 石田汗太

## 「図書館の大魔術師」泉光

- すばらしい画力で世界に引き込まれていく漫画。世界観もしっかりできていて読んでいてとっても楽しい！本好きにはたまらない漫画です。

ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり

- 本が大好きな少年が不遇な幼年期を乗り越え司書になるために頑張る、というお話ですが、「本」のもつ力、特に情報（物語とか、込められた思いとか）を伝えることの尊さ、また、本に込められた情報は誰にでも等しく公平であるべきである、という願いのようなものが随所に感じられる、愛のあるお話です。主人公のシオくんは周りや違う外見から差別を受け辛い生活を送るなか、とある司書との出会いから「物語の主人公はいつだって周りや違う者たちである、物語の主人公に救済を求めるのではなく、自分が主人公になれ」という啓示を受け、自らの人生を始めます。物語から勇気をもろう、という経験はおよそマンガ好き諸兄諸姉にとっては誰にでも少なからずあることかと思いますが、極限の状態から一歩を踏み出すという途方もない勇気を振り絞るシオくんの姿はきっと胸を打つはず。シオくんと同じく、どこかでかつて外れものだった人たちには特に刺さるお話です。

アニメイト秋葉原キャラクターグッズ担当 / 岡部真矢

## 「水上悟志短編集「放浪世界」」水上悟志

- 短編集ですがおすすめです。一つ一つの短編が巧くまとまっており、読んでいて唸らせる作品。中でも「虚無をゆく」は絶品。こんなに考えられた世界観を幅広く拡げることができたと思いますが、短編集ならではの短さにすっきり収めているのは水上先生の素晴らしい才能だと思います。（生意気なこと言ってますみません）その才能ふんだんに著されているこの作品は見事です。

三省堂書店海老名店 / 近西良昌

- 最近、映画などを見ると「時間が短いから、オリジナル作品だとサブプロットが詰められていなく感じる。いっそキャラ数やら何やらをもっと絞ればいいのに、そうもいかないことが多いのだろうか…」とブスブス考えることが多かったのですが、潔くまとめられた短編が多く、ものすごく勉強になり、かつスッキリした気持ちになりました。

ミュージシャン / 杉本善徳

## 「世界は寒い」高野雀

- 女子高生グループが、拳銃を手に入れたら…？それぞれが持つ闇や悩みが大小関わらず出てくる続きが気になる！

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

## 「制服ぬすまれた」衿沢世衣子

- 5編からなる短編集。全話とも話の切り口が本当に面白くて感心させられます。軽いタッチの絵柄や登場人物の多くが一見飄々とした感じで描かれているのも手伝って、全く思いもよらぬ展開が来た時の驚きが大きくて読んでいて楽しい！少し怖い話や物騒な話が混じっているのも良いアクセントになっていて最後まで一気に読んでしまいました。単行本の最後に収録されている「ハンドスピナーさとり」はタイトルの時点で既に勝っているなど思いました、最高。

会社員 / 小野塚博之

- トリッキーで飄々とした作風が好きです。

マンガ研究・ライター / 会田洋

## 「星の砂 雨野さやか短編集」雨野さやか

- 「イチゴイチエってなに？」描かれるようなドラマチックすぎることなんてそうそう無いんですけど、他人の話は良いように見えたりするもので、意外と自分では気付いてなかったりするのかもしれない。一瞬でも一生でも、きつとそれぞれに意味があって、「よかった」と思える出会いを一つ一つ大事にしていきたいな、と思いつくことができる、淡く優しさの籠った短編集。

会社員 / 伊東敬祐

## 「星明かりグラフィクス」山本 和音

- 美術大学を舞台に " 才能のある奴に出逢ってしまう " ドラマを紡いだ秀作。普遍性とオリジナリティの両立が素晴らしい。

ライター / 福井健太

- 自分の才能を活かしてなにか始めるときのワクワク感がテンポよく描かれていて、自分もなにか新しいことを始めたくくなります。それだけではなく、万能感のある子供の状態から、自分にはできないことを認識して、大人になる一歩を踏み出す過程も描かれています。それなりに楽しい現状に甘えず、先を見据えて立ち上がり旅立つ強さを与えてくれます。一歩踏み出す勇気をもらいたい人にお勧めのマンガです。

Sler システムエンジニア / 廣瀬公将

## 「正直不動産」大谷 アキラ、夏原 武、水野 光博

- 人生でお世話になる機会が少ない店ではありますが、いざ不動産に行くとなったら担当を疑い深く見てしまいそうな、素人が知る由もない業界の裏話の数々。家を買う前、売る前、借りる前には絶対読んでおいたほうがいいです！ここまで書いてしまっていていいんですか？

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

- 最初は、いけすかねーマンガだなーと思って失敗したなーって思った瞬間にガラッと雰囲気が変わって一気に引き込まれました。

PENICILLIN / HAKUEI

## 「生理ちゃん」小山 健

- 最初は絵の印象も手伝って、ちょっと引き気味に読んでいた。でも、どんどんと引き込まれて、途中からは「わー！生理ちゃん……！！」と、半泣きでつぶやきながら読んでしまった。なにがって、女性の弱さやつらさ、理不尽やその他もろもろの多難に、生理ちゃんは寄り添ってくれる。一方でダメさや至らなさもちゃんと叱る。そのバランスがあまりにも絶妙で、一羽を読み終わるたびに深呼吸をしてしまうほど。女性であることに疲れた時や、ふと考えこんだ時、手に取ってほしい。こんな味方がいるんです、本の中には。

フリー / 田中香織

## 「青のフラッグ」KAITO

- 甘酸っぱいじれたい青春少年漫画かな、と思い読み始めたら！意外な展開もありでおもしろい！
- 主要キャラ4人の心の動き、それぞれの抱える事情を巻き込んで進む日常は、ただのボーイミーツガールものとは括りには出来ない。シリアスなシーンのキャラの描写に息を呑んでしまい、ページを捲る手が止まった。一味違った恋愛もの、青春ものを読みたい方に推したい作品。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

ジュンク堂書店池袋本店 / 杉佳尚

## 「青の花 器の森」小玉 ユキ

- 職人同士のプライドがぶつかり合う事で想像以上のものを産み出すストーリー展開に魅せられて ...

(株) エフ・ジェイ エンターテインメントワークス / 阿部大介

## 「青野くんに触りたいから死にたい」椎名うみ

- 絵が可愛いのに、読んでいくと容赦なく心臓を刺してくるみたいな感覚になります。痛々しいし切ない、なのに凄く強いパワーを感じて読むのがやめられないです。幽霊モノなのでしっかり怖くてゾッとしますし、謎が深まる展開も面白く、登場人物達の表情と眼の光が病みつきになります。

バンドマン / ターシー

- 巻が進むにつれ作者がホラーの面で本気を出してきた！という感じがして本当に怖いと思いつつ、ワクワクが止まらない。とても計算が行き届いたクレバーな作品でありつつ、意図的ではないであろうヤバさが顔を出すのがたまらない。「すごい作家さんだ……！」と毎巻思う。

漫画ライター / 門倉紫麻

- 可愛い絵柄でちょっとエッチな幽霊ものラブコメ漫画と思わせておいて、読み進めていくと、どんどん期待を裏切ります。青野くん薄気味悪さ全開で怖い怖い。優里ちゃんの狂愛。青野くんのおまじないに隠された謎。生者と死者との境界線。歪んでいる家族。少しずつ謎が解き明かされるたびに、二人の恋がどんどん切なくなります。結ばれない、触れられない運命の二人がこの先どうなるのか展開が全く想像できません！個性的で強烈な作品だと思うのでぜひ漫画好きには読んでもらいたい作品です。

会社員 / 佐々木つむぎ

- 大好きな彼氏に触りたくて、、主人公がとったある決意によって物語は始まる。初回から意表をつく展開で、クレイジーな純愛と隠された恐怖が不気味に忍び寄る。シーンに独特の魅力があり、ハッとさせられた。絵柄が巻を追うごとに物語にマッチしてきて引き込まれました。

マンガ家・マンガ編集者専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

## 「赤ちゃん本部長」竹内佐千子

- 典型的なおっさん部長が突然赤ちゃんになってしまったら？という作品です。基本コメディなのですが、人権とか生き方とか色々と考えさせられます。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

## 「赤狩り THE RED RAT IN HOLLYWOOD」山本 おさむ

- 戦争直後のアメリカでは、共産主義者の廃絶運動が起きていた。中でも、映画界に対してこそ、その強烈なレッドパーズの波は押し寄せていたのだが、その赤狩りに抗する態度が生み出した名作が、かの、「ローマの休日」だった…！ 圧倒的な事実調査が下敷きにされていることが画面からひしひしと感じられるこの作品の最大の特徴は、コマの一つ一つにあふれるオヤジたち。どのページをめくっても、ひしめくオヤジ、オヤジ、オヤジ。そのオヤジは一人一人がとてつもなく立派で存在感があり、情けない様をさらすオヤジでさえも、自分の人生を引き受けて、最高の表情をしているのです。超骨太本格ドラマ。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

## 「千年狐 ～千宝「搜神記」より～」張 六郎

- 中国古典をベースにしたオムニバス。どの話も、全部楽しい。人と人非ざる者の交流というパターンは今までもたくさんあったけど、これを読んで、まだまだ描き尽くされていないと思いました。絵も上手く、キャラクターも魅力的で、話もコメディと思わせておいて、しっかりシリアスな部分がある。これからますます楽しみです。

主婦 / 堀江千秋

- 中国の民話が背景に持っている思想の読み味に、作者のオリジナリティであるコメディチックなやり取りでの味付け、そして高い画力。長く楽しみたいと思うシリーズ。

往来堂書店 / 三木雄太

- 「搜神記」という中国の大昔の文書をモチーフにしたマンガです。昔の怪異だ妖怪だなんてものを集めた本が好きなた方には何となく伝わるかと思いますが、この手の話って基本的に伝聞形式で書かれていて、主観がなくおそろしくドライな印象を受けませんか？ いや何かやべえ奴いたけど大丈夫なの？ とか、その人死んじゃったの？ どうなったの？ みたいな。そういうオチの無さが妙に不気味に思えて震え上がってたものですが、このマンガは化狐が主人公。人界の様々なことに首を突っ込んだり、あるいは人の愚かな営みに巻き込まれたりする様が描かれます。けっこう人死が出たり、人間のエゴで妖怪達が酷い目にあったりすることもちょいちょいあるのですが、妖怪だけに人間とは世界観がどこかズレているのか、軽口を叩いたりと妙に緊張感のない様がしばしばあり、それがいやに愛しくなってしまう。容赦ない古の人の世界と、絶妙にコルい妖怪達のギャップがたまらない作品です。

アニメイト秋葉原 キャラクターグッズ担当 / 岡部真矢

## 「戦うグラフィック。」西野杏

- 才能が主題となる美大とは違い、スポンサーからの依頼を受け作成する広告デザイン業界の話なので、青春ものというよりもビジネス業界ものとしてよくできていて面白かった。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

## 「浅野いにお短編集 ばけものれっちゃん / きのこたけのこ」浅野いにお

- 一昨年の「零落」や今年の「勇者たち」、そして「デッドデッドデーモンズデデデデストラクション」。最近の浅野いにおの諸作品に対しては、安易に語る言葉が出てこない。平成を代表する作家を一人挙げろと言われたら、この人になるかもしれない。この短編集は「まあ読んでみて。最初の表題作で肌に合わなかったらやめて」と人には言います。でも家では、本棚の一番手に取りやすいところに置いています。決して気軽に（気持ちよく）読める作品群ではありませんが、マンガって現実に対して何の意味があるのかな？ と疑問に感じたら、浅野いにおを開くことにしています。別に答えが書いてあるわけじゃない。ますますモヤモヤするだけ。でもそこがいいんですよね。

読売新聞文化部編集委員 / 石田汗太

## 「潜熱」野田彩子

- 全3巻が完結。悪い人、怖い人の魅力が容赦なく全編にあふれていた。ラストの「後ろ暗い幸せ」の描き方も最高過ぎる！ 個人的な萌えを完璧に満たしてもらいました（……と思っている人は多いのでは）。以前から大好きな作家だったが、この作品でエンタメ作家としてさらに突き抜けた感じがする。始まったばかりの新連載ものすごくおもしろい……！

漫画ライター / 門倉紫麻

## 「素敵な彼氏」河原和音

- 「お約束」から飛躍するヒヤヒヤ感と、「予定調和」的な安心感の絶妙なブレンド。空回りヒロインと一緒に薄笑い男子に翻弄される快感。

朝日新聞記者 / 小原篤

## 「創世のタイガ」森恒二

- 太古の世界へ飛ばされた主人公タイガとその仲間が、原始時代でどう生き抜くかを描いた漫画です。大昔に生きていた巨獣や人々が登場し、生命の営みや生活様式、人間模様を知り、タイガが成長・覚醒していく様子がとても面白いです。

デザイナー・シンガーソングライター / 平松新

- 自らが作ったサバイバル漫画『自殺島』を倒しに来くるとは！『ホーリーランド』から積み上げてきた執念ともいえる生への世界観は今回も健在だ。今回は古代にタイムスリップした若者たちの話。タイムスリップという最早古典の世界を、生きるというのはどういうことなのか、静かに、そして確実に、読み手に語り掛けてくる。ネアンデルタール人が登場してからのノンストップでスリリングなストーリーには胸が熱くなる。孤高の漫画家「森恒二」から目が離せない。

リリカル株式会社取締役デザイナー / 北山友之

- ホモ・サピエンスとネアンデルタール人の戦いはじめ、マンモス等巨大哺乳類からのサバイバル。前作「自殺島」とは一味違う切り口に感服。ドキドキ・ハラハラが止まらない！

本と文具ツモリ / 津守晋祐

## 「総天然色 バカ姉弟」安達哲

- ただの癒し系ギャグと捉えてほしくない漫画です。個人的な解釈としては、同作家の「さくらの唄」(全3巻)という究極のウツ漫画とテーマが同じだと思っています。もちろん主人公のおねいと弟は可愛いし、周りの登場人物たちも魅力的なのですが、完全カラーで、独特な世界観とノスタルジックな空気、それでいて共感と笑いが含まれていて、最終的には癒されます。(個人的な話ばかりで申し訳ないですが) 安達哲という作者を、漫画に限らず全ての表現者の中で私は一番に尊敬しています。本当にすごいです、この作者。ヤンマガの週刊で5巻、月刊誌に移って2巻目が2018年9月に出たので、ここぞとばかりにエントリーさせて頂きました。(あんまコミックでない) アニメ化もされて文化庁メディア芸術祭優秀賞受賞まで取ってるのにいまいちメジャーになれきれないので、マンガ大賞で一気にブレイクしてほしいです。

バーテンダー / 村井真也

## 「大砲とスタンプ」速水螺旋人

- 銃と砲ではなく書類と判子で戦う兵站軍マンガ。もう8巻か。ちまちまちままと延々と描かれたコマを眺めるのがひたすらに幸せであったりはするんだけど。8巻にもなればその同じ筆致で戦争の悲喜劇も無常も描いちゃう。すごいな。『戦争は女の顔をしていない』のだ。

ソフトウェアエンジニア / 第貳齋藤

## 「第九の波濤」草場道輝、高谷智裕

- 都会っ子が、一目惚れした女の子に会うために、九州の水産大学に入学するっていうよくあるといえばよくある、知識系青春学生ストーリー漫画。でもこういうテーマと構成の話ってやっぱり面白い。それに作者がしっかりしてなきゃいい素材でもダメになってしまうケースもあるので、やっぱりこの作品は良作だと思います。絵柄はどこなくゆうきまさみっぽくて、すっきりとしていて見やすく、キャラクターの表情なんかも多様で思わずニヤニヤ読んでしまいます。知らなかった水産の知識や長崎の常識？みたいなのが知れるのも楽しいです。あ、一目惚れの女の子はすぐ東京の水産大学に行ってしまう(笑)のであまり恋愛主軸じゃないのも○。

バーテンダー / 村井真也

## 「地獄楽」賀来ゆうじ

- 山田風太郎的作風に興奮が止まらない！ 2018 年一番のエンターテインメント作品。

あゆみ BOOKS / 土屋修一

- 桃源郷のような島で繰り広げられる極彩色の地獄絵。希望があるとは思えないのに、誰も絶望していない。彼らの行く先に何が待ち受けているのか、見届けるのが怖くもあり楽しみでもある。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- すごいぞ、このマンガ…何もかもが感じたことのない面白さがあります。鳥肌が立ちました。主要人物だと思っていたキャラがどんどん死んでいくとか自分の想像の遥か上に行く創造力に次は何が起きるのか期待せずにいられないです。

丸善丸の内本店コミック担当 / 八重田幸子

## 「中学聖日記」かわかみじゅんこ

- ドラマ化もされましたが漫画めっちゃくちゃ面白いです。恋心って難しい…

Migimimi sleep tight / 涼平

## 「天国大魔境」石黒正数

- 何度読んでも新しい発見がある！これぞまさに石黒ワールド！舞台は荒廃された未来。施設の子供たちと旅する 2 人のパートがそれぞれ展開され、毎回謎が膨らみ続ける。期待値だけでもノミネートものの超傑作。刊行数が 1 冊のみということが唯一の欠点か。『それでも町は廻っている』や『ネムルバカ』とも共通らしきデザインが。そんな細かなところまで見所はたくさん。要注目作。

リリカル株式会社取締役デザイナー / 北山友之

- まだ 1 巻しか出てないのに早いだろ、という意見、ごもっともだと思います。私もそう思います。ただこれはもう仕方がない。1 巻で傑作の予感（というより実感）しかないのだから仕方がない。てんでバラバラにみえるピースのひとつひとつが、最後に組み上がったときに見える景色。ものすごくてのしみです。よろしくおねがいします。

オリオン書房アレア店 / 池本美和

- ここ最近、終末ものやディストピア漫画ブームがきてる気がしてます。もともと好きなジャンルではあるのだけど、その中でも特に好きなのが、ディストピア や一度何かが終わった世界。人類は…どっこい生きてる！という流れのもの。悲劇や悲しみ、時にあっさり人が死ぬ世界にあって、悲壮感や焦り苛立ちだけでなく、どこかあっけらかんと、どこかおらかな人が描かれてるのが好きです。きっとそんな人たちに人間のたくましさと人類の希望を重ねてるんだと思う。ハッピーエンドになるかもしれない。そんな希望を持ちながら読み続けられそうな漫画。

鳥取県高等学校美術教員 / 佐川由加理

## 「天地創造デザイン部」たら子、蛇蔵、鈴木ツタ

- 「万能の神は…そこに住まう…動物たちを…造ろうとおもったけど面倒になって 下請けに出した」と、とってもわかりやすい出落ち（スミマセン）。デザインを担当するのは「天地創造社 デザイン部」（なぜかみんな日本人の名前）で、神様は思い付きでオーダーしてくるクライアントという扱い。「すごい高いところの葉っぱが食べられる動物」やら「新しくてももしろいカエル」、「かわいくてかわいくない」等のむちゃぶり。これに、個性的なデザイナーたちが応じ、変な動物が採用される、というストーリー。「え、こんな動物ほんとにいるの??」という驚きとともに読みみただけです。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

## 「東島丹三郎は仮面ライダーになりたい」柴田ヨクサル

- 傑作の予感！

株式会社 TORICO 代表 / 安藤拓郎

## 「働かざる者たち」サレンダー橋本

- 本気のお仕事マンガだった！「意識低い系」どころか熱血！タイトルで損してる。結構ど真ん中に熱いセリフを放り込んでくる。

株式会社ヴィレッジヴァンガードコーポレーション 店舗開発課 / 大山敏樹

## 「二月の勝者 —絶対合格の教室—」高瀬志帆

- 中学受験という新しいテーマ！

作家 / 海猫沢めろん

## 「二匹目の金魚」panpanya

- 前回の作品より、更にお気に入りです。私なら、あのスペースを見つけたら、絶対出ていかないで、諦められた頃にこっそり出てきて、私だけの秘密にします！

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

- panpanya の発想力と描写力は、日本の宝だと思っています。今作も最高。panpanya の作品は、すべてのマンガ好きに、全作品勧めたい。

音楽家・農家 / 谷澤智文

- もうとにかくpanpanya先生が好きすぎる。寡作な作家さんなので毎年必ずマンガ大賞に推せるわけではない。18年に発売されたこの作品も素晴らしかった。中身だけでなく装丁の美しさ、細かいところまで全てが作品の世界観を形作っているのが痺れる。

三省堂書店 / 内野智未

## 「日々是平坦」迂闊

- 学生純愛物語パートとボンクラ高校生パートで描かれる連作シリーズで、純愛パートの初々しさとボンクラパートの対比が見事で爽やかな読後感を台無しにしてくれつつも読後に「ただただ面白かった」となる見事な構成。

住職・ライター / 蟬丸P

## 「猫恋人」イシデ電

- 猫は可愛いだけじゃない、美しい獣なんだということを、イシデ電さんのマンガを読むと思い出します。しあわせも、痛みも、切なさも、すべては猫とともにある。猫のいる場所には人がいて、人がいる場所には恋がある。『猫恋人』というタイトルも秀逸です。表紙のデザインもとても可愛らしくて、飾っておきたくなるような素敵な本です。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

## 「八百森のエリー」仔鹿リナ

- 仲卸が舞台の農業漫画。農家が舞台なら作り手の苦労話を面白おかしく語れるけど、卸業ってどうなんだ？上と下との板挟みで右往左往するのかなと思ったけれど、予想とは違った右往左往をしてくれます。トウモロコシとか桃とか。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

## 「彼女、お借りします」宮島礼吏

- スタート2ページ目で彼女にフラれ、やけ気味に申し込んだのが「レンタル彼女」。いかがわしくもリアル。そこに来たのは、S級美女の水原千鶴。振り回されながらも、その率直さと優しさに少しずつ惹かれていく。そこから始まるドタバタラブコメ。いいですね。絵柄も今風でかわいい感じ。マガジンならではの。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

## 「秘密 season 0」清水玲子

- 無印の秘密も名作でしたが、season 0は更にキャラに味が出ているが故に、物語へ感情移入し毎回号泣です。個人的には4巻の可視光線が好きです。主要人物たちが好きすぎてネットで画像を探してしまいます、、、。

マンガ家・マンガ編集者専門鍼灸師 / 碓氷麻里子

## 「微熱空間」蒼樹うめ

- 親が再婚したら同学年の女子と姉弟関係に……。というのはよくある設定といえばそうだが、惹きこまれる面白さがあります。喧嘩をしたり、共に家族を思いやり、仲を深めていくのを見ていくと微笑ましく感じました。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤瑛

## 「不朽のフェーネチカ」竹良実

- ひょっとしたら電子書籍でのみの出版かも。85 ページの超、濃密読み切り作品。 聖人に列されること間違いなしのポーランドの老修道女、マザー・ドロテア。ただ、彼女は、単なる聖職者ではなく、その来歴と所業には、想像を絶する秘密があった…！ 修道院、東欧という我々の単純な類推を許さない世界を舞台に、「チョコレート」の箱にチョコレートが入っているほど、人間は単純なモノじゃないだろ？」という冒頭のジャーナリストの軽口が、真実を言い表しながら同時に軽口に過ぎない、ということをも、超越した構成力でまとめ上げた作品。85 ページで何度驚かされたか。前作「辺獄のシュヴェスタ」に引き続き、意志の力は悲劇を悲劇のままにしておかない、という強い主張が説得力をもって伝わってくる傑作。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

## 「舞妓さんちのまかないさん」小山愛子

- 毎回投票しています。とうとう八巻になってしまったので、今回で最後ですね…でも八巻まで発売されているという事実も応援している身としては嬉しい限りです！舞妓さんにはなれなかったけど、舞妓さんのまかないを作っていく少女が主人公です。食べるものや生活に制約のある舞妓さん達のために、色々なレシピを考えていきます。舞妓さんの知らなかった知識も覚えて一石二鳥！？最近は増えましたが、その中でも秀逸なハートフルごはんコメディコミックになります。

株式会社 TORICO コミック事業部 / 日吉雄

- 舞妓になるため、青森から状況してきたキヨちゃんとしーちゃん。しかしキヨちゃんは舞妓さんよりもまかないさんの方が向いていたようで…。自分にとことん厳しいしっかり物のしーちゃんと、ぼやぼや天然でもお料理上手なキヨちゃん。表舞台に立つ側と裏方さん。それぞれがしっかりとプロとして働いていて、お互いがお互いを尊敬している関係性が素敵です。キヨちゃんの前ではほっとできるしーちゃんが可愛い。キヨちゃんが作る普通だけど温かいご飯が幸せでおいしそう。何度も何度も読み返している漫画です。

声優 / 富岡美沙子

- 好きになってしまったんです。出てくる全てが愛おしい。ずっと見守っていたい。こういう漫画に今更ハマるとは思わなかったけど、出会いですよね。

WEB デザイナー / 河本智芳

## 「編プロ☆ガール」川崎昌平

- シンプル過ぎる絵柄で描かれる熱血出版業界ドラマ。斜陽産業と自他ともに認めつつも、それでも「出版の未来」への希望を失わず、奮闘する主人公を思わず応援したくなる。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

## 「辺境の老騎士 バルド・ローエン」菊石森生、支援 B I S

- 流行りの「なろう小説原作のコミカライズ」にはそろそろウンザリ気味の今日この頃ですがこれは毛色が違い過ぎるし、面白いです。(自分も含めて) マンガ読みの高齢化が進んできたのもあるのか、主人公が元騎士のジジイってのがまずカッコいい。ストーリーとしても、国の騎士と姫が結ばれなかったところから、結局ずっとすれ違う切なさ(でも心は…的なものも含めて)といった感じの全体的に切ないのかと思えば、年を取った大人の人間としての割り切りの良さとか強かさがまたカッコいい。ファンタジーとしての世界観もしっかりとしているし、ちゃっかり伝説の武器?的なものも出てくるし、おっさんの厨二ごころはしっかりと驚掴みにもしてくれます。こういう歳の取り方をしたいと思ってしまうファンタジー漫画です。

バーテンダー / 村井真也

## 「保安官エヴァンスの嘘」栗山ミヅキ

- 保安官と賞金稼ぎの恋愛頭脳戦。属性の強い面々とコメディの筋運びが完璧に融合している。

ライター / 福井健太

- くだらなさ過ぎて大好き。

PENICILLIN / HAKUEI

## 「邦画プレゼン女子高生 邦キチ！ 映子さん」服部昇大

- 著者の服部先生の他作品「日ポン語ラップの美一子ちゃん」も「日本の美子ちゃん」(6代目)もそうなのですが、とにかく元ネタにたいするリスペクト(!)が素晴らしい。ので、全く知らない作品の回でも気になって気になってしかたがなくなり、そのあとアマブラ(もしくはNetflix)で確認するという作業が発生し、1冊読むのに20時間くらい費やすことになった。これはすごいことですよ。映子さんのような視点で映画(もしくはその他のコンテンツ)をたのしむことができれば、きっとやさしい世界が広がるにちがいない。どんなものにでも魂は宿る。それを再確認させてくれたすばらしい作品。

オリオン書房アレア店 / 池本美和

- 邦画に対する愛に溢れたツッコミ。この作品の素晴らしいのは、そのツッコミのタイミングのよさ。もう抜群!

医師 / 岸本倫太郎

- その昔、レンタル店で埃かぶってるようなB級映画を借りては観てました。「なんでこうなった」としか感想が浮かばない映画も、最初からそのつもりで観れば楽しいです。そういうアプローチでこの漫画を読むと幸せな気分になります。保証はしません。

八重洲ブックセンター宇都宮バセオ店 / 山本さとみ

- 「映画を撮る」ではなく、「映画の感想を語る」漫画も増えてきましたが、おそらくこの作品が一番の極北ではないだろうか。感想というよりプレゼン、いやコントかも?作中で紹介される映画が、とにかく観てみたくてたまらなくなる。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

## 「僕と君の大切な話」ろびこ

- 自覚ない系美少女なのにストーカー気質で挙動不審な女の子と、頭良さそうなのに実は成績が振るわない、それでいて小説好きなメガネ男子。ともにヒトコトではとても言い表せないキャラクター造形なのだけど、とにかくそんな惹かれあう高校生男女を中心とした、ワイワイ文化系会話劇も連載開始からすでに4年目。ほぼ駅のホームのベンチだけで展開する第1巻はビックリだった。このあいだ発売された最新第5巻は群像劇の要素が前に出たけれど、それはストーリーが行き詰まったからというわけではなく、むしろ意味のある寄り道だし、相沢さんと東くんの仲は、その寄り道を経由することで深まり、互いに半歩踏み込む展開に。絵柄のかわいさ。練られたやり取り。もどかしさをこそ楽しむ永遠の高校生活的日常……。赤面、哄笑、当惑、安堵、抑えつつの歓喜、自意識過剰な自分にツッコミを入れる妙な冷静さなどなど、描き込まれる表情のひとつひとつ、ヒトコマヒトコマが見応えありの、ほんとうにおもしろい作品。いまの高校生を取り巻く現実をきちんと意識しつつも、夢のようなたのしい理想の日常を描く、少女マンガの今日的到達点だと思う。同時に、読者であるリアルの中高生にとっては現実の息苦しさ、生きづらさを忘れさせてくれる質の高いファンタジーではないかと……。などと、変にまじめに語ってしまったが、でもそう思う。未読の方はぜひ単行本既刊5冊をまとめ買いして、日の射し込むソファにでも寝ころがって、一気に行っちゃってほしい。楽しい気持ちになれるはず。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

## 「僕のジョバンニ」穂積

- 呪いにも似た愛の物語。残酷なまでの才能と、それと向き合おうとする「持たざる者」。チェロを介して因縁めいた繋がりを持つ鉄雄と郁未、チェロを介してまた別の絆を育んでいく鉄雄と百合子。最初にストーリーの中核となる因縁の発端を描いてから、徐々に人物が掘り下げられていきます。巻を追うごとに引き込まれます。

会社員 / 工藤圭

## 「僕はまだ野球を知らない」西餅

- それぞれの選手達が瞬間的な駆け引きの中で試合をしていたのかをこの作品を読んで初めて知りました。体育会系の人間はポジティブなのだと思っていた以前の自分にケツバットって感じです。

バンドマン / ターシー

- 相変わらず絵が独特なんです、つい笑っちゃうんです。周りで知らない人が多いので、勢いつけて、敢えての選択！！私野球のことちょっとしか知らないけど、面白いよ！

WEB デザイナー / 河本智芳

- 現在の野球界を揺るがす一大潮流、セイバーメトリクス。打率やホームラン数のような、旧来計測されてきた数字とは全く別のデータを元に、新しい野球戦略を考える手法です。これをベースに新しい野球マンガを作ったら…！というだけでも最高に面白い発想なのですが、それを、フィールド内の出来事だけでなく、それを大マジで実行に移そうとしている人たちの行動を描いたら…！まずは、工業高校を舞台に、グラウンドに金属探知機を埋めるところからマンガが始まってしまうのです。野球部を辞めようとするチームメイトにかける言葉は、「やめるな！」じゃなくて、「いらないだろうから、道具をくれ」。旧来の当然の物事やお約束の感情の流れは、一切そこにありません。でも、物語の根本は、弱小チームが新理論で結束し強くなってゆく、痛快そのもののストーリー。「一寸先はコンデンサ」という書き文字がまったくメインストーリーに関係なく背景に差し挟まれていたり、「まるやかな狂気」とはでんぱ組.incを卒業した夢眠ねむちゃんのエッセイ集のタイトルですが、まるやかな、ユーモラスな狂気が、意識的にも無意識的にも宿っています。笑いを搾り取られると思わなかった方向からこれだけ搾り取られる快感、最高です。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

## 「本田鹿の子の本棚」佐藤将

- どの話でもいいので、とにかく一話だけでもいいので即サイトに飛んで読んでッッ！！です。。ホントにこの一言だけです。何回生まれ変わっても、自分にはこんな発想できないです佐藤先生。。

バンドマン / ターシー

## 「魔法少女サン&ムーン」サメマチオ

- 完全飽和状態の魔法少女モノにババアをブチ込んで「あーハイ、そっち方面ね」と逆に使い古されたパターンの笑いに変えるかと思いきや、病気や惜別というしんどさで重りを加えておきながら、決して泣かせに行く訳でも無く、最後はカラッとした清々しさで人生賛歌の良作に昇華。本当に上手いと思います。その派手さはなくても確実に琴線に触れる作品力にやられて、新刊が出ると無条件で買ってしまおう作家さんです。

(株)首都圏 TSUTAYA / 井出麻悠美

## 「魔法少女は死亡する」シギサワカヤ

- 魔法少女って大変だなあ（そういうお話ではありません）安心のシギサワ節なので安心して勧められます。今更気になってしまったかものですが、シギサワファンってドM率高いのでしょうかひょっとして。辛いことがあっても、なんとか乗り切って少し幸せになれるかもしれないなあと思わせてくれる一冊。

めがねっ娘教団大司教 / 田中海渡

## 「夢で見たあの子のために」三部 けい

- 「僕だけがいない街」の三部けいの作品なので、かなり期待大で読み始めたのだけど、大正解！小さな頃の事件が原因で死んだと思われていた双子の兄弟。主人公千里は夢で一登の見ている映像が浮かんだところから、生きていると思い、一登を見つけるために、事件に巻き込まれているミステリー。もしかしたら自分の半身が殺し屋をやっているかも!?なんて、常識では考えつかない展開なのに、なんだか手に汗握って読み進めてしまいます。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

## 「木根さんの1人でキネマ」アサイ

- 映画の趣味って、書物やらマンガやらアニメやらの趣味と同じようにあまり人に知られたくない（頭の中を見られている感じ）ですね。だけど、仲間は欲しい。そんな木根さんの姿は大変痛々しくかわいいと思います。

会社員 / 林礼春

## 「木曜日のフルーツ」石黒正数

- とにかく絵柄とキャラが可愛くて最高です。だいたい見開き2ページで1話完結というのも最高で、1日1話ずつとか自分のペースでゆっくり味わっていくことが出来るのも嬉しい。毎日少しずつ読んでると、だんだんフルーツ達がより身近に感じられるようになっていき、普通にその辺にいるんじゃないか？というような感覚になれて楽しいです。

会社員 / 小野塚博之

## 「夜と海」郷本

- 登場人物自身も言葉にできていない感情を表現するために、背景をポエティックに使ってイメージを与えているところにとってもグッときた。マンガらしい。

往来堂書店 / 三木雄太

## 「夜廻り猫の展覧会」深谷かほる

- ドテラを着た猫の遠藤さんが夜な夜なまちを徘徊して、「泣く子はいねがー」と、涙のにおいを捜しています。ちょっとへこんだときに読むと、元気になるれます。つらさを明日の元気にするためにマンガはあるんだなーとも思います。ふられたつらさも、一人さみしい老人も、シングルマザーの大変さも、そして猫たちの生きにくさも、まとめてほっこりさせてもらえます。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

## 「勇者たち」浅野いにお

- 魔王を倒したあとの世界はどうなるのか？ これもまた、ロールプレイングゲームのメタ的展開といえいいのでしょうか。『まおゆう』をはじめとしているいろいろな作品が出ましたが、作者ならではの心の闇を扱った展開が楽しめます。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

## 「竜と勇者と配達人」グレゴリウス山田

- 最初は超斬新な切り口の異世界お仕事マンガだと思ってました。いや、それはそうなんだけど、巻を進めるごとに、ファンタジー世界を支えるいろいろな職業の人のトラブルと苦悩（だいたい笑える）、異様に細かい設定と端役まで魅力あるキャラクターたちの小気味のいいやりとりを通じて、圧倒的な奥行きが描かれていきます。お仕事というよりもはや社会。知れば知るほどおもしろく読めるマンガです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 「中世実在職業解説本 十三世紀のハローワーク」のグレゴリウス山田。「教会によるセーブ」があるぐらいのゲーム的なゆるい（はずの）「剣と魔法」の世界に、広範な（そして邪悪な）中世知識をブチ込んで強烈に味付けした独特の世界が楽しめる。そうか…モンスターにも狩猟権があるのか…的な。ごちゃごちゃした書き込みは西川魯介の系譜な気がする。

ソフトウェアエンジニア / 第式齋藤

## 「恋せよキモノ乙女」山崎零

---

- バンチコミックスといえば、今回は極主夫道が人気を博しそうですがあえてこちらの作品を推します！少女漫画のような恋する乙女のお話ですが、普段着が着物の主人公の魅力にひかれます。現実では、着物を普段着で着る人は本当に減ってしまいましたが日本の伝統を引き継いで行ければと思います。着物の似合う女性って素敵ですよ！

株式会社 TORICO コミック事業部 / 日吉雄

## 「恋のツキ」新田章

---

- もうドキドキだよ。恋から遠くなったところで生きてて読むと、ヒィィ！ヒャー！ってなった

カメラマン / 平沼久奈

## 「惑星クローゼット」つばな

---

- つばなさんが描く意識と無意識の惑星クローゼットはグロさとかが先行しがちだけど、今後の物語の展開もとても気になる。

ロングランプランニング株式会社 マネージャー / 小森和博

## 「憑依師」戸田誠二

---

- 今回の作品も、生きるということに対して、凄く考えさせられます。悔いのないように生きなきゃ、という熱い気持ちになります。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代